

新しい家庭科

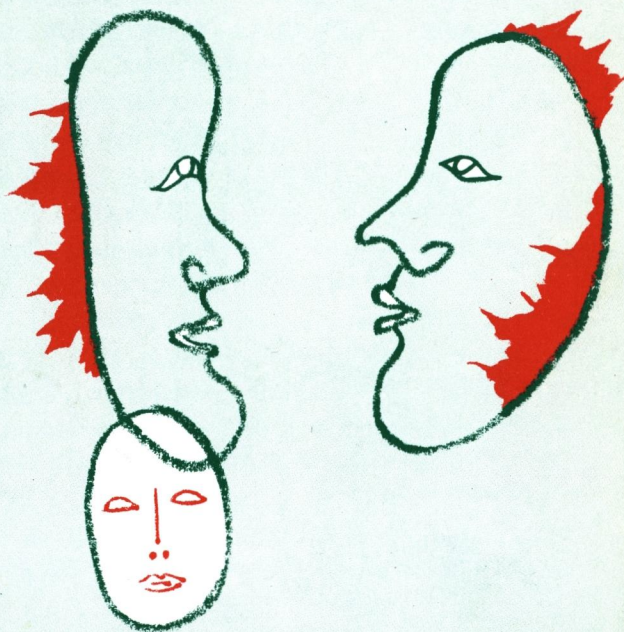
ek

ウ

イ



5月号



生活者になる

溝上 泰子

わたしは、56年末まで、約1年、東京以西の九つの小学校で、六年生の家庭科の授業をした。そのねらいは、▶「生きる・生活する」である。内容は、(1)一人で生きる意欲、(2)が、人は一人であって一人でない。(3)だから、日々のあたりまえの行動が大事である。しめくくり、▶地球上のどこで、どんな人とでも共生できる生活者になる、である。授業後に、児童が書いてくれた感想文におどろく。わたしは、これらを「子どもと学ぶ生きる哲学」と名づけている。

ある小学校の六年生一同に、一緒に勉強してくれてありがとう、と礼状を出した。すると、クラス全員から返事がきた。その中の一女児は、15項目をあげて、自己紹介をしている。その最後の一つ「将来は？」。もちろんおよめさん。そして、職業は、評論家とか弁護士とか歯医者。この黒点は彼女のもの。これに対して、一男児は「ぼくのプロフィールを書きます」と、生年月日、星座、血液型など10項目をあげているが、「将来は？」はない。もちろん、おむこさんという力みもない。女児が、およめさん、と力むところに、わたしは、未来を認識して、いま生きる教育の原理をさぐる。

家庭科は、生活者のごくあたりまえのことを、手がかりにする教科で、教師の独自性が一番、とわれる。教師自身が、まるごとの教材にならねばならない。家庭は、男女でつくる。だからといって、単なる男女平等主義へおちいることなく、「生活者同士水いらず」への道をひらくべきである。



巻頭言 〈生活者になる〉

溝上 泰子

* 父よ、母よ、教師よ

お父さんったら、お母さんったら、先生ったら—子どもの詩にみる心

永易 実 2

ああ、花の高校受験生……………門野 智子 4

JES (日本教育規格)……………井田 朋子 7

家庭科教師たちよ!……………遠藤 由紀 10

家庭科教師たちよ!……………木本 綾子 12

新しい家庭をつくる日に—父母へ……………駒野 彰 14

「子どもの村」に虹の橋を……………徳村杜紀子 18

アメリカの子ども・日本の子ども……………酒井はるみ 22

✓ * 新しい家庭科を創るために

小学校では 食べ物の授業……………名取 弘文 26

中学校では 共学の食物学習(1)……………熊本家庭科サークル 32

高等学校では 性と女性解放(1)……………寺島 紘子 37

大学では 大学生の生活認識と家庭科……………田中 恒子 43

* 発言 学習の主人公たち 技術・家庭科は男子も女子も同じことするんだよ

……………武蔵野市立第4中学校生徒 55

明日の家庭科教師たち 私が受けた家庭科・私が見た家庭科……………佐藤 光美 59

市民として 高校家庭科、なぜ「女子のみ必修」……………富田 昌志 62

親も言いたい 共通一読ってなんだ……………玉川 洋次 64

教師のつぶやき ミしらふのK男はどこに?……………竹内みどり 66

* 連載 counselling入門(現場から)「聴く」こと……………児玉すみ子 49

視 点 いのちのちから……………長谷川 孝 52

Weの読書室 家族の光景……………横山 雅子 68

テレビ残像 『北の国から』子供も見られる時間帯に

再放送するのが望ましいと思われ……………野村 康子 69

K子さんチのね子たち チー子の由来……………さとうけいこ 70

丙十舞雅里バラード (2)……………門野 晴子 54

波 父よ、母よ、教師よ……………半田たつ子 71

新刊 13・こんにちは! 58・資料 73・十字路 76・わたくしからあなたに 78・アンテナ 79

“WE”EDITOR'S NOTE 80

表紙 馬場洋子

お父さんったら、お母さんったら、先生ったら

—— 子どもの詩にみる心 ——

永易 実



子どもたちは、自分の目にうつる父母や教師に向けての心を、こう歌いあげている。そこには、未発達であるがために、誤ったものも、浅いものも当然ある。しかし、つくりごとを知らぬところから、事実をくもらなくとらえ、歌いあげているものも、また多い。その姿を、その心を、あるがままに読みとり、考えてみることから、今日の父母や教師の姿を考えたい。——こう考えて、この詩集を編むことにする。

おとうちゃんたら 四年 小関 弘光

おかあちゃん、酒やらない。

おとうちゃん、どろぼうみたいに

自分で、金色のかんにいれる。

わかす時、

ばれないように、ふたしてわかす。

コップに全部いれて、こたつにはいる。

まわってくると、

「弘光のむか。」とふざけてくる。

うんとまわってくる、

おこりっぽくなつて、

口より先に手でぶつ。

「軍隊でしこまれたんだ。」

といって、

軍隊がいいようにいばる。

日曜日 五年 峰岸 文久

おとうさんたら、

日曜日になると、

「文久、がんばらなくちゃあ。」という。

ぼくは、この言葉においだされて

じゅくに出かけていく。

夜 六年 高杉 悦子

母は、会社の新年会に行った。

父は、会社を休んでねている。

「おなかすいたなあ。」と、

はらをおさえていうわたしに、

「自分でつくってたべな。」と、

父が、ねがえりをうった。

仕事 六年 高橋 智子

ぐうんと、仕事のへってしまったこのごろ

おとうさんは、

小説を読む、映画を見に行く。

朝は、会社へ仕事をもらいに行くけれど、

ほんの少しだけの仕事に

むつつりしてテレビを見ている。

この前までは、

ひっきりなしに動いていた機械も、

音をわすれたようにだまりこんでいる。

竹馬 三年 鶴田 真弓

竹馬にのつていたら、

お母さんが、

「ちょっとかして。」と言った。

だけど、「高くてこわい。」といって

のれなかった。

私は、

トン、トン、トン、トンととんで、
「ああ、いい気分だ。」と言ってやった。

おかあさんたら 四年 中山 祥一
うちのおかあさん、

今、山一しょうけんにつとめている。
だから、いつも頭をセットしている。
夜、

「きょうの頭、かっこいいね。」

と、弟にいわれて、

「そう何歳ぐらい見える。」ときいて、

「二十七歳ぐらいだな。」といわれて

「きょう、勉強しないでいいよ。」

なんていっている。

うちのおかあさんたら、

いつもこうなんだから。

母 五年 中村 悦子

細いはりを持ってどんだんぬつていく母の指
には、いつの間にかひびができています。

その指で、糸をあやつる。

はりば、着物の上を休みなくおよぎつづけて

いるが、

また、からだにこたえて、

はりが休み、

入院などにならないければよいが。

永易先生を 五年 松井 文子

はげしく音をたてて入っていくと、

おかあさん、

「いくら、からだが重くたって

そんなにドタドタしなくてもいいでしょ。

永易先生に言っちゃうわよ。」

と、いつも、いつも、こういう。

まるで、永易先生を神様みたいに思っている

おかあさんなんだからな。

先生 三年 仁田山 晃子

ながやす先生は、とてもいそがしそう。

だけど、いつもわらって教えてくれる。

先生ったら、

おこるときは、

「バカがそろつてるのかな。」という。

ながやす先生 三年 平山 宣弘

みんながよくすると、

先生ったら、すこくにこにこして

「三年一組には、よい子ばかりそろっている

んだね。」

といってほくちをほめてくれる。

ヘチマ 三年 梶原 洋介

ヘチマのびておれていました。

次の朝、セロハンテープでとめてありました。

きつと、

ながやす先生がやったんだと思いました。

たばこ 五年 大谷内 政一

二階のきょうだいの引き出しで

たばこをみつけて火をつけた。

すつてみたらなんともなかった。

二回目ですつて、はなから出してみたら、

はながいたくなった。

それでも、もう一回すつたら、くるしくなっ

て火をけた。

口をつけるところ、白かったのに

黄色くなっていた。

これがガンのもとだと思った。

おとなは、バカだと思った。

先生も、バカだと思った。

〈東京都新宿区立戸山小学校〉

父よ、母よ、教師よ

—— ああ、花の高校受験生 ——

門野 智子



私は今、「受験戦争」の真ただ中にいる。小さいころから新聞やテレビのドラマなどでよく耳にしていた「受験戦争」が、とうとう自分の問題になってしまった。でも、まだそれが信じられないのが本音である。模擬テストや何かでたまに机に向かって勉強すると、「ああ、私も花の受験生なんだなあ」と、まるで流行の波にでも乗ったような気分であるけれども、こんな私でも一時、志望校目指して一生懸命になりかけたこともあった。私は以前からすぐ行きたい高校があった。その高校は、現在やたらと規則の厳しい学校の多い中では、数少ないわりと自由な学校で、ちょっとはマシだという噂をかねがね聞いていたところから、私には合っているんじゃないかと考えていた。

それにもう一つ、私の小学校のときの若い女の先生が、担任になったわけでもないのにすごく気が合って、中三になった今でも友達としてつき合っている。その先生の出身校でもあるから、私には憧れの高校で、どうしても入りたいかった。その高校は学区が違うので、籍を寄留に

して移さなければ受験できないのだった。

しかし、私の「オール3」の成績ではだいぶがんばらないと危ないところだった。だからといって特別に勉強したわけでもないけれど、いつもすごく不安で、あせりとイライラも重なり、高校の話になると顔がひきつる思いだった。私もいわゆる「受験地獄」の苦しみというやつを少し味わっていたのかもしれない。

それと、「受験地獄」のせいかどうかはわからないけれど、寝不足のときなど、サーフボードに乗って波に追いかけられたり、五十メートル走のテスト中などの夢を見たり、おかしい夢をよく見たものだ。夢の中で波乗りしたり、走ったりしているので、次の朝はよけいにぐったりして、かえって寝たほうが疲れるなあ、と思ったときもあった。

そんなときにかぎって、デキの悪い模擬テストの結果がコンピューターの数字となって返ってくる。非常に情けなかった。情けないというのは結果だけでなく、たまりたまった疲労とあせりのせいでもあった。

それにあの模擬テストの結果というのは、細長い紙にコンピューターの小さなカタカナと数字で表してあるだけのもので、何となく悲しいものだ。何人中何番とか、偏差値なんかも打ってあって、とにかくズラッと受験生をたてに並べたのがひしひしと感じられた。でも実際の話、模擬テストというのはそういうものなのだろう。わかっていても、やっぱりあのコンピューターの小さな文字は悲しかった。その結果の中に自分も並べられたという現実がまた、悲しかった。

毎月、毎月、テストの回数は多くなっていった。そのたび個人懇談も増えていった、私も最初は意地でもその志望校に行きたいと言いはっていたが、何となく先生が無理だというようなことを言っていた。私は、浪人してでも———と思っていたけれど、一回浪人を経験している兄が、「浪人だけはやめておけ」と言っていたので、考えが少し変わってきた。というのは、私の兄は私立のすべり止めを受けていないので、というか、私の家が受けさせてくれないので、当然私も一本勝負と決まっていた。

不安は高まるばかりだったが、成績のほうは相変わらずだった。母は「どの高校に行っても勉強するのは同じことだし、無理しないほうがいいんじゃない？」と言っていた。私もそれはわかってはいたし、自分の実力は自分がいちばんよく知っていた。あと、一步の、一步がどれだけ苦しいかが目に見えていた。でもやっぱり、みんなが苦しんでいる「受験戦争」の中で、一人苦しいことからのがれることは、何となく抵抗があった。あったけれども、もうこんな思いをするのはたくさんだった。このままでは頭の中がゴチャゴチャになってしまふので、もう考えるのもいやだった。

そんなひきつった中途半ばな日々が二カ月くらい過ぎたとき、結局、母が自分の仕事がいそがしすぎて寄留を忘れてしまい、その志望校は受けられなくなってしまった。そのときは「なんちゅう母親や！よくそれで保護者だなんて言っていられるわ。こんな親、今まで見たこともない……」とあきれて何も言えなかった。が、もしかしたら私にしてはそのほうがよかったのかもしれない。

そのことがあってから、ほんとに何かホッとしてあせりやイライラがなくなつたし、あの変な夢も気のせいか見ることともなくなつた。

そんなに一生懸命勉強していたわけでもないのに、やっぱり精神的にすぐくつらかったのだろう。

それでは、高校のランクを下げて、近所の公立高校を受験することに決めた。母は、「ここだったらだいじょうぶ、もし、ふつうに勉強して、地域内の普通の公立高校に入学できなかったら、それは学校の責任だから……」と言っている。

私の最後の個人懇談のときは、志望校も決まっていたので、母も先生も気がぬけたのか、私の将来の話をしはじめた。先生は「この子が結婚してお母さんになっても会いたいですね」と言い、母は母で、「そんなお決まりのコースを歩くなでとんでもない」と反論する。本人をはさんで、頭の上でピーチクパーチクと、人の将来について勝手に自分の意見をかわしている。私は二人にはさまれ、おかしくて下を向いて必死に笑いをこらえた。私の人生なんだから、私が決めるよ！

そんな、わずかな「受験戦争」の苦しみの中で、気がついてみると、私はいろんなことを知ったと思う。例えば、学校で一番をとった女の子。テレビドラマの秀才少女じゃないけれど、前に見たときよりもはるかにやせ細っていて顔も真っ白だった。何かものすごく強そうなものが感じられもしたけれど、寒そうな背中がとても痛々しくてかわいそうだった。それから、休み時間まで勉強する人、またそれを見て、自分でもできればやりたいけれどもそこまでできなくてよいにせめて、その人たちの悪口を言うようになる人など、「受験戦争」の裏表までしっかり見たような気がした。

他の人ばかりでなく、私自身もそうだった。私は前からずっと好

きな男の子がいて、三年生では同じクラスになった。最初は二人とも、だいたい同じくらいの成績だったけれど、三年の夏休みごろからむこうのほうが必要で勉強するようになり、二人の成績の差が少しずつ開いていった。それで結局、むこうのほうが私よりいい学校を受験することに決まって、今もたぶんがんばっているだろう。それで私は何だかすごく腹が立って、その子の悪口までいうようになった。

私は自分で「インケンな子」になっていくのがわかった。むこうがそれだけ勉強したのだから、成績が上がるのはあたりまえのことなのに、私としては先を越されたみたいで不愉快だった。ずっと好きだったはずなのに、そんなことでその子を憎んだ自分がとてもいやだった。「受験戦争」というのは、人間の心も変えてしまうのだろうか。

それでも、その戦争の中に自ら進んでいく人たちがほとんどなのだ。それはそれで、その人の道なのだから自由だし、立派だとも思うけれども、みんなのただひたすら勉強する姿は、受験勉強をするために生まれてきたように見える。誰にも文句も言わず、疑問にも思わず、ただもくもくと勉強をしているのが不思議なくらいだ。

もともと、そうさせるのが今の日本の教育なのかもしれない。毎年、年中からたくさんさんの受験生を出しているということは、その妙な教育が成功しているということだからよいに恐ろしい。

しかし、私たちは、いつもの先生たちのしらじらしいおどかしやいやがらせにもめげずにがんばっている。先生はすぐ「そんなんしてたら願書、書いたらへんぞ——」とほんとにくだらなことを言

ってはおどかす。もともとそんなことくらいでビクビクするような受験生はほとんどいないけど……。願書を書くのが先生の仕事でしょ？ みえみえのキョウハクだからシラけるんだ。

でも中には、私を合格祈願に連れて行ってくれた先生もいる。仲良しの国語の若い女の先生が、京都の北野天満宮に誘ってくれた。そこで絵馬を買って、墨で名前と志望校名を書いて、そのおふだをかけようとしたとき、おふだは手からツルンと落ちてしまった。私は「あー、落ちたあー」と思わず叫んだ。辺りにいたたくさんの参拝客は、一瞬、息を呑んだ。そのうちどこからともなく大きなどよめきと笑い声、私は目の前が真っ暗になるのがわかった。冷や汗をかきながら必死ではほえみ、足元の絵馬を拾った。

もし、あのまま志望校を変えていなかったら、もうあのとき泣きくずれて立ち直れなかっただろう。先生も笑いをこらえて必死でなぐさめたり、冗談でごまかそうとしてくれようとしたが、先生が一生懸命言葉を探して困っているのが私にはわかった。だから私も平気な顔で神社を出たが、帰りに大きなソフトクリームをおごつてもうまでは、心が落ち着かなかった。

何のかんの言っても、決戦のときが近づく。私立の入試がいよいよ始まり、異様に緊張している生徒、不安を吹き飛ばそうとして騒いでいる生徒、変に落ち着きかえっている生徒など、教室内はますますおかしくなっている。私もまだ心のどこかでおふだの落ちたことが気になっているのか、不安といえど不安である。万が一に落ちたときは、定時制に行くつもりだ。

どうぞ北野天満宮の神様、テストの問題のヤマがあたりますように……。



オギャアとこの世に生まれ落ちると、早々、赤ん坊はベルトコンベアーに乗せられ、巨大な刷毛でいつせいに塗られる。この機械は、J E S (日本教育規格) マークのついた商品を作るためのものである。この大量生産方式は、世の P T A 族には大変都合が良く、また、乗せられている当人たちにとっても、自覚を持たなくとも波に乗っていれば自動的のいつかは浜にたどり着くという、便利なシステムであるらしい。

物事を見とどけるのも納得するのも、人それぞれ、その物事によって、速さや方法が違うのだが、このベルトコンベアー方式は無情で、すこぶる機械的なものであるから、右も左もよく見とどけないうちに次の物を見ろと言われたりする。そして、結局ほとんどのものをいい加減にしか理解出来ずに、さああなたは大人になりました、大人としての自覚をしっかりと持って生活して下さい、などと肩をたたかれて機械から出る。(いわゆる) 大人から、道徳の本に書いてあるようなお説教や教訓をたたき込まれたところで、所詮指揮しているのは(いわゆる) 大人

である。聞く方は、自覚を持つまで待ってもらうことは出来ないから、そういう要求は我がままとさえ言われるから、常に、あくまでも受け身である。自分の足で、自分の意志で、その険しいでこぼこ荒野を踏みしめない限り、いくら「世の中というのは、人生というのは、どこでもこぼこで険しいんだぞ」とか、「ほら、ちゃんと踏みしめろ。どうだ、でてぼこなのかわかったか」などと叫んでもらっても、結局は頭や感触でしかわかっていない。体験したとして、偏差値競争で勝ち抜くための、ちっぽけな経験にすぎない。

一通りのことを、中途半端に押しつけられ、火服れの如く服れあがった皮膚は、マンネリ化した言葉で鈍感にさえなり、外に出ると、そこらじゅう、ベルトコンベアーで大きくされた人間でウジャウジャしているの、みんな自分が、幼児の頃から大して進歩していないことに気づかない。そしてそのような、流行の言葉でいえば、わかったぶりっこの、大人になったつもりの子供たちが、再び幼児に、世の中というのはなあ……などと、以前、わかったぶりっこの教わったことを繰り返しているのだ。この中から大人など、滅多なことでは生産されるはずがない。現に巷では、思考力の欠如の現れである、差別と偏見に満ち満ちたことを、さもあたり前そうに口に出している年ばかりの大人がひしめいている。

しかし、個人主義の子供を認めない日本では、成長期の少年少女が自覚を持ち始めるのを疎み、せつせとその邪魔をするので、なかなか、所得倍增政策ならぬ子供倍增政策の組織の中から抜け出せないものである。自分自身の足で歩き始めたくても、軌道に連れもどされてしまうのだ。

そして、ちょっと毛色の違う人間が出来てくると、この政策に誠

実な協力を惜しまない生産者たちは、確かにちゃんと塗ったはずなのにどこでどう間違えたものだろうか、と、頭をひねり、腕組みを
して考える。

「あなたどこで間違ったの？ あのベルトコンベアーの乗り心地が悪くて、途中でひっくり返りでもしたの？」と、本人にまで聞く。発見した時にうまくカバリーするか、なんとかして原因をつきとめてそこからやり直しをしなければ、規定の商品は出来ないの、あわてて駆けずりまわるのである。

本人は、自分という人間が失敗作であることを、その時悟る。

この「生産者」は、必ずしも組織のために労働しているわけではなく、一個の商品そのもののために働いているつもりの方も、大勢いらっしゃるだろう。しかし、そういうなまじっか良心的な生産者が一番こわい。彼らは、節操は持った方がいいと言いながら、規定にあてはまった考え方をじりじりと身につけていく。頭が柔かそう、実はまるで融通がきかない。矛盾した行動をとりながらも、君のために、という顔で、息せき切って走り回られると、絶対に文句は言えない。その方には絶大な感謝をせねばならず、その恩情に答えなければならぬ。だが、そこからベルトコンベアーの上にもどるといふのも、やはり出来ない。相手に自分をわかってもらう試みも無駄だった。その脅迫観念の板ばさみで、最後は人間嫌いや人間不信に発展するのである。

今、日本では、教育において文部省を重視しすぎる。

学校から夕方帰ってくると、すぐ授業についていくための塾に行き、夏休や冬休みとなると、学校を忘れないための宿題がワンサと

出る。それが十二年間続くばかりでなく、その前の期間は、次第に、学校へ上がるための準備期間になりつつある。そしてそれらすべても、考えてみると、大学へ行くためだったりする。

世間のイメージは、学校中退イコール敗北であり、イコール墮落である。つまり、そのようなイメージがつくことは、学校以外は頭がないということである。もはや、「教育イコール文部省」というイメージが、日本人の国民の頭についてしまっているのだ。これは恐るべきことである。

なにゆえにこう文部省ばかりを追いかけなければならないのだろうか。

なるほど文部省下の学校は便利であり、一流企業に入るためにも通らなければならない道となっている。

しかし、文部省への依存が、教師や親をすでに「教育者」と呼べない状態をつくってしまったているのである。教師は文部省学習指導要領に従って生徒を教育し、親は学校に合わせて子供を教育する。だが、それはもはや教育ではない。そこでは「個人差」というものが、忘れられているのである。「教育者」と呼ばれるべき者は、文部省、国家の大きさに目が眩み、教育が見えなくなっている。

私の場合は、登校拒否ではなかったが、不眠が重なったりして欠席していると、「とにかく学校っていう所は、行かなくちゃいけない所なんだ」と、くり返しくり返し、色々な方に言われたが、どうしても腑に落ちなかったのを、追求していくと、「行かねばならぬ」と、断言する人ほど根拠が無いことがわかった。学校は友とのふれあいの場で云々、と懸命に理由をこじつけているが、実は、学校を通らずにやっていくことに自信が無い、あるいは無かったただけなの

だ。成長過程には学校だけが頼りらしい。

学校というのは、元をたどれば、ひとつの合理的な教育機関にすぎない。教育における補助的な手段として生まれた学校が、今や、すべてであるかのような錯覚に陥っている。

確かに文化程度は高くなった。教育もそれなりに変わらなければならぬかもしれない。だが裏返せば、受験戦争のような非人間的な面が出てきた。教育は人間を主体としたものであるべきなのだ。

現代は福祉国家といわれ、社会保障など、隅々まで国民が国家の御厄介になっている。しかし、教育は制度に頼ってはいけなく、ある。どこで国家が手助けするべきで、どこまでは個人が主体となるべきかを考えることが、今、必要ではなからうか。

資本主義は労働力を商品化するが、それは、人間自体の商品化を意味することではない。膨大な量のカリキュラムにがんじがらめにされた生徒が、一クラスに四十人以上も詰め込まれ、一定の規則に従って、どんな教育が出来るというのであろうか。

「ゲエテがいつていたように、子どもたちを現在の世のなかに適合するように、その現在の世のなかがどんなに腐敗しようとして、これに適合するように教育しようとしているのは、親たちの陥りやすいまちがいであり、この子ゆえに迷う親たちのあわれなまちがいを挑発し、これに便乗しているのは現在の日本の文部省の罪悪である」——羽仁五郎著『教育の論理』

赤ん坊が自分で立つことを思いつく前に、手とり足とり歩く練習をさせてしまう日本である。何かしてあげて、子供が何も言わないと、すぐに、ありがとうは？　とうながしてしまふ日本である。も

っと考えさせ、自分で発見するように持つていくことが、教育の本質だと思う。そして、そうするには個人差を無視することは出来ない。隣の誰ちゃんが平仮名を書けるようになったから、うちの子も急がなければ……では駄目なのである。『さくらさくら』が、暗くつまらない歌だと思ったって、それを責めて規制してはいけなく、である。自覚と個人差を重視しない教育はあり得ない。

現在の日本の教育の行き着く所はすべて「適当に」である。自覚も主体性も協調性もめりはりも、すべて適当に身につけていかねばならない。成長過程においてもはみ出し厳禁であり、もしちょっとでも埒外に出ようものなら、すかさず「愛の鞭」などと正当化された名の殺人が待っている。

しかも、JESの規格基準は、最近、とみに厳しくなりつつあるようだ。教科書にしてみても、がんじがらめの統制になりつつある。先日、文部大臣は、「教科書は、みんなに良い子になってほしいという願いを込めた、国からのプレゼントである」と、教科書無償継続の主旨を述べたが、これは、規格製品を造るための、絶好の口実ではないか。タダより高いものは無いのである。一方、教師の規格化も、筑波学園都市計画などによって徐々に進められている。

親も、利用するはずのものに吞まれて、そのお腹の中だけでしか泳がないようにならずに、その枠を破って教育というものを考えてほしい。自分の子供が、JESマーク付きの人間となる希望は、早く捨ててほしい。

文部省が教育の代名詞になるような世の中にはしてはいけない。

父よ、母よ、教師よ

—— 家庭科教師たちよ！ ——

遠藤 由紀



家庭科という看板を見て思いうかぶイメージは、料理、裁縫（イヤダ、嫌いだ）、育児、女子だけの期末テスト（不公平だ！）等々、マイナスイメージがずつとながらる。ならば実際のところ高校まで授業で何をやってきたのだろうと思ひ返してみると、これもまた料理、裁縫の実習の思い出だ。ただ頭で描くイメージとは違い、実習というのはおもしろかったし、楽しかった。

けれど家庭科という授業はこれだけだったろうか、黒板を使つてなにかやったような気もするかとノートをひっくり返してみても驚いた。女性であれば考えなければならぬ問題、例えば就職についての差別問題、法律からみた女性問題、ライフスタイルについてなど、私がこれからぶつかなければならぬ様々な問題がノートにきれいに写しとつてあった。それは決して教科書にでているような二三歳結婚、出産、長男小学校入学、妻再就職というパターンではない。適齢期の神話や再就職についての問題、女性の賃金が高くなるようにできている仕組みなどにふれた授業だった。こんなこと

もやっていたのだ。

今だったらお金を払つても聞きたい授業なのにどうしてスッポリ記憶にないのだろうか。そして思ひ出した。このキレイなノートが証拠だ。これは「字」を書くことだけに集中していなければ、私にはできないキレイさだ。当然授業は頭上を通りすぎる。そしてもう一つ思ひ出した。あゝ次は家庭科だとすると秘かに数学のノートをもってゆき宿題をかたづけたり他のノートに手紙を書いたり内職に徹していたのだ。

「なぜこんなことをしていたのだ。授業をうける態度ではないではないか」などと真面目に少々反省しつつ、この「態度」というのか、そもそも家庭科をうける「心がまえ」が、かなり問題なのではないかと思つた。

授業にかかげられるのは、家庭科という看板で、これは先に述べたように全てマイナスイメージだ。家庭科＝これはいらぬ。どうせ家でやらねばならぬことだ、という意識がある。だから知らないこと、今聞かなければ知る機会のないことを先生がいくら一生懸命におっしゃられたところで、もともと聞く気のないこちらには馬の耳に念仏。

家庭科という教科名、これはかなりくせものではないかと思う。まず小学校の五年ではじめて家庭科の授業をうけるのだが、その時はとても期待をもっていた。今までにない授業だ。きれいな裁縫用具箱も用意された。袋を作ったり目玉焼を作ったり、お茶の出し方リンゴの食べ方などを実習した授業は本当に楽しかった。おままだとを学校でやれる楽しさだった。そして「公にできるおままだ」と

のイメージのまま中学・高校へ進むのだ。

だいたいなぜ家庭科だけ教科名がかわらないのだろうか。算数は数学になり、うかうかしていられないぞと緊張する。国語は古文や現国にわかれ、理科は化学や物理にかわる。いかにも小学生とは違う高級な感じのただよう教科名だ。そして実際に内容も細分化し、専門的になってきているのだ。家庭科の教科名がかわらないのは小生時のままに、内容が信じられないほどの広範囲をこなさなければならぬからかもしれない。

けれど名前がかわれば中身がかわってくるというのはよくあることだ。かつよく「生活運営」だとか、「ライフスタイル研究」だとかにすれば背ずじがのびるような気がしないだろうか。家庭科は本当はともむつかしい授業なのだと最近気がついた。それに対して教科に対するイメージが不当に低いのは、私の場合このことも一因だったのではないかと思うのだ。

「これではあまりに家庭科の先生が気の毒ではないか。高校には貴重な女の先生なのに」と率先して気の毒な原因を作っておきながら、思わずにはいられないのだが、こう思うこともイケナイことのようにだ。共学校では、家庭科と体育を女子だけでうけることになる。するとどうしても女子だけの雰囲気ができあがる。なんだかポワポワした気の抜けた雰囲気なのだ。

そして女の先生が授業をする。男子よりも女子の方が女の先生に對して偏見をもっているようにきびしい。けれどその批判の対象は授業内容よりも人柄にむけられるのだ。授業を真面目にしようとすると先生ほど風あたりが強い。「あの先生はうるさいよね」「実習だ

けやってくればいいのに」「こんな授業うざったくってエ」となる。一方で「先生かわいそー」の声もある。女の子にとって家庭科の先生というのは「おかあさん」「おねえさん」的なものであればよいので、教師を望んではいけないのではないかと思う。そして家庭科はなんとなくなれあいの雰囲気支配なのだ。

家庭科という教科名のもっているイメージは低いものだし、何かを知ろうとする意欲がもてるものじゃないし、そういうイメージをもつてうける授業は息抜きの場であって、勉強する場ではない。

こちら側、つまり授業の受け手にとって、少なくとも私にとって、家庭科というものは、こういうものでしかなかった。卒業してから家庭科とはどういふものなのかというのを考えている人たちの意見にふれて、はじめて、家庭科とは「日のあたる台所で談笑しながら料理をしている母娘」を作りだすための授業ではないのではないかと思いはじめた。

八年間、このようなイメージにとらわれつづけ脱しきれなかったのは、私自身が問題意識をもって積極的に家庭科とむかいあわなかった責任でもあろう。けれど生徒が自主的に家庭科とむかいあわなければ本当の家庭科に気づかないというのもおかしい話ではないか。おそらく私たちは、先生方が考えている以上に様々なイメージや偏見にとらわれているのだ。女性運動が、女とはこういうものだという通念をこわしていくことからはじまったように、家庭科も、私が在学中にそれがあればよかったのと思う。私の場合、そういう働きかけが教師側からあったかどうかといえば、記憶にないのです。

父よ、母よ、教師よ

—— 家庭科教師たちよ！ ——

木本 綾子



私たちのクラスでは、修業式の日、パーティーと称して、女子が男子の分も、お昼のお弁当を作ってきて、食べたり遊んだりをしよう、という計画が立てられました。費用は女子持ち。だから男子はジュース代ぐらいしか負担しないのです。です。「ねっ、それならいいでしょ？」と、女子が男子に頼みこんで、この条件の下に全員参加のパーティーをしよう、というのです。生徒会の用事で、私がその場にいない間に、決定してしまつたのです。

なんていうことなのでしょう！ 思えば、こんな男子の御きげん取りのような事を、何も思わず、当たり前の事として平気で出来る。そんな考え方を、小さいころから、女子は植え付けられてきているのです。男子もそれを当然と思うように育てられてきているのです。だからこの考え方の誤りを教育されない限り、無理もないのかもしれない。

しかし、友人たち、つまり現代っ子たちは、今、日本で、教科書問題、そして原子爆弾・核兵器反対運動、家庭科女子のみ必修などの諸問題が、新聞やテレビ

で取り上げられているこの時代に、全く、世界の状況などに振り向きもせずにいるのです。教育を受けている当人たちが、何の問題意識も持たないで、ただ目先の事に追われ情性に流されて、こんな事を、当たり前というような顔をしているのです。

これではもう、文部省側に、教育の本質的問題を、根本から考えさせることなど、とても無理ではないでしょうか！

これは、現在の家庭科の授業態勢にも、問題があるのではないかと、思います。

例を挙げます。うちの学校で家庭科の時間に、ある映画を見ました。それは「子育て」についてでした。その内容たるや、性別役割分業の考え方を、これが「正当」です。とてもいわんばかりのものです。

その中で、とても印象的な言葉がありました。「子供を育てる時には、子供のそばに、いつでも母親がついていてやるべきです」というものです。また「夫婦喧嘩をしていて、物が飛びかかったり、母親と父親が子供を取りあうようなことをしていると、その子供は、落ちつかず、乱暴な子に育ってしまうでしょう。——」というようなものです。

その語りと共に、映像の方は、ある部屋のソファに、子供をはさんで両親が座っています。そのうち、母親と父親が、口喧嘩をはじめます。部屋を出て行くとする父親。すると母親は、父親にすがりつき、引き止めようとするのです。父親は、振り切り、母親はそれを追いかけて、すがりつく……。という繰り返……。そしてラストに、子供が、まんまるな目をして、アップで映ると、「子供とは、夫婦喧嘩も、びっくりしてまんまるな目をしながら、両親の行

動をよく見ているものなのです」というナレーションで終わるのです。

ここで、生徒の方は、大爆笑。そして、この映画を見て、「レポートを書け」という課題ができました。私は、あまりにも腹がたち、レポートには、「なぜ、こんなものを見せるのか。今、どれだけ男女役割分業が、批判されているか。なぜ、夫婦喧嘩で、出て行こうとする父親を、母親がすがりついて引きとめようとし、父親はそれを振り払い、また母親は、すがりつく、というような、あまりにもみじめな、誤つても理想的な夫婦関係ではない、と思うような映画を見せたのか？」と書きました。

もどつてきたレポートには、先生の「これは、何年前の作品だったのです」という言葉のみが書き込まれてあつたのでした。

現在の日本、そして世界中の状況、公害・差別など、日常生活一般の問題点に、いちはやく目を向けていくべき家庭科の教師が、数年前の映画を見せて、レポートを書かせ、「問題があるのではないか」と書いた生徒（私一人のようだったが……）には、ただひとこ

と、「これは、数年前の作品なのです」では、あまりにお粗末だと思いませんか？　せめて、この映画を見てレポートを提出した後、皆で、映画について、話し合わせてほしかったと思います。その生徒なりの個人としての意見と、皆で話し合った結果出た意見をつきまぜて、考えを深める、という目的のためならともかく！

家庭科の先生方は、世界や日本の考え方、生活の変動や状況などに、一番敏感でいてほしいのです。せめて、生徒が書いたレポートに指摘した点には、まじめに回答をしてもらいたいのです。生きた現実結びつけた授業をしてほしいのです。

私は、現在の家庭科という教科に対して、願いを沢山持っている生徒でした。でも、私の願いを、先生は、ほとんどご存じないと思います。先生に話す場がない（非常勤講師でしたから、授業だけに来られるのです）し、先生は、生徒がどんな願いを持っているかを知らうともされませんでした。

——とても残念でした。

柳 淑子著

刊 『いきいきと生き抜くために』

——自立をめざす女子教育——

現代書館刊（価一五〇〇円）

生徒たちに「こういう学校もあるのです」と応えるかの如く、福岡県立三井高校の学校ぐるみの取り組みが、みごとに整理されて世

に出た。生徒の自主性・自立性を伸ばす教師

集団の中心にあつた著者は、昨年遠距離離校に強制配転させられたが、いま巣立つ教え子たちに向けて「よかったねえ、良い学校で学習できて、本当によかったねえ」と語りかける形で、十年間の実践をまとめあげた。それだけに、どこを切つても赤い血が噴き出し、「ここまでやればやれるのか」との勇気を奮い立

たせる。教師たちよ、ぜひ読んでほしい。

「血のにじむような思いをして歯をくいしばって必死でとりくめばとりくむほど」「連帯の味」は得も言われぬものがあります。（中略）「連帯」とは、すくなくとも自分が何かをやった時にしか、うまれて来ないものですし、まして、もたれあいやお説教でつかう言葉ではないということです——重い文章である。



改めて「家庭」を考える

中学生のころはいたずら坊主で、よく悪さをしては職員室に呼ばれ説教されたものだ。そんな時、ある先生に「人間が成長したり進歩したりするのは山を登るようなもので、高い所に登れば登るほど広く物が見えてくるものだ。だから今くだらなれと思つたことでもくだらなれと決めつけずに、こつこつと努力しなければならぬ」という内容のことを言われたことがある。内心「何をえらそうなことを言つてやがる」と思いながら聞き流していたのだが、最近になってその先生の言わんとするところが、だいぶんわかるようになってきた。

たしかに人生を登山にたとえれば、現在の私は中学生のころよりはいくぶん上にいるわけで、当時見えなかつた先生の「教え」が今見えてきたのは自然なことである。ただし、先生の説教そのものについて、山のふもとにいる中学生相手に、タイムリーであつたと言えるかどうか疑問だが……。

保父として保育園に勤めはじめて、今

年で三年目になる。保育のことについても、以前見えなかつたことがだんだんに見えるようになってきた。その分「高い所」に登つたからだろうか、とは言え逆に上を見ればきりがなく、頂上などほるか雲の上で、その存在すら今の私には確かめられない。それでもまあ仕事は面白いし、これからもこつこつと情熱を傾けていけそうでありがたいと思つてゐる。

私はこの一月に結婚し、「家庭を営む」ということに關しても新たにスタートすることになった。こちらを登山にたとえれば、まだふもとともふもと、平らな森の中を歩いているようなものだが、保育園という職場でいろいろな家庭の側面を見るにつけ、人間と家庭との關係についてことさらに深く考えさせられる。

家庭について社会的に展開するつもりはないが、今、保育園に子供を預けている家庭に限るまでもなく、核家族化が進行しているのは全国的な現象であろう。それにつれて、「何のために家庭があるか」という目的意識が変わりつつあることがはつきり見えてきた。もとより家庭は、スポーツのチームや会社組織のような共通の目的をもつた集団ではない。だから個々の家庭の構成員が「何のために生きるか」の総意が、その家庭の目的のようなものになるのだろうか、総意つまり親と子が共通に目指すものがない家庭が多くなつたように思えてならない。

自分の生いたちをふりかえる

私の育つた家庭は、当時としてはまだ珍しい共働き家庭だった。父も母も中学校の教師をしており、長男の私をはじめとする三人の男の子は、日中、主に祖母にめんどうを見てもらつていた。

祖母が私たちに大変気を配ってくれたので、生活の上で不自由を感じたことなど全くなかったが、幼い意識の中で自分の家が「よその家」とはどこかが違うことをだんだんに自覚するようになっていった。

小学校に行くようになり、時々友達の家へ遊びに行ったりすると、そこにはたいてい母親がいておやつなどを出してくれる。そのおやつを食べながら「なるほど、よその家のお母さんはこういうことをしているのか」などと、一人納得してみたりしたこともある。また、当時は専業主婦があたりまえの時代で、社会科の資料で「家庭」についての項目があり、「お父さんは昼間はお仕事に出かけます。お母さんは家でそうじをしたりごはんを作ったりします」などと書いてある。それを見つけたしては、「うちはちがうもん、この本はウソを書いてある」と子供心に反発してみたりもした。

一番印象的だったのは、学校の父母会や、参観日の時だった。当然ながら私の親は参加できず、前もって母親に言いきかされて納得していたにもかかわらず、自分の親が来っていないことを妙に気ははずかしく思ったものである。

そんな子供心の疑問や不満に対して、私の両親は非常に気を使っていたように思う。私や弟たちが疑問・不満をもらした時は、いつも私たちが納得するまで話をしてくれた。また両親は、帰宅してからの間できるだけ子供と接する時間を長く持つように努力していた。それぞれなかなか忙しい職業で、仕事を家に持ち帰ることもたびたびあったようだが、中学に上がるまでは、私たちが起きている間に親がその仕事をしている姿を見たことはなかった。今にして思えば、当時の両親の家庭生活の中心は私たちを「育てる」ということであ

り、「子供を育てる」ことが私の家庭の最大の目的であったと思える。

家庭の変容

幼い子供のいる家庭では、本来「子供を育てる」ということ、つまり育児がその最大のテーマ・目的であることはむしろあたりまえと思えるのだが、現在保育園でいろいろな家庭を見ていると、それがあたりまえではない家庭がけっこうあることに気がつく。育児を自分の生活の一部分と割りきってしまったている親が意外に多いのである。そうすると子供はどうしても大人の生活のベースで育てられてしまう。子供、特に乳幼児期には規則正しい生活リズムが必要なのに、大人のつごうで夜寝るのが遅くなったり、食事の時間が不規則になってしまったりする。こういう親に対して私たち保育者は、毎回口をすっぱくして生活リズムを整えてくれるよう求めるのだが、「育児」に対する基本的見解に相違がある場合は、どこまで行っても平行線である。もちろんそうでない家庭もたくさんあるのだが、全体の傾向として、乳幼児に限るまでもなく家庭の中で「子育て」のしめるウエイトが軽くなってきたのではないかと感じるものがしばしばある。

その背景としてはいくつもの原因が考えられるが、その最たるものは先にも述べた核家族化の進捗と、共働きの増加の問題であり、同時に近年特に著しくなった消費指向の文化のためではないかと思われる。つまり、核家族化と共働きの増加により、以前に比べて「子育て」に手をかけることが困難になってきたところへもってきて、その需要にこたえる意味で、手軽な「子育て」の手段を助ける

「商品」がたくさん出てきたために、「子育て」が安易に考えられるようになってきたのではなからうか。具体的には、紙おむつ、貸おむつに始まり、食べ物ではインスタント食品類、衣類では洗うのが簡単な化学繊維製品、更には子供と接する時間を節約できるテレビなど、あげてゆけばきりが無い。もちろんそれらの「商品」の一つ一つが悪いわけではなく、それぞれそれなりの意味や必然性も持っているのだが、それら「商品」によって「子育て」がインスタント化できるようになった事実は否めないだろう。そして「子育て」に必要なものが、これら物質的なものだけではないことは、中学生の非行や家庭内暴力のたとえを出すまでもなく明らかである。最近取り沙汰されているベビーホテルの問題も、これらと根は同じだと言えよう。

非家族化と消費指向の文化も、たしかに現在の社会の必然ともいえる現象ではある。だからといって「子育て」を安直に考える家庭をも、「必然」として容認してしまつてよいものだろうか。私はそうは思わない。なぜなら私は、「家庭」とは、子供を自立させるための場だと考えるからだ。もちろん家庭にはそれ以外の要素もたくさんあるだろう。しかし精神的な面で、あるいは生活能力や社会的な面で、子供の自立を助けるという方向性をもって「子育て」をすることが、家庭の、時代をこえた普遍的な役目なのだと思うからである。

父母たちの目ざしたものを受けて

私の妻の家庭は、両親に九人の子供という、この時代には珍しい大家族である。今でこそほとんどが成人しているが、妻が子供のこ

ろの大変さは話を聞くまでもなく容易に想像できる。その大変な中で、大勢の子供を次々に成人させていった両親には、ただただ頭が下がるが、その大変な中にも「大家族」というもののよさを見ることができると。

まず、家事の分担により生活能力が向上する点。兄や姉の姿を見つ、自分の進路を自分で決めていく姿勢。多人数の家族の豊かな人間関係で育てられる社会性、まだまだあるのだろうが、これらのことが子供の自立に与える影響は実に大きいものだと思う。

一概に言うことはできないが、大家族の中での親子関係というのは、必然的に子供を自立させていく方向にある。最近の親の養育態度で問題となる、「過保護」「過干渉」「放任」「厳格」「無関心」などは、大家族に持つて行けばすぐさま家庭崩壊につながってしまうだろうし、やろうと思つてもできないことも多い。核家族に伴い、これらの養育態度がクローズアップされてきたのは、時間的・経済的な生活の余裕によって生じた親子間の「甘え」が原因なのではなからうか。

私の育った家庭は、先にも述べたように共働き家庭だったので、その反動もあり私はたいした甘えんぼうだった。だから私の自立は他の子供にくらべてだいぶ遅かったと思うし、自立を助ける手間もかかったと思う。けれども私は、自分の両親が子供に対して「甘えた」ことは一度もなかったと思つている。父も母も、常に子育てに全力を注いでいた。たしかに初期の共働き家庭という状況で、両親はよりよい育児のための模索の中にあり、いろいろな悩んだり苦しんだりしていたが、最近問題となつていような安易な養育態度で育てられた覚えは、今考えてみても全くない。

私は自分自身と両親の模索の中で、あっちこっちにぶつかりながら「自立」という方向を目指して育てられ、職を持ち、新しい家庭をかまえることによって、ようやく親から自立するところまでとりつくことができた。そしてこれからが私の社会的な「自立」に向けてのスタートだと思っている。

共働きが増加し、核家族化が進んでいる現在、家庭を営み、子供を育てていくのはなかなか大変なことだと思う。ただ、その大変な中でそれぞれ模索しながら新しい世代の子供を育て自立させていくことが、その親たち自身の社会的自立につながることは言えないだろうか。

保育園には、いろいろな家庭の子供がやってくる。この三月にも、新入園児の健康診断があり、初めて保育園に来る子供たちが、お父さんやお母さんに連れられやってきた。お父さん、お母さんの中には、もう上の子の育児の経験があり、心の余裕をもってやって来る人もいるが、初めての子供をかかえて、何やら不安そうなお母さんもある。そういう若い親たちを見ると「ああ、この人たちもスタートして間もないんだなあ」と妙に身につまされる。そして、これら私と同世代の若い親たちが、私の両親のように、これからもずっと子供に甘えることなく、子供を自立させていく家庭を作っているってほしいと思うのである。

今、新たに「家庭をつくる」という山を登りはじめた私たち夫婦は、これからの時代の中でどのように模索し、あるいは悩み、迷ったり苦しんだりしていくのだろうか。まだふもとの森の中にいるのであまり展望はきかないのだが、時代に流されて普遍的なものを見

失うことなく、子供の自立のための家庭をつくっていくことだけ心がけていきたい。

それが、さまざまな苦勞をしながら高い所へたどりついた私の父母や、さらにもっと高いところにいるのである妻の両親への感謝になると思う。

私もこの山を一步一步登って行き、いつか高いところから、まだふもとの方にいる自分の子供たちの姿を見守ってやりたいものだと思う。

* ひ と *

駒野 彰 さん

駒野彰さんが本文で、「母」と書いているのは、ご存じ駒野陽子さんです。中学校の英語教師であり、婦人問題研究家である駒野陽子さんが育てられた三人のお子さんのご長男。共働きの中の子育ての記録を、駒野さんは著書にまとめられましたが、その中のかわいい写真が目につきます。彰さんが「保父」という仕事を選ばれたところに、逆に駒野さんの子育てぶりが映し出されていると思いますませんか？

(半田)



零下三〇度の雪は、手にとるとさらさらとくずれ落ち、ふみしめるときくきくと音がする。「しはれる」という表現がびったりの寒気の中を、それでも朝日がさすと、山林に向かうトラックが走り、ほっぺを真赤にした子どもたちが学校に向かう。牛を飼う人たちは、牛たちにえさをやり、糞出しをする。どんなに寒い日でも、生きることの営みは休むことなく続けられています。

北海道のオホーツクに面した紋別市から内陸へ車で四〇分のところに、滝の上という町があります。そこで「子どもの村」を作ったという話があり、氣候の一番厳しい時、十二月と二月に仲間たちと出かけました。人口五千人のその町は、明治時代から七〇年の開拓の歴史があります。一時は農業、特にハッカ栽培と林業で栄えたのが、洞爺丸台風以来、生活の基盤を失い離農してゆく家が相次ぎ、過疎の町となりました。その苦い経験を経ながらも、町の人たちは、酪農に切りかえたり何よりもその大地に根づいた生き方を探求して新しい出発をしようとしています。その時期に「子どもの村」

を通しての出会いがあったことは、私たちにとっても幸せだったと言えるでしょう。なぜならそこにはゆるがすことのできない生活があり、その生活の中にこそ夢を託して、厳しい生活から立ち上がる者として人々がいるからです。その大地に根ざした生活こそ、私たちが子どもたちと共に模索し、求めつづけてきたものであり、それなくしてこれらの人々との出会いもなかったでしょう。

◇

十八年前、夫の病氣療養のため、東京から横浜の日吉に越して小さな本屋を開きました。子ども図書館を作るのが夢でした。けれど子どもたちは、塾帰りのカバンをぶら下げて暗くなるまで、店頭でマンガ本を読みふけるのでした。私たちは最初は腹を立て、そのうち「この子どもたちが生き活きと息づく場はあるのだろうか」と考えさせられながら、生活に追われて夢も実現できないままに八年間を過ごし、家庭文庫の存在を知りました。

とびつのように夫婦で文庫を始めました。最初は十数人の読書会から出発。集まってきたのは、うなだれて本をよむ子のイメージをくつがえすような「ガキンコ」たちでした。始めて間もなく会員は口コミでふくれ上がり、ひところは、日曜の朝一〇時から夕方五時（実際は朝八時からやってきて六時ころまで遊んでゆく子どもいました）までに、延二〇〇人にもなることもありました。「子どもたちに良い本を」という最初の私たちの願いも空しく、ただ、わあわあわめいて帰ってゆく子どもいました。この子どもたちにも、最初は腹をたて、そのうち、このさわぎ屋たちの中にある生き生きした活力、大人の常識をくつがえす発想に、次第に魅せられていったのです。

子どもたちは何でも知りたがり屋の好奇心の固まりです。先ず家

に入ってくると台所からトイレまでのぞいて回ります。部屋の中にある置物や、おもちゃをいじくりまわし、家も調度品もあまり高価なものでもないかと知ると、おじさん、おばさんは何で食べていくのかということも聞きたがります。本屋もたいしてもうかっていないことも心配してくれます。そして子ども心にだいたいのイメージができ上がると安心するのです。それはただのさわぎ屋と思われる子どもたちの中に、体当たりでぶつかり自分の眼でたしかめようとする衝動の現れでした。

◇

それから一〇年、手づくり遊び、外遊びなどの日常活動の他に、年二回の子ども市と、夏のキャンプが行われています。子どもたちの良き友である若者たちが結ばれると、子どもたちが主催し、仲間から司会・受付かざりつけなど、子どもたちの手による結婚式も行われます。さらにその結婚式で結ばれ、生まれた子どもたちが中心になった小さい子のグループもできました。これらの行事を中心になつて進める子ども委員会から、さらに中学生、高校生までのジュニアリーダーも生まれました。これら様々な行動、ふれ合いを通して、子どもたち一人々の中に誰かにやつてもらうのではなく、「自分たちで何かをつくろう」とする心が根づいたのです。それは立派な建物や、何か目に見えた品物になつて残されたわけでもなく、その子一人々々の生きる過程の中に消え去ってゆくものであれ、自らが主人公であろうとする子どもたちの熱意で文庫は続けられ、支えられてきたのです。

ある子はこんなことを書いています。「ひまわり文庫は、ズバリ言う広い広いあき地みたいところですが、さくとかへいとか金網

なんてないから、だれでも、どこからでも入ることができるができます。一步踏み入れたとたんに、同じ仲間となつて遊んでしまいます。……でもそれは子どもだけ」

又ある子は「ぼくはひまわり文庫に入会して四年になるが、まだあきないで入っている。ここには子ども中心の世界があり、時には文庫のおじちゃん、おばちゃん、若者たちといっしょに、時には人たちにたすけてもらつて、文庫をつくつてきた。ずばり子ども中心というのがおもしろくて、いまでも文庫に通っている。——夏のキャンプは、ぼくは五年生の時の本栖湖キャンプから参加した。その時班長にならされた。ご飯をつくらうとしても水かげんもわからず火もつかない。他の班のかまどに火がごうごうともえているのに、ぼくたちの班だけ、林君のお父さんに火をつけてもらつたり、テントを立ててもらつたり、大人にやつてもらわないと何ひとつできない班だった。次の年のキャンプは赤城山だったが、やつと俺たちの班も普通の班なみにやれた。その次の年と今年は、ぼくはジュニアリーダーになった。そして何年か前のぼくたちみたいな班のために火をおこしてやつたりしていると、あのころのことがなつかしく思い出される」

◇

誤りをふみしめながらも、自主的に物を考えようとする子どもたちにとって、「与えられ、管理される場」ではなく、自ら創造できる場を求めるようになったのは自然なりゆきであつたのでしよう。「子どもの家がほしい」という署名運動の呼びかけの中にこんなことを書きました。

「——これからの私たちの最大の夢は、自分たちの自由な世界、本

当の自分をみつづける場「子どもの家」をつくることです。——大人の目を気にせず、のびのびと好きなことができ、学校や家ではできない、子どもたちだけの考えを、みんなの手で実行していける場、いろいろな問題を子どもたちの間で話し合い、自分たちで解決していける場、そんな場所なのです。この「子どもの家」ができたなら、文庫に入っている人、いない人すべての子どもたちに開放します。子どもたちの手で設計し、子どもたちがつくり、子どもが運営する、そういう子どもの家です——」

そして暑い日ざしの中、横浜と川崎で署名運動を行ったのです。その後、山の奥に生活に根ざした自由な学校を創るので協力してほしいという呼びかけが、文庫の子のお父さんからあり、何人かの子どもたちが参加しましたが、様々な圧力でかえって最も管理的な学校に変質してしまったことを契機にして、改めて自分たちの回りをとりまく社会を直視しなければならぬ試練に立たされたのです。

「子どもの村をつくろう」という夢をもつようになった過程は、決してユートピアの理想郷をつくろう、というものではなく、それまでの子どもたちの様々な経験と、現実の社会を見すえての、むしろそれらをのりこえようとする決意でもあったのです。この時の子どもたちの中心は、もう大人になろうとしています。けれどこの願いは受けつがれ、さざ波のように広がってゆきました。夏のキャンプを共に過ごした大阪や、金沢や、武蔵村山、和歌山、さまざまなところの子どもたちから、「子どもの村」への期待や夢が寄せられています。

◇ 「子どもたちに良い本を」にとどまらないで、手づくり遊び、子ども

も市、自然の森をきり開いてのキャンプ、文庫結婚式、その赤ん坊たちの一団、子どもの家、さらに子どもたちの村に向かってゆく過程の中で、何を子どもたちは願っているのだろうか、と考えてみる時、私たちはハッとさせられるのです。

それはまさに、機械化され、管理化されて、一見便利に見える現代社会が、一つ一つ子どもたちから奪っていったものを、自分たちの手に奪い返そうとする過程に、他ならなかったのではないだろうか。そして、その背後にある大人社会への痛烈な批判がこめられていたのではないだろうか。又それは、「本物の生活とは何だろうか」という問いかけでもあったように思うのです。人間は、一つの生命になった時、母の胎内で進化の過程をたどるのと同じように、生まれ落ちてからも二本の足で立ち、手を使えるようになり、自然に立ち向かってゆく成長の過程をたどります。この過程の一つ一つを大切にすることなく、一足とびに近代化しようとするところに、どこか不自然さ、いびつさが現れ、それがいわゆる現代っ子のひずみ、と言われるものにつながっているのではないのでしょうか。そのことへの無言の抗議の声を、子どもたちはあちこちで挙げています。

ただその声を声として受けとめるには、大人たちはあまりにも消費生活に慣れすぎています。本物の生活——創造的な生活——の側からそれを受けとめ、子どもたちの生きる価値感を大地に根ざしたものにしてくくことこそ、今、私たち大人がしなければならぬことなのではないでしょうか。「子どもの村」には、まだ明確な青写真はありません。ただあるのは、強い子どもたちの願いと、その願いを受けて、改めて自らの生きる道を問い直す大人たちの熱意があるだけです。

◇

“子どもの村”を呼びかけてくれた滝の上の人々や子どもたちは、その第一歩への大きな励ましを与えてくれました。

満洲から無一物で引上げてきてその土地に根づいた七十歳のS氏は、青年のように目を輝かせて自然にいどんだ人々の生活を語ってくれました。山菜とりやきのことりの名人でもあり、丸太小屋を子どもたちとつくり、と話はつきません。子どもたちから山仕事や農業で鍛えたNさんは、創造的に酪農にとりくみ、サイロや器具は全部自分で工夫して作るのだそうです。“子どもの村に私が上げるのはお金ではない、物でもない、食えないモチ。自分の気持だ”と、真剣に語ります。

肉牛に取り組むC青年は、“この燃え始めた炎を消さないようにしよう”と仲間の一人に“牛三頭やるからすぐにでもここで生活してみな”と誘ってくれました。地道に酪農をつづけているMさんやその息子さん、都会の生活から再び滝の上に帰って文化運動に熱意を燃やすWさん夫妻や、Gさん、教育委員会で働きながら、自ら新しい地域教育を模索しているKさん夫妻、善意にあふれた滝の上神社の宮司さん一家、厳しい開拓の歴史を掘りおこし大切に守り育てようと努力をしている郷土資料館のNさん、零下三〇度の中を元気に僻地校に通う子どもたちと先生たち、訪ねて行った時、毎日のように遊びに来て、一緒に雪あそびや折り染めをした子どもたち……。たった二回の出会いなのに、数えればきりがいいほどの心暖まるふれ合いがありました。そして“ああ長年、もともと続けていたのはこれだった”と思わせる何かが、その大地と人々の中にはありました、滝の上だけでなくそこをとりまく、紋別や北見、旭川、札幌、

小樽にも、その輪は広がっています。

◇

広大な、しかし厳しい自然に立ち向かって、動物を飼い、畑をつくり、自然の食物をとり、やきものや織物、家具をつくり、森や川を生活や遊びにとり入れて大人たちや子どもたちは、“生きる”ということへの最高の教師です。私たちはそういう人々と自然に学ぶことから、新しい出発をしようとしています。その行動の中に価値を見出し、誇りをもって初めて、近代化と言われるものの中の本物と無駄なものを見わけ、自分のものにしてゆくことができるのではないのでしょうか。

子どもたちと過ごした一〇年の間に、私たちが教えられたことは、はかり知れないものがあります。私たちはその一つ一つを生きるエネルギーに変え、子どもたちに返してゆきたいと願うのです。

“子どもの村はひろいひろい広っぱです。誰でも出入りすることができる、自由の広場です”と子どもたちが胸を張って言える場として……。

(ひまわり文庫)



一年の時毛糸で織物をした、地球儀を学んだ、二年になったら、ミシガンの歴史や世界の国々のことを習った、アップル・ソースもつくった、三年の時は四年生の子と一緒に割算を勉強した。今思い出すと、アメリカの学校は楽しかったヨと子どもたちはいう。

ミシガン州立大学の家族アパートに居を定めるとすぐ、近くの市立レッド・シーダー・スクール（赤い杉小学校）に転校の手続きをとりに出かけた。全米一の広さを誇るキャンパスはカナダかえでの赤い色が最後の輝きをとどめていただけで、冬間近かの風情であった。

単身赴任の私に伴われていたとはいっても、八歳と七歳だった二人の息子たちには意に染まない渡米だった。未知のものへの好奇心よりも、日本の学校生活をなかよしの友達と送っていたかったし、父親との別居も不満だった。アメリカでの子供たちの生活をどのように良いものにしてやるかは私の仕事でなければならぬまい。仕事の合間に多少とも意識して子どもたちの生活にかかわろうとしたのはそのためでもあった。

さて、アメリカの学校教育に何がしかの期待をもつ人は我が国には少なくないのではなからうか。戦後教育改革、民主主義教育の原点はアメリカだった。アメリカの援助がなかったら、日本の教育改革はあそこまで出来ただろうかという感が強いのだ。それに、日本をはるかにしのぐという高学歴社会なのに、子供を蝕むほど苛烈な受験戦争も一般的ではない。

私は期待するなかの最たる者の一人かもしれない。機会あって、戦後日本の教育を性格づけることとなった『第一次米國教育使節団報告書』（一九四六年）を読んだ。教育の単線化、非エリート化、地方分権、男女の機会の平等などの理念が並ぶなかで「義務教育は無償でなければならない」という一項がある。校舎もない、教師もいないという教育崩壊寸前の情況を目撃しながらこの一文を使節団がそう入したのは、教育の機会均等の実現を望んだからに違いない。なんとも偉大な理念であることに感動した。戦後三十数年たった。アメリカも変わっただろうし、特にベトナム戦争以後変わったという。しかし、伝統はあるだろうという期待は捨てきれなかった。

◇ 子どもたちの学校生活は惨憺たるものだった。英語を全く解しない言葉の障害と異文化接触という障害は、通常は目に見えないささいなことでも増幅させるものである。それを人種差別という形で子どもたちは受け止めて、学校にゆくのをいやがった。半年後のイースターのころになって、親子ともどもホッとしたのは、日常の英語に不自由しなくなることが最も大きかった。子どもには差別することとをきつくいましめて育てたつもりだが、差別されることのつらさははじめて知った。よい経験だったと思う。

ついでに差別について一言触れておきたい。アメリカの民主主義を守るための現在の最大の課題は人種差別と性差別の排除であり、教育も例外ではない。私たちのいた市の教育委員会の課題もこの二つであったが、校長以下の現場の教師や子どもたちをみると、制度だけが先行しているという印象で、普通の人たちの意識変革は道遠く、難しいものなのだと思うざるをえなかった。

ミシガン州の大学町で私たちが経験したアメリカの学校と子どもたちについてのほんのささやかな報告をさせていただきます。

◇ 小学生の生活は、大きく分けて、学校と、市、教育委員会、市内の芸術家協会というような非営利団体が開催する各種のクラス、私的な団体・個人の営むレッスン、教会から成り立っている（地域の子供会はなかった）。日本ではおけいことはすべて私人・私企業の営むレッスンやクラスに頼っていて、教育産業花盛りなのだが、アメリカではこの部分はあんまり目立たない。それに家庭教師というものを全くない。教会の比重もそう大きくはなく、まわりの子どもたちをみる限り、彼等の生活は学校、自由な時間、その次にクラスのようなので、この二つを中心に述べてみたい。

◇ 学校は九時十五分に始まり、三時十五分に終わる。一年生から五年生（小学校は五年間）の子どもも先生も一斉に帰途につく。クラスは二五人前後で、担任の教師一人の他にエイド（Aid）が一人二人先生を手伝っている。エイドはボランティアであるが、制度化化されていて毎日とか何曜日とかにやって来て、勉強を教えたり、子どもとつきあっている。大学からはしばしば学生が教育実習に来るの

で、教師は常に誰かの協力を得ているようである。この体制が一斉学習ではなく、個別指導を保障しているのであろう。個別指導は例えば成績表に現れる。項目（算数ならくり上がりたし算が一項目となる）がいくつも並んでいて、その子に教えたものがチェックされ、理解したかどうか三段階別で記入されている。成績（表）は個人の到達点を示すものであって、評価記入は点数ではない。クラス全体での子どもの位置やクラス平均は問題にしないらしい。勉強は個人が挑戦して身につけるもので、他人と比較するものではないという認識があるようだ。

◇ 学校と保護者との関係は解放的である。授業参観日という特別の日はなく、親の気のむいた時に来て、子どもたちをみてやってくれ、という具合である。先生との懇談会はいつも夕食後で（親の就労のため）、子どもの近況、学習の進み具合、教育方針、行事日程などや個人面談が行われる。ハロウィーンの仮装行別、音楽発表会、運動会、卒業・終了式など折にふれてお誘いがかかる。お誕生会とはとても大切にされている。子どもの誕生日には、ケーキやクッキーを焼き、ジュース、紙コップ、紙ナプキンを抱えて親たちが学校にやってくる。授業の合間にみんながお祝いの会を開いてくれるのである。小さなスターの誇らしそうな顔は実にいいものだ。

◇ 年度末には学校中のお祭りがある。主催は保護者会で、各家庭でケーキやクッキーを焼き、近所の人々と誘いあわせて、夕方から学校に集まってくる。十時ごろまでにぎやかなドンチャン騒ぎで、日本のお祭りの境内のような雰囲気である。私たち一部の外国人がや

ったお国自慢の展示や料理の販売以外は、輪投げからお化け屋敷まで、ほとんどの催し物がゲームで、子どもたちを楽しませてやることに徹していたが、アメリカ人というのは、親も子も楽しみをつくり出したり、楽しませたりするのが上手な人たちであることに舌を巻いた。この日、私はケーキ、フレンチフライドポテト、焼き鳥、おむすびづくりに忙殺された。

授業のやり方や行事のもち方をみていて感じたのだが、アメリカの大人たちは小学生を幼い者、保護してやるものととらえているのではないだろうか。日本の方が、自分でやることを一年一年増やすよう配慮しているような気がする。息子たちがクラスメートを評して幼稚だとよく口にしたのを思い出す。

◇

給食は子どもたちの一番楽しい時間であらう、各校の高学年のクラスが順番にメニューづくりに参加して給食メニューができ上がる。メインディッシュからデザートまでディナー形式をとった豊かなものである。希望者だけが受けることになっており、弁当持参の子もいる。ある日学校で残し物をみて驚いた。発泡スチロール（人件費節約のために使う）のお皿に山のような食べ残しである。給食指導はなく、子供たちだけで食べているらしい。野菜など食べる気がなくて残す、煮豆をとばしっこして遊ぶなど、決してお行儀のよくない息子たちが、お行儀の悪さに閉口するほどなのだ。野菜離れは日米を問わないが、同じような生活をしている知人たちと食事を共にすると、子どもの食べ物の好き嫌いに関してはなだ寛容であることに気づく。栄養があるのだからこれくらい量は、というような我々の熱心さはない。それでヴァイタミン、ヴァイタミン（ビタミ

ン剤）と固執するのだからおかしくなる。

◇

学校に通わせはじめて驚いたのは教育費が無償だということだった！鉛筆一本から、消しゴム、はさみ、のり、ノート、ワラ紙一枚に至るまですべて無償なのである。花模様の鉛筆やウルトラマンの筆箱は存在する余地もない。子どもたちは持参した袋に、製作品やプリントを入れて帰ってくる。私が払ったお金は観劇代、ローリースケート場入場料、遠足の費用、給食費ですべてだった。無償とはこういうことなのか。

◇

もう一つ意表をつかれたような思いをしたことがある。毎月二回発行される学校通信に、しばしば「旅行をするときは、事前に欠席を申し出て下さい」という一文が登場する。大体学校がある時に旅行なんかする人がいること自体私たちは奇異に感じてしまうものだ。しかしここでは、学校にゆくことと、たとえば家族旅行でワシントン見物をするということ、シカゴまで催しものを見にゆくことは同列というところらしい。もちろんだれもほとんどいつも学校にゆく。しかし、親たちはなんの引け目も感じないで子供を学校から連れ出すことができるのだ。それは彼らが学校を軽くみているからではなく、公教育に対して、親の教育権を行使するということなのだ。学校はお上のものではなく、親たち自らの必要性によって親たちが存在させているのだと考えた方がわかりのよいことが多い。親たちは校長をやめさせたり、採用することも出来る。私の知人は、留年を勧める担任の意見を受け入れず、仲よしの友達と一緒に親の方が子どもにはよいという理由で二年に進級させた。これなども親の教育権の方が

教師の決定より強いことを示す例であらう。

◇

子どもたちの社会で大きな位置を占めるものとして、市や教育委員会、市の芸術家協会、舞踊家協会などが開く各種のクラスがある。この種のものは日本では全くといっていいほど該当するものがない。絵画教室、ダンス、語学（独・仏・スペイン語、外国人のための英語）などから、水泳、犬の訓練まで多種多様である。夏休みには英語や算数など教科の補習クラス、語学、ピアノなど五〇余りのクラスが安い料金で開かれるのだから壮観という他ない。

子供たちが参加したものの一つであるソフトボールについてふれてみたい。ソフトボールは十五人ほどのチームで、コーチが一人だった。ピッチングなどの練習、休憩時間のおやつ、クッキーやカップケーキ、ジュースなどの差し入れは親がやる（クッキーなどは大方手づくりなので大変だ）。夕方五時から始めるのはコーチの仕事の都合だろう。何が仕事か知らないけれど余程暇な人なんです。ねーと日本人仲間と話していたら、実はミシガン州立大学の先生だったのには驚いた。洗いざらしのＴシャツに半ズボン、飾らないヒゲのおじさんが職場では、ドクター○○とよばれているのだ。仕事の合間にボンコツを飛ばして、息せききって練習にやってくる人を目の前に、同業者として立場ないナーと感じさせられる。時間があるからやっているのではなく、やりたい、やらなければならぬからやっているのだとすると、登録して技能テストを受けた日、グラウンドで動き回っていた実には大勢の男たちはみんな忙しい人たちだったのか。コーチは技をみがぐことと優勝ことよりも、チームワークを育てることを重視したいと言われ、女の子二人を含むチームの子どもた

ちにいつも暖かい目ざしを送っていた。他チームとの試合が始まった時、闘志むき出しのチーム、子供らしくないチームがいくつもあれることを知り、チームワークなんていう人はアメリカでも少ないのだからと思った。単親者の会とかいうところでもカウンセラーをしていることを知ったのはずっと後のことだが、このボランティアのコーチは私の忘れ難い人の一人である。子どもたちは、多くのボランティアの大人たちに守られて、根性ではなく、スポーツの楽しさを学んだわけだ。

◇

このようにみると、アメリカの子どもたちは、教師や近隣、多くのボランティアたちによつて見守られながら育ちうるということがわかる。地域の教育力などといわれることがあるが、まさにそれだ。多分、アメリカのよき伝統の部分なのだろう。

しかし、基本的に個人が優先するこの国では、このような活動に参加することもすべて個人の選択の問題で、実のところ、参加児童は決して多くはない。小さな子どもたちだけでマクドナルドに夕食を食べに来る現実、離婚・再婚の日常化、単親家族など、家族崩壊とは言いたくないが、子供たちにとっては不安定な生活とならざるをえない。現代社会のひずみや矛盾にさらされている子どもたちと、ボランティアたちのさしのべる暖かい手は、どのようにして邂逅しうるのだろうか。

（茨城大学）

☆☆☆☆☆☆

新しい家庭科を創るために

☆☆

小学校では

名取 弘文

食べ物の授業

教科書（東京書籍版）では、食べ物についての扱いはこうなっている。

〈五年〉

わたしたちの食物

1、からだと食物（食品の種類と食べ方・食物と栄養・栄養素のはたらき）

2、野菜サラダ（生野菜の食べ方・調理の準備と用具・野菜サラダの作り方・はいぜんと食べ方・あとかたづけ）

3、食物の食べ方（食品と栄養素・組みあわせのよい食べ方）
かんたんな調理

1、調理と燃料（調理に使う燃料・ガスの使い方）

2、ゆでたまご（たまご・ゆでたまごの作り方）

3、緑黄色野菜の油いため（油でいためる調理・緑黄色野菜・

緑黄色野菜の油いための作り方・あとかたづけ）

楽しいおやつ

- 1、おやつ（おやつ調べ・おやつの役め）
 - 2、おやつの用意（おやつのととのえ方・茶の入れ方）
 - 3、家族のだんらん
- 〈六年〉
- 毎日の食事
- 1、食事のとり方（食事調べ・食事の計画）
 - 2、ごはんとみそしる（ごはん、みそしる・はいぜんと食べ方）
 - 3、こんだてのくふう（こんだて作り・食事と加工食品）

食物と調理

- 1、調理のいろいろ
 - 2、たまごじゃがいも（たまごの調理・じゃがいもの調理）
 - 3、調理のくふう
- 楽しい会食
- 1、生活と会食（会食の役わり・会食の計画・会食のこんだて）
 - 2、サンドイッチと飲み物（サンドイッチ・飲み物）
 - 3、会食のしかた（会場のととのえ方・会食のしかた・反省）

間違えて同じことを何回も書いたのかと思うほど重複があるのだ。食品と栄養については五年でも教え、六年でも教える。どちらかで一度教えればすむことではないだろうか。調理についても、ゆでたまごと緑黄色野菜の油いためを五年でやるなら、六年で目玉やきと

こふきいもをやる必要はないだろう。ごはん炊きは簡単な調理なのだから、五年生でやった方がいいのではないか。はいぜんと食べ方も重複して教えるほどのことではない。マナーは最少限のことを教えれば良いのだし、その最少限のことも各々の家庭や地域で教えられる良いことである。おやつのととのえ方、お茶の入れ方、飲み方などは学校で教える必要など全くないことである。

こう考えて、ぼくは教材の統廃合を思い切つてすることにした。また、教科書では、まず座学で教えてから、実習に入るというパターンを取っているけれども、実習をしながら知識を身につける方が納得しやすいのではないかと思うので、それも変えてしまった。そうしてみると、時間がずいぶん余ってくる。そこで、その時間は、教材以前と以外のことに使うことにした。

たとえば、五年生の野菜サラダと野菜の油いためは一緒にしてしまふ。さらに、学校の外に出て、セリやミツバ、スカンボを摘んで来て雑草料理をするに、内容も置きかえてしまふ。雑草を摘んで食べるのも面白いし、調理のやり方も身につくし、材料費もかからない。植物の名前も覚えられると、いいことばかりである。ついでに、若菜を摘むのは、生命力を食べるという意味のあることも教えられし、万葉集の歌の一つも口遊んでみせれば子どもに尊敬(?)されるというものである。

ごはんの炊き方についても、ガスで炊くだけなら、家で親から習えば出来ることである。学校でやるなら、もう少しやり方を工夫したい。ぼくは、ごはん炊きは五年生の教材にして、校庭の隅にかまどを作つて、飯盒炊きさんをして、おにぎりやカレーを作つたり、奄美大島風チマキを作つたりしてみた。その方がはるかに面白いので

ある。このくらいの工夫なら誰にでも出来そうである。校庭にかまどを作つて飯盒炊きさんが一人では大変なら他の教師に手伝ってもらつてもいいし、父母にボランティアをお願いすることも出来る。

もっと意欲的にやるなら、休耕田を借りて田植えから始めることも出来るし、米の文化史と合わせて学習させることも出来る。あるいは、理科室のビーカーで米を炊いてみるのも、子どもの興味を引くやり方である。やり方はいっぱい、やりたいこともいっぱいあるのに、教科書が六年でごはんとみそ汁になっているからそのままやることで、満足できますか。

というわけで、食べ物と栄養については一括して六年生で教えることにした。

栄養についての教科書のおさへは、食品群と偏食のことである。

そこで「毎日、全部の群から食品を選んで食べるようにすると、栄養素のととのった食事となる。すききらいなどをして栄養がかたよると、健康な生活ができない」となる。教科書が示している食品群は六つの基礎群に分ける方法である。このやり方は、ぼくが小学生の時に習つたものと同じで、給食室にも表が貼つてあつた。その古い表がそのまま直されもせずに教科書には載っているようだ。図がなんとも古くさいのである。絵が下手なのである。みそがドンブリのような容器に入つていたり、レバーが竹皮に包んであつたり、牛乳がビン入りである。今はそんな容器に入っていないのに、平気なのである。おまけに印刷までボヤケている。この表を見ても、子どもにはピンと来ないのである。それこそボケて入ってくるのだ。

また、この表では、パンには炭水化物しか入っていないように思えてしまふ。肉や魚にはたんぱく質しかないように思つてしまふ。

もちろん、表の外側には「おもに」と説明が入っているけれども、子どもの方は、肉||たんばく質||身体を作るものと理解してしまう。肉には油類も入っていること、牛乳にも油類が入っていると説明しても、子どもは「だって教科書の図にはそうならない」と言い返してくる。

この単一化は、実は家庭科だけでなく、社会科にも当てはまることである。たとえば、ぼくは島は小さい所であると教え込まれていたから、佐渡ヶ島は江の島を一まわり大きくした位の所と思い込んでいて、佐渡出身の人に偏見だと怒られたことがある。詩というのは美しいことばを連ねたものだ、長いこと思いこんでいて、現代詩にびっくりしてしまうのも、教育のせいなのである。

また、六つの基礎食品群について「全部の群から食品を選んで食べるようにすると、栄養素のととのった食事となる」とある。この記述も問題である。これを子どもは、「六種類食べないといけない」と受け取ってしまう。そして、自分の家の食事は貧しい、他の家ではもつと豊かな食事をしていると思いこんでしまう。実際、栄養素の勉強をしたあとで、家に帰ってから母親に文句を言ったという子どももいるのである。六種類の基礎食品群を全部とれるほうが良いだろうが、なかなか経済的にも、時間的にも出来ないことなのである。

六種類に分ける方法がいつごろから導入されたのか、ぼくは知らないけれども、どうも、欧米人の体格に追いつけ、追いこせの発想が背景にあったように思える。そこで、肉を食べよう、牛乳を飲もう、バターを、チーズをと指導して来たのではないだろうか（その有効な武器になったのが学校給食である。その問題点については、

授業ではほとんど触れられなかった）。確かに、子どもの体格は良くなつて来たが、同時に、虫歯が多くなつた、骨折が増えた、内臓・消化器系の疾患が多くなつたなどの指摘も多くあげられるようになった。日本の食糧供給の実態などを考えれば、今の日本人の食事は日本人には向いていないと言つても間違ひではないようである。こんなことを考えてから、栄養の指導に入つたのであるが、分類の仕方は、教科書の示している六つの分け方の他にもあるとして、次のように説明してみた。

食べ物と栄養

1、六つの栄養素（略）

2、三色の食品群

①赤（肉、魚、豆、牛乳、卵）——血や肉になるもの

②黄（ご飯、小麦、さとう、油、いも類）——力や体温のもと

③緑（野菜、海草、きのこ）——体の調子をととのえる

3、まどぎわのトットちゃんの分け方

①山のもの

②海のもの

4、陰陽学の分け方

①地上のものと地下のもの

②動物と植物

③白いものと色のもの

こう説明していくと、まじめにノートを書いていた子どもが「トットちゃん」のところで笑い出す。教科書の分け方とは、「トット

ちゃん」の中にも書いてあったけれども、ずいぶん違うからである。まさか「トットちゃん」の分け方を教室で教えるとは思わなかったのである。」「それ知ってる、もう読んだ」の声が出てくる。

続けて、陰陽学の発想の分け方を言うと、子どもたちは「ウソオ、そんなのあるノオ」とうれしそうである。中国の哲学の一つだともっともらしい顔をして、地上のもの＝葉、実 地下のもの＝根菜、いも、動物＝肉、魚 植物＝こく物、野菜と説明していると、子どもたちもだんだんノって来て、「そんならオヤ・サカナヤ・肉ヤ」という分け方もある」「やわらかい・固い」「うまい・まずい」とにぎやかになる。

にぎやかになったところで、「そこで、食べ物を分けてみよう」となつて、三日間の食事調べをしようと宿題を出す。子どもの方は、うまくノセられて宿題では合わないのどうやるのかわからないと文句を言つてごまかそうとしている。ほくは黒板に「五日、朝、ご飯、かんびょうのみそ汁、ビフテキ、サラダ、メロン」と書いて、地上、地上と分類してみせる。しばらく哑然としてから子どもは「あ、ミエ張ってる」と騒ぎ出す。「そんなにいいもの食べてるはずがない」と氣付いたのである。

次週、宿題をもとに分類をしてみる。宿題をなまけて、三日間の給食だけをノートに書いて来た子どももいる。それはそれでいいではないかと思うので、咎め立てはしないことにする。一番前の席にいた女の子のノートを黒板に書き写す。

二八日 朝 パン りんご ハム 牛乳

昼 やきそば ご飯 なつとう

二九日

夜 カレイのからあげ ぶた汁 とり肉などの煮もの

朝 パン 牛乳 いちご ハム

昼 うさぎパン 牛乳 あげじゃがいもとハムのソテ

ー わかめのスープ

夜 ドライ・カレー みそ汁(豆腐、わかめ) サラ

ダ ご飯

三〇日

朝 ラーメン 牛乳

昼 くらパン ソフトチーズ 牛乳 カレーヌードル

バナナ

夜 マグロのさしみ サラダ 大根 コロッケ わかめスープ ご飯

黒板に書き写しながら、ぼくも改めて、今の日本人の食事というのはメチャクチャだなあと思つてしまった。朝食が簡単なものになつてゐるのは仕方がない。時間をかけて準備する余裕がないのはこの家も同じである。しかし、ラーメンに牛乳というのは、どうも取り合わせが良いとは言えない。もつとひどいのは、パンにヌードルという取り合わせである。どっちが主食なのだろう。しかも、これは給食の献立なのである。「これはダメだね」と言うと、子どもの方は、何を言いたいのか察して「わかった。わかった、ガマン、ガマン」と答えてくる。

この食事調べにみんなで栄養素を書きこんで行く。六つの場合、三色の場合、トットちゃん風とやってみた。そして、診断として、カロチンとカルシウムが不足しているとした。それから、各々、自分の食事の分析をしたのであるが、その食品にどんな栄養素が含ま

れているのかはなかなかわからないようだ。ぼくも、『栄養分析表』を片手に「コンニャクは何にもないけど、固める時にカルシウムを使うから、無機質が入っているかな。それと胃腸のそうじ」「コンソメには塩分かな」「ハンペン？　ハンペンは何から作るのか考えたら」と質問に答えていった。

分析が終わって診断を各々してみたのであるが、六つの分類ではやはり、無機質・カロチンが不足がちである。が、やわらかい・固いと分けてみて改めてびっくりした。固いものがほとんどないのである。骨ごとかじる。バリバリかみくだくという食品はない。地上・地下と分けると、地下のものがほとんどなのである。そこで、長生きの人の多い地域では、どんな食事をしているかと説明をし、カボチャ、レンコン、ゴボウをたくさん食べようと言うと、子どもの方は「穴のあいたレンコンさん、筋の通ったフーキ」と歌を歌い出す。

騒がせてなるものかと、ぼくもノートを取らせる。

「塩の働きと良くないところ、殺菌・水分をぬく（保存に役立つ）・体の生理をととのえる・脳^{（脳）}・血になる・じん臓心臓に不たんがかかる。

◎塩分の取りすぎに気をつけよう（ラーメンのつゆを欲ばって飲むナヨ）　砂糖の取りすぎに気をつけよう、歯や骨に悪い・脂肪になる

◎食事で気を付けたこと①色の濃い野菜（特に根菜）を食べる②カルシウム分を多く取ろう　③固いものを食べよう」

ついでに、わら半紙を配ってテストもしてみる。もちろん、子どもは口々に「え？　テスト、なぜ？」「家庭科だけはテストがない

と思ったのに」とブウブウである。問題と子どもの答である。

問1　魚から作った食べ物を書く

答1　はんぺん、かまぼこ、つみれ、ちくわ、ソーセージ、たたき、塩焼き、生

答2　アジのたたき、塩焼、さしみ、みりん、かまぼこ

答3　かまぼこ、ソーセージ、つみれ、かんでん、さしみ

問2　牛乳から作った食べ物を書く

答1　ホットケーキ、バター、かんでん、クッキー、チーズ、ケーキ、ヨーグルト、生クリーム

答2　ヨーク、ヨーグルト、バター、アイスクリーム（パニラ）

答3　かんでん、アイスクリーム、ホットケーキ、バター、チーズ

問3　米の食べ方を書く

答1　やきもち、まんじゅう、おにぎり、だんご、おすし、

しらすご飯、ごもくご飯、せんべい、あられ

答2　燃く、たく、にる、かける、ムギ、パン、ビール

答3　むすーふつうのごはん、たくーおこわ、まぜご飯（豆やしいたけなどを入れる）、もち、ちまき、くさもち、おじや、せんべい

子どもの書いた答を見ながら、「最近の子どもはカレーの木があると思ってるんですね」「人参が土の中に出来るって知らない子どもがいる」「バターが何から出来ているか知らない子どもがいる

んですよ」と得意気に吹く人たちの表情を思い浮かべてしまった。マイッタナーと思ってしまう。どうして、みりんが魚の加工食品なのだ、かんでんがてんぐさだって知らないのかとブツとなってくる。でも、よく考えてみると、知らなくて当然ではないかという気になってくる。てんぐさからかんでんを作った体験は当然ないのだし、作るの場所を見たこともないのである。かんでんが魚の練り製品と思うのも、牛乳の加工食品と思うのも、もつともなのである。アイスクリームでもバナナだけが牛乳から作られていると思うのはかなりの知恵なのである。この答を見て「今の子どもは」と得意がるのでなく、それだからこそ、家庭科で教えるのなら初めから最後までということが必要になってくるのである（米の食べ方でやきもちというのがあるって、ぼくは冗談に書いたのかと思って子どもに聞いてみたところ、もちを焼いたのをやきもちというと言面目に言っていた。後日、新宿の飲食店に入ったら本当にやきもちと書いてあった。もう一軒の店には、目玉焼きが月見焼きとなっていた）。

食べ物調べをしたついでに、加工食品の表示の見方、罐詰などの製造年月日の見方も教えてしまうことにして、第三次には、清涼飲料水のカン、加工食品の袋などを持ち寄って調べてみる。五年生のママレード作りの時に農薬、カビ防止剤、艶出しワックスのことを説明し、夏の水泳指導の時に殺菌用の塩素のポリタンクに「食品添加物」と書いてあつてみんなでびっくりしたことを思い出させて、食品添加物のことも調べさせる。市販の食品のほとんどに色々な添加物が入っていることに子どももずいぶん驚いたようである。

一人の母親が届けてくれた「添加物一覽表」を示して、日本では三三四種類の添加物が許可されていること、これは世界で一番多い

こと、その中には毒性の強いもの、安全性が確かめられていないもの、いくつかが交り合うと毒になるものがあることを説明する。子どもたちは「えー！ そんなにたくさんあるの。どうしてそんなに使っているの」とびっくりしている。着色料の名前を調べた子どもは、「名前はきれいだよ。ブリリアント・ブルーだってさ。名前のいいものは中は良くないのかなあ」と感心している。感心ついでに、「添加物一覽表」の注文を取ると、一クラスで十四人ほどが欲しいと言ってきた。もちろん、ぼくの分も加えて十五枚を申し込んだ。

（藤沢市立村岡小学校）

* ひと * 名 取 弘 文 さん

いまや、日本教育界の名物男的存在となつた名取さんは、自称「薬師丸ひろ子の恋人」でもあります。もつとも、そう言った時の相手の反応が楽しいという人の悪さ……。実際はナイーブな感性の持ち主ですが、それをそのまま現すテレクさが、凝っていたはずになるのでしょう。無類のサービス精神で、周りを沸かせますが、独りの時はどうなのでしょう。家庭科の固定概念を打ち砕く、みかけよりずっと強力なコンクリートミキサーです。

（半田）

☆☆☆☆☆
新しい家庭科を創るために
☆☆☆☆☆

中学校では
——
熊本県家庭科サークル

共学の食物学習Ⅰ

吉田 泰江

(栄養の学習)

一、はじめに

一九七〇年ごろ、私は共学の実践や討議を聞いても、共学の必要性すら充分認識しなかった。ところが、食品添加物・合成洗剤の問題点、保育学習での生活軽視の社会風潮などを教材化している中で女子だけ学部家庭科に疑問を感じ始める。ちょうどその時期、24次全国教研に参加し、「教育は子どもの全面発達を保障するものである」を学んだ。

一九七八年度入学の一年生を全面共学で実践しはじめから五年を迎えた。八一年度になって、やっと学習ノートも年度はじめに一年分（全クラス分）を準備できるまでに至った。それまでは、実践のたびに学習ノートを改訂・補充し、前期ノートが後期にそのまま使用できることはなかった。

入学早々の一年生の多くは、家庭科教室に男女が同室していることに疑問を持たないが、それでも数名の子供は「男子には家庭科は必要ない」と必ず言う。この子供たちの認識を「やっぱり家庭科も

必要なのだ」と変革させるような授業実践をやらなければと、教材研究をやってきた。子供たちに、どんな力をつけてやればよいのか、そのためには、何を教材にし、それをどう展開させたらよいのか、サークルでも研修してきた。

「一年の食物領域では、『なぜ食べるのか』『何を食べるのか』」のようにして食べるのか」を炭水化物（米・麦）を中心にすえ、先の知恵にも眼を向けさせながら、学習を進めてみた。

二、題材「食物」

1、食物の役割

- ・人間のからだは何からできているか
- ・なぜ食事をするか（食事の意味）

- ・食品の仲間わけ
 - ・栄養素のはたらき
 - ・食事調べ（私の一日分）
 - ・食事診断
- ### 3、米の学習

- ・米づくりと食生活（なぜ日本人は米を主食とするようになったのか）
- ・米の精白（玄米から搗糟）
- ・炊飯実験
- ・でんぶんの糊化

4、小麦粉の学習

・粉について

・小麦粉の実験（米の粉も含めて）

5、調理実習（米・小麦粉を使ったもの）

・カップケーキ

・だんご汁

・カレーライス

6、食品添加物

7、食物と健康……実践報告では、はぶく

(+)食物の役割

食物を学習するにあたって、まず人間のからだは何からできているかを考えさせる。

・「がい骨を書こう」 学習ノートにがい骨を書かせる。班員と話し合ってもよい。ポイントをおさえて単純化した図絵をかくように助言・指導する。

生徒の代表に「がい骨」を板書させる。それに、自主テキストNo.1のように肉づけしていく。

〈資料〉自主テキストNo.1

1、人間のからだは何からできているか

（がい骨の図は省略）

からだの成分	栄養素	1g当たりエネルギー
骨・歯	無機質	

三、学習展開

筋肉 血液 内臓 皮膚 毛・つめ	たん白質	4キロカロリー
脂肪	脂肪	9キロカロリー
水分	水分	
動力源	炭水化物 (脂肪・たん白質)	4キロカロリー
潤滑油	ビタミン	

私の体中の水分 \parallel 体重 $\times \frac{66}{100}$ 、私の体中の血液 \parallel 体重 $\times \frac{13}{100}$ を計算させる。水分の多いのに、子供たちは驚く。この水分が重要な働きを持つことを学ぶ。

2、なぜ食事をするのだろう

班討議をし、各班が板書する。板書したものを全員で検討し、まとめる。

〈資料〉自主テキストNo.2

・なぜ食事をするのか

(1)体を作る栄養分や水を取り入れる。

人間の体は、骨を中心にして、筋肉や内臓・血液など、すべてが細胞で作られています。それぞれの細胞の成分を調べてみますと、水・たん白質・脂肪・無機質などから成りたっていることがわかり

ます。いろいろな食べ物を口から取り入れ、胃腸などの働きによって消化・吸収することにより、体の細胞が作られるのです。

(2) 生きていくため、活動するため

人間は、たとえねむっているときでも、心臓をはじめとした内臓器官は、完全に休んでいるわけではありません。そして、いつも体温を一定に保つための、さまざまな働きが行われています。

本を読んだり、話をしたり、走ったり、歩いたりなど、人間が活動するときには、筋肉や、内臓の細胞のそれぞれが、盛んに働いています。細胞も、ただばたきをするわけではありません。自動車のエンジンも、ガソリンがなければ動きません。モーターも電気を通さなくては、まわりません。このガソリンや電気のことを、エネルギーと呼んでいます。人間でも生命を保ち、活動するためには、食べ物、胃腸で消化・吸収され、血液によって、栄養素がそれぞれの細胞に運ばれるとき、エネルギーが生まれるのです。したがって、何も食べないでいては、働くことはもちろん、生命も十分に保てなくなってしまうのです。

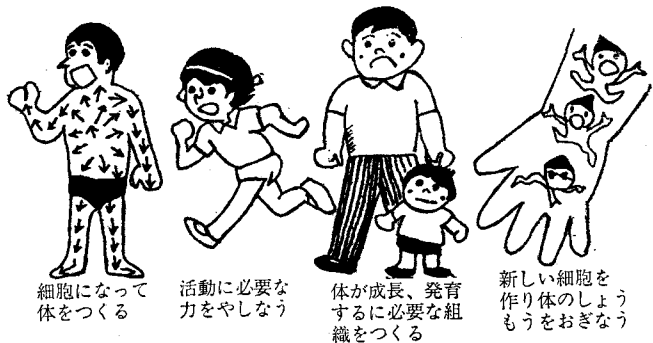
(3) 体の成長と発育

子供が成長して、大きくなるのは、体の骨ぐみが大きくなり、筋肉も発達し、血液もふえていくからです。

このように、体が大きくなるためには、細胞の数もふえなければなりません。まえから一つ一つの細胞が大きくなるわけではありません。細胞をふやすには、細胞の成分となる食べ物をたくさん取り入れなければなりません。

(4) 体の消え方をおさなう

体を作っている細胞は、いつまでも生きつづけるわけではありません。



(小学館『子ども百科辞典』より)

(一) 食事と栄養素

・食品の仲間わけ

各自に食品成分表を配分し、その取り扱い方、活用方法を知らせる。

私たちの毎日の栄養を満たすには、どんな食品を食べたらよいのかを知るために、食品を仲間わけしてみ

せん。古くなると、かわれて、新しい細胞ができ、たえず少しずつ入れかわっています。体のそれぞれの組織の働きを保ちながら、このような細胞の入れかえが、いつのまにか行われています。そのためにも栄養を取り入れなければなりません。

よう(次頁自主テキストNo.3参照)。

食品成分表から、各項目五、六種記入させる。特に栄養素については、濃い字で書かれているか所を記入させるが、カロリーは省く。栄養的特質の項は、次時学習(成分円グラフ)で行う。

各食品群を代表する、食品成分を円グラフで整理させる。各班に3品目位ずつ与え、円型紙に各食品成分を色別し、黒板に添付させ

〈資料〉 自主テキスト No.3

くだもの	淡色野菜	緑黄色野菜	魚・肉・卵	牛乳・小豆・海藻	豆製品	油脂	砂糖	いも類	穀類	
							(例) あめ さとう はちみつ	(例) こんにゃく さつまいも さといも じゃがいも やまいも	(例) 米 小麦 小麦 そば とうもろこし	食品
							炭水化物	炭水化物 ビタミン	炭水化物 ビタミンB ₁	主に含まれる栄養素
										栄養的特質

る。栄養的特質を理解させるのに役立つ。

白米、いも、砂糖を炭水化物だと一語ですませていたものが、穀類には水分が比較的少なく、いもには水分が多く、ビタミンもそれぞれ異なることに気づく。砂糖は、炭水化物のかたまりみたいだと答える。どの食品にもほとんどの栄養素が含まれており、特に水分の含有大なことにおどろく。

・栄養素のはたらき

〈資料〉 自主テキスト No.4

栄養素のはたらきについては、小学校五年生で、左表のような学習をしました。関係のあるところを——で結ぼう。

栄養素

はたらき

炭水化物

主に、熱や力のもとになる。
体温を保ち、仕事をする力を与える

脂肪

正しい栄養にはすべての成分がとりあいよく

たん白質

主に、体をつくる。
筋肉や血液・皮ふ内臓などをつくる骨や歯をつくる、成長する時期に特に必要

無機質

ビタミン

主に、体の調子をととのえ、ほかの栄養素のはたらきを助ける

・食事調べ(私の一日分)

昨夜から、きょうにかけての一日分の食事を記録してみよう。



〈資料〉自主テキスト №5 食事調べ（私の一日分）

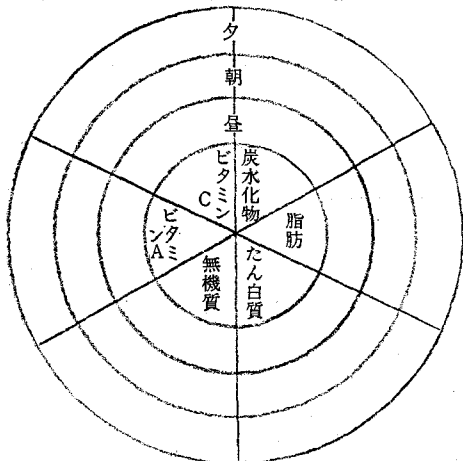
夕朝食	献立名	食品名	熱や力のもとになる		体をつくる		体の調子をととのえる	
			炭水化物	脂 肪	たん白質	無機質	ビタミンA	ビタミンC
夕食	カレーライス	米（めし） 豚肉がいの じゃ参ぎ 人玉ねぎ ……	○ ○	○	○		○	○

「我が家の食事、いっぱいあるときと、粗食のときとがある。ときには、朝寝ぼけして、朝食ぬきのときもあるし、又は夕食をぬいちゃうときもある」。本時の学習は、『きょう一日の自分の食事はどうか』を診断したいのだから、ありのままを考察しよう。と記入時の留意点を与え、記録させる。

子供たちが一日分の摂取状況を記録したところで、質問を受ける。

「食品の仲間分け」を既習したが、その理解度は浅く、質問は続出する。

〈資料〉自主テキスト №6 〔食事診断〕



子供たちの質問は、全員にもどし、討議のうえ解答をだす。食事調べで、満たしている項目（自主テキスト №6 参照）は、色鉛筆でぬり入れる。

摂取しにくい栄養素は、どんなものかを考え、それを、どう満たしたらよいか話し合う。「夕食のカレーライスでは、無機質が不足した」「何を食べて補うか」「スープの中に牛乳を入れたらよい」「薬味に小魚のつくだにを」「色の濃い野菜がとりにくい」……。

まとめ

栄養知識・食品摂取量、献立、調理といった従来の学習では、ただ暗記させるだけで、実生活にいかしにくく苦勞をしていた。この自主編成を始めて、「私たちのからだは何かからできているのだろうか」「私たちは、なぜ食べるのか」と身近なところから出発し、食べものと、どうかかわっているかをおさえて、食べることの大切さを教えることができたと考ええる。

次回は、「どのようにして食べるか」を日本の代表的な「米」を題材にし、米からの搗精、炊飯で、取り上げる。我々の祖先が、米を栽培し、加熱調理の方法を獲得していった歴史を含めながら、炭水化物の学習を展開したい。

（熊本県菊池郡合志中学校）

高等学校では

寺島 紘子

性と女性解放 (1)

女子高校生の性意識

A、私自身、なぜ女に生まれてきたかつらくなります。月一回の生理もつらいし、子どもを産むのも女です。ああこわいなあ。それから先生、私はセックスなんて絶対きれいなものとは思いません。お互いに欲望を満たしあっているにすぎないと思います。なぜ人間は、そんなことをするように生まれてきたのかイヤになります。B、売春は自分も楽しんでそれに加えて、お金もらえる。すつごくわりのいいバイトですよ。愛しセックスなんて十年以上昔の考えです。今どきそんなのナンセンス！ フィーリングがあったり、その場のフンイキとか……。まあ色々あるけど遊びで寝れますよ。愛があるって場合の方がやりにくいです。セックスなんてもんは最初から遊びなんです。その方が気が楽でしょ。お互いに。ところで今どき、結婚するまで童貞なんて男や、処女なんて女いますか？ いるとしたら、それはおかしいですよ。処女ってのはいいかも知れないけど。童貞なんて気持ち悪い！

C、性の知識はあった方がよいのでしょうか。それともない方が？ 私は結婚までは知らないでいたいし、純潔は守りたい。

D、自分は、襲われたらどうしようと、毎日が恐れと不安でいっぱいだ。結婚して相手とセックスするまでは、やっぱりその不安は、ずうっと持ち続けていくだろう。

E、ピンクがなぜいけないか。男の人たちは家庭に満足していないから、色々行ったり、買ったりするんじゃないか。男の人たちの欲求不満を満たしてやろうというのだから、それでいいんじゃないかな？！

F、男はなぜお金を払ってまでトルコやピンクサロンへ行くのか。女を買ってまでそういうことをしたいのか。そんなに価値のあるもののなか。

G、経済的に頼りないハズバンドに嫁ぐつもりはない。相手を選ぶにあたって恋愛なら適当でよいが、結婚となると誠実で家庭的な人を選ぶだろう、結婚して姓が変わり、気分あらたに新しい人生に出發する。

一学期、セックスについて好きなことを書いてもらった中での彼らのつぶやきである。

現実的なものから、古風なものまで様々だが、女の性は受け身で、何も知らないことがかわいいと思ひ、自らの性を経済性におきかえ、男の買春を許容し、男性優位の性文化をそのまま受け入れている。

そして大部分の生徒は、セックスに対し、強い不安感と好奇心の入り混じった気持ちをつづった。しかし、興味関心の強さにひきか

え、自分のからだについては、あまりにも知らなすぎる。概して彼らは自分の性的発達を肯定的に受けとめていない。

もちろん、その生徒をとりまく環境や、ひとりひとりの生育歴によって、意識や知識にかなりの差が出てくるのだが。商業ベースにのった性情報が強烈な刺激となつて、一方的にどんどん彼らに送り返されてくる。友人たちとの日常会話の中で、AやBやCといった隠語がとびかい、中絶カンパや水子供養などが話題になる。

性についての意識や行動は友人たちとの会話や週刊誌が、また、社会通念としての男女の役割意識が、彼らの規範となるのである。

新しさと古さの狭間で

かくいう私はどうであつたか。小さい頃より、性は口にすべきものでないと思つていたし、つくられた性を払拭することができず、自分のからだにも自信がなく、劣等感を持ち続けてきた。仕事を持ち、結婚し、女性史などを学び、夫との関係を問い直す中で、やっと私も性の呪縛や偏見から解き放たれつつある。が、正直なところ、今だに私の中には、性を口にする時、気恥ずかしさがある。こういう感覚は私の中でしみついた体質とまでなつてきているのだ。

からだのこと、セックスのこと、産むことについては、数々の偏見やタブーが我々女を苦しめてきた。人間にとつて自分のからだのことを、きちんと知ることがあたり前のことであるのに、そこだけがオブラートにつつま込まれていた。

しかし、こたわっているのは、むしろ私の方で、生徒はさほどの「こたわり」もなく授業に臨んでくれるのだ。若い彼らは、明るく、柔軟に受けとめる。

私の時代にくらべ、現代はずいぶん性もオープンに語られ出した。若者たちの性の実態や意識は、大人や教師の思惑を越えてすすんでいる。互いのズレは大きい。

現象面的に「困った」様相を呈しながらも、反面から見れば、彼らは人間としての自由と自立を求めて抗^{あらが}つているのだ。新しいモラルを模索しているともいえよう。そういう若者たちの生き方に信頼をおくことは、性をとり上げる時の基本的な姿勢として大切である。だからといって、「差別撤廃条約」や「男の自立・女の自立」など、男女の対等なかわりが、今日の意味をもつて再構築されている中での、高校生の古さは放置できない。

この古さは、一面には現代日本の貧しさと結びついている。人間関係そのものが、他を抑圧しない自由と平等の上に立っていないからだ。とりわけ男と女の関係は、「最後の植民地」である。愛や性のあり方は、やはり社会のあり方と強く結びついているのだ。

生徒の性について置かれている状況は、まさに混沌としている。

私の授業のねらい

性教育は、性別役割分業を植えつける「純潔教育」でも、やたらと産む性と母性だけを強調した「母性教育」でも、「性非行防止」のための「モラル教育」でもない。

性は、性器と生殖にかかわることのみでなく、人間の生き方にかかわるトータルなものである。つまり現代の性教育はセクシュアリティの教育としてとらえられるようになった。

人間の性は本能から離れ大脳化しているため、セクシュアリティは、自然に身につくのではなく、学習や体験によって決まってくる。

私は心理的にも肉体的にも性的発達の上にある彼らに、次の二点を学習の柱としたい。

1、性や生命に関する科学的知識

2、新しい認識を獲得し、発展させるための情報

性と愛に悩む彼らに、自らの性の発達を肯定的に受け入れさせ、自分自身の性にむかいあわせ、自己洞察させることによって、主体的自我を獲得させることは、青年期における性的アイデンティティを確立する上で重要である。

また、歴史的・文化的所産である男性優位のセックス観を点検することを通して、人間が性にかかわってどう生きてきたか、これからどうすればよいかを考えさせる。女性解放の視点に立った性に対する認識を深めたい。

授業の展開

〈対象〉三年生女子

〈実施時間〉二学期十三時間

〈教材〉自作プリント、スライド、映画

学習事項を次の二つに大別した。

一、女のからだ・生命誕生の科学

二、性愛をめぐる現状と歴史

一から入ったのは、確実なものである「からだ」から入った方が、より我が身にひきよせて、性の問題を考えうるだろうと思ったからである。

一、女のからだ・生命誕生の科学

生物学的な面は、他教科で学習しているので、既習の内容と重ならないよう留意した。

ここでの学習のメインは中絶・避妊・お産である。

導入としてスライド「愛と性 小さな命」を見せた。ここで新たに知ったことや、疑問点をさせたのであるが、このスライドは三年生にとって少しものたりないようであった。「全部知っていることです」「うわべを飾るのがおじょうずで」といったように、大人が性教育として与えるものについては、「何を今さら」といった風である。しかし妊娠や分娩に関する知識は、新たに知ったというものが多く、「もつと知りたい」が多かった。

多少強引であるが中絶の問題から入る。

①中絶とは何か

イ、実態から

愛という甘い幻想の中で性をとらえている彼らに、人間にとって性とは何かを考えさせる時、あえて否定面をみせることにより性の実像を浮かび上がらせる。

まず統計資料を用いて、中絶数や、年齢や階層など、中絶の実態を知らす。そして、性がその属性として持っている、生命・生殖と切り離せない問題であることに気づかせる。

さらに中絶する理由に着目させ、現実の生活の重さや、優生保護法をめぐる論議とその動きについても触れる。世界的傾向として中絶が合法化されていなかった国も、「子どもを産むか否かの決定権は、女自身にある」ことが認められ、女が希望すれば中絶が受けられるようになってきていること。非合法中絶手術による母体への危険性や、中絶手術の進歩という点でも合法化の傾向にあることに触

れる。

さらに、中絶の方法、後遺症にも触れる。一年生が課題研究レポートで「中絶」というテーマの調査のため、学校の近くの産婦人科を訪れ、撮られた胎児の処理について聞いてきた。「三カ月未満の胎児はミキサーにかけ、下水道に流す」という。この話は生徒にショックを与えた。

セックスとは人間のコミュニケーションのひとつであり、その喜びを得るためには、男と女のよい関係をつくること。自分の性を管理できる知識を持つことの重要性を述べる。つまりこれが、「愛する能力」としての条件になることをおさえる。

口、女のからだは誰のもの、子どもを産むということとは

このことについて、いくつかの本を紹介しながら考えさせる。

『からだノート』には「妊娠・出産は私達のからだに備わった能力であり、天職ではない。私たちのからだを働かせ、コントロールするのは、からだの持ち主である私たち自身だ。妊娠も出産も私たちのもの、私たちが選ぶものだ。そして産まれてきた子どもは、私たちのものではない。男たちのものでもない。子ども自身のものである」とある。

『ムンメル―なぜ子どもを生むのか』というスウェーデンやデンマークの高校生のための性教育副読本も、子どもを産むということについての根源的な意味を考えさせてくれる本だ。一組の若い男女の共同生活を写真ドキュメントで詩的につづり、妊娠・出産・育児といった日常生活を彼らをめぐる人間関係と、社会との結びつきの中とらえている。

さらに、女たちの手で、女の視点でからだをとらえ直して書かれ

た『女のからだ』や『ウーマンズボディ』も紹介する。

授業後、私のところへ来て、これらの本を借り出していく生徒も出て来た。

映画「生命創造」の視聴。この映画はフランス映画で性教育教材として、広く使われている。「中絶」と対比させながら、より鮮明に「生命」ととらえさせたい。

生徒はこの映画を大いなる期待で見る。「胎児の発達過程は、たいへん神秘的で、生命の尊厳を感じる」と感動を持って受けとめた感想から、ごく少数だが「グロですねえ。撮影は生命への冒瀆だ」「気持ち悪い」といったもので、受けとめ方は様々だ。

出産場面では、夫が分娩室に入り、妻の出産に立ち合い、夫婦ともに子どもの誕生を迎える場面がある。出産は女の領域にあるものとされる日本の状況との違いについても着目させる。

② 避妊について

私は避妊教育は性教育で欠かせないことだと思う。性と生殖を切り離れた産まない性についても学習の対象とすべきである。

中絶数の多さは避妊のむずかしさを物語る。望まない妊娠は避けることだ。避妊法は、まず自分自身のからだをきちんと知ることから始まる。

イ、からだのしくみと生活

事前に生徒に「知っているか」と聞くと、「よく知っている」というものの、「知らない」というものの半々位である。知っているといるものに説明するようにいうと、「とても説明できません」という。恥ずかしさが乗り越えられていないからか。

それで私が『からだノート』をタネ本にしなが、からだのしく

みを説明する。とくに月経のみごとなシステム、排卵、ホルモンとの関係については、きちんとおさえる必要がある。性器の形や、おりもの、月経不順などで悩んでいる生徒も多いので、悩みに答えるように配慮する。

あわせて、男のからだと生理についても触れる。性欲について、そのあらわれ方は男女差・個人差があるが、男女ともにあること、自然なことであることも知らせる。愛情や妊娠のメカニズムについてもおさえる。

ロ、避妊の歴史の意味

性交、その結果としての妊娠。まさに女の性は生殖に従属してきた。

妊娠という宿命的な事実に対し、人間は墮胎、嬰兒殺し、避妊を考えた。その中で避妊は、眼に見えない現象をコントロールするので、最もむずかしいことであり、成功率も低かった。人類は暗く長い苦悩の闘いを経て、受胎調節の知識と技術を手に入れた。しかし、まだ安全性や確実性の上で一〇〇%完全なものとなっていない。

避妊法の普及は、女の生き方に自由と主体性がもたらした。貧困ゆえの昔の墮胎や嬰兒殺しは、悲惨きわまるものであったが、その歴史をきちんとふまえさせることも重要である。

また、女にとって子を産むことは天職とされた。女性＝母性としての役割が強調され、一生を子産み、子育てで終わっていた。

戦前は、「産めよ、殖やせよ」と結婚が奨励され、避妊は自然の摂理に反するものとされ、産むことが国家に従属させられ、戦力増強の手段として、女は産まされ続けた。戦後は、一転して、人口抑制のための産児制限策がとられた。合法化された「優生保護法」の

もと、中絶がすすめられた。三〇年間に三〇〇〇万〜三五〇〇万の胎児が闇から闇へ葬り去られている。

避妊の発達により、性は生殖の領域から、精神や愛の領域に移行してきたのである。

ハ、避妊の方法

避妊具の実物とまではいかないまでも、図を用いて、その方法と欠点などもあわせて知らせる。生徒の中には中絶が避妊の一種だと考えているものもいてこちらを驚かす。また母親に、「避妊法をよくならってくるように」といわれた生徒もいる。学校で学んでいることを自由に話す雰囲気とその家庭にあるのだろう。

ニ、避妊を選びとる主体としての男女関係

避妊のハウツーは知っていても、避妊が自らのものとしてとり入れられていなければ意味を持たない。避妊をオープンに語り合える男と女の関係こそが問われる。言葉の上だけで「愛している」という男女関係では、このことがあいまいになる。避妊をあからさまにいけないまま性交し、妊娠という事実には、女だけが背負うことになる。性の拒否権も行使できる女の主体性が望まれる。

そういう意味で、女子高校生が自分たちの手で作ったという「性とかからだ」に関するパンフレットは興味深い。生徒に紹介する。

「ねえ、ちゃんとヒンしてよ」って一言がいえなかったせいで、泣いてきた女の子たちがどれ程多いか！「ねえ、ちゃんとヒンすることを考えてよ」の一言でおこるような男の子だったら、今はよしといった方がケンメイだ。自分達の付き合ひ方に自信があるんだっただけだ。ニンシンしてから責任のなすりあいなんてサイティだと思わ

いかい？ 急に言えないっていうなら、今から徐々にその手の話ができるフランクなふんいきをつくればいい！」

そして自分たちの手で避妊法を検討して答えを導き出している。

『現代性教育研究』一九八一年十月号宮淑子「權威的・画一的な学校での性教育に異議あり！」より）

③お産について

胎児の発達、分娩、産褥、母胎と胎児に危険を及ぼすことなど、出産の科学については、長野県「家庭一般」資料集を用いる。この辺は、初めて聞くものが多くシーンとしている。

さらにここでは、産む側に立ったお産のあり方とは何かという問題について問題提起しておく。

近代医療による施設分娩は、周産期死亡率の減少をもたらすというところで画期的であった。しかし一方、人間の命を産むという営みが、会陰切開や陣痛誘発剤や人工計画分娩などにみられるように、自然分娩から離れ機械的になり、人間らしさの側面を失ってモきたセックスは男まかせ、出産は医者まかせというのではなく、産むという行為を自分たちの手にとりもどそうという動きが起こっている。

病院分娩を否定するのではなく、産む側と産まれる側と、そして産ませる側（夫や助産婦）の三位一体となってお産のあり方についても考えさせる。ラマーズ法や、精神性無痛分娩法を紹介する。

「二、性愛をめぐる現状と歴史」については次の項目をとり上げた。
①新しい潮流の中で性は ②女の普遍的悲劇（レイプ問題にかかわって） ③青春観光とからゆきさん ④性と結婚の歴史 ⑤戦争

と性 ⑥アメリカ十代の妊娠の実態 ⑦マスコミと性 ⑧「性と愛」若干の問題提起

これらの「展開」と「生徒の感想及び疑問に答えて」、さらに「男女でとりくんだ愛と性」を次回で報告したい。

（石川県立金沢桜丘高等学校）

＜参考資料＞

◎授業で使ったもの

『からだノート』中山千夏、ダイヤモンド社

『女のからだー性と愛の真実』ポストン「女の健康の本」集団、合同出版

『ウーマンズボディ』ダイヤグラム・グループ編集、鎌倉書房

『ムンメルーなゼ子どもを生むのか』フランス・ヴェステイン著

北沢杏子文、アーニ出版

『現代性教育研究八一年六月号「避妊」』小学館

『間違いだらけの中絶』石浜淳美、潮文社

『女のからだ』もろさわようこ編集、平凡社

『たしかな青春の日々をー人間の性と母性の健康』村瀬幸浩、実教出版

『資料家庭一般』一橋出版

『資料家庭一般』長野県教育文化会議家庭科教育研究会編集、法規文化出版会

『お産革命』藤田真一、朝日新聞社

『子を持つ女が輝くとき』佐藤洋子、教育資料出版会

◎一読をおすすめしたいもの

『屈折した少女の性』宮淑子、潮出版社

新しい家庭科を創るために

大学では

田中 恒子

大学生の生活認識と家庭科

— 発達の変遷は大学生にも —

子どもの心とからだのおかしさが指摘され始めて、久しい時が経つ。その子どもたちも成長し、青年の幼児化現象が問題となり、その青年たちが親となり、子どもを育てている。

二十年近い大学教員の生活の中で、大学生の変化を痛感する。自身は、女子の大学進学に反対する親を説得して進学したので、学ぶことは私自身が選んだ生き方であつた。

奈良教育大学では、「教材研究」（学校によっては「初等科教育法」と呼んでいる）の授業は通年になっている。その第一時間目の授業で、「大学にきてまで家庭科を学ばなくてはならないことを残念に思う人」ときいて手を挙げさせると、男生徒の多数と女生徒の少数が手を挙げた。「国語は」ときくと、同じだけの手が挙がった。「英語は」ときくと、なんと全員（百名強）が手を挙げた。もう一回繰り返している同内容の授業でも同じ結果であった。それでは、学びがいのある英語教育を求めて教師と話し合うかというところ、それもない。苦役としての学習をなんとか要領よく乗り切りたいとい

う気持ちができる。

授業を進めていこうとすると、家庭教育のあり方を考えさせる以前の問題として、学生たち自身の受身的学習態度とぶち当たらざるをえない。一時間目の授業に出る前は、「今年はどんな学生たちなのだろう。さあ、真剣勝負」と言いきかせて出かける私である。

今年の日教組教研（広島）に正会員として参加された男性の先生から、「家庭科の先生方は被害者意識が強いですね。それでいて、今日の子どものたちの問題状況に家庭科が一番よく立ち向かっているという自負心も強いですね。僕は家庭科は八分の一（小学校だから）だと考えています」と感想を言われて、日ごろの自分自身を反省するところもあった。学生に先のような質問をしてみる気になったというのも、学生たちの中に家庭科に対して他教科に対するよりも学ぶ意欲が低いだろうという私の推測というか、私の思い込みからきていると気づいた。

他教科の教育法の先生からも、「家庭科は大変ですね。横に向いている顔を前に向かせるところから始めなければならぬんですから」と言われて、私自身もずっとそう思い込んできていた。しかし考えようによつては、教育活動の効果のわかりやすい教科だと言えるかもしれない。困難だからできないと言うのなら、教育活動は意味をもたない。家庭科教育のもつ発達上の役割を探りたいと思えば、私の目の前にいる大学生たちにまづぶつかっていかなければ

ばならない。

私が家庭科教育法を担当するようになって丸八年になる。それまで全くお門違いの工学部建築学科などというようなところに十一年もいたものだから、最初の年は不安の固まりのような状態だった。逆に言えば、乾いた砂が水を吸い取るように、家庭科についてがむしやりに勉強した。授業方法も学生たちと共に作ってきたという実感が強い。

そして、今年の授業（二年生の後期から始まり、三年生の前期に続き、三年生の夏休み明けに教育実習がある）の初めには、二つの目標を立てた。

ひとつは、この授業を通して自分自身の生活をよくみてほしいということ。子どもの見える教師になろうとよく言うけれど、子どもが見えるというのは、子どもをそのおかれている生活状況とのかかわりでとらえることではないか。子どもの生活状況が理解できるためには、まず自分自身の生活はどうなっているのかを認識しなければならぬ。

この点については、私の大学では一般教養科目として、ずっと以前は「家政」という科目が開講されていたらしい。それがあれば、「教材研究」の授業で学生自身の生活実態について問いつめなくてよいかもしれない。しかし、無いものねだりは意味がない。見方を変えれば、「子どもの実態は……」と言っている中身がいかに学生自身の生活実態と近似しているかが認識し易いとも言える。

もうひとつは、学生が自分自身の家庭科観を持つこと。現職に就いた頃（八年前）は、家庭科教育に関する諸説を紹介した年もあった。

だが、学生の家庭科観形成にさしたる意味も持たないようであつたので今は全くしていない。受験を通り抜けてきた学生たちは、暗記は得意とするところだが、試験が終わるとものの見事に忘れてしまふ。各種見解の羅列的介绍は「観」形成に役立たず、批判的介绍を全面展開するだけの時間的ゆとりもない。私の考える家庭科教育を正面にすえて、学生にはそれをタタキ台としてほしいと言っている。

毎年一時間目の授業の終わり三十分ぐらいで「私の受けた家庭科教育」という短いレポートを書かせる。圧倒的な学生が女子のための技能教育であるという認識を育てられている。ほんの一部分（大体数名）の学生は、男女共に生活のあり方を考える教育だという認識を持っている。奈良県は、ありがたいことに京都府のお隣りにあり、京都府立高校における家庭科男女共修の成果が、我が校にも伝わってきている。そう、京都府立高校卒業生が確実に何名か、毎年「家庭科教材研究」の授業を受けているというわけである。この学生たちに高等学校での経験を話してもらうと、教室の中に小さななどよめきが起こる。女子のみの教科と思ひ込まれていたのに、男女共学で学んでいた人が、自分と同年齢の人の中に居たことに対して。また、学習内容も相当違っていることに対して。一時間目で「おや、この先生、今までの家庭科の先生と違う」とか、「もしかしたら男子も家庭科を学ぶ必要があるのかな」とか思ってくれたらしめたもの、二時間目からは正面を向いて授業をきくようになる。

実は昨年は年間の授業の後半部分を相当変えた。その理由は、学生が変わってきているという数年前からの実感が抑えがたくなり、

従来通りの授業をしていてもいいのだろうかと思ひ、いくつかの具体的契機があったことだった。

学生が変わってきている点は、ひとつには学ぶ姿勢。なるべく楽に単位をとりたい。だのに「家庭科教材研究」は、授業時間外に少なくても十時間、多ければ三十時間もグループで集まって研究発表の準備をする。それでたつた一単位しか出ないとは何だ、皆欠席でもテストさえ受ければ単位を出す先生も居るのだぞ、と学生が言ってくる。こちらも、あなたはどんな教師になりたいのですか、と問い返すが、空しさは抑えがたい。以前にもこんな学生は居なかったわけではないが、最近が増えてきている。授業中の騒がしさも、明らかにひどくなってきた。ある先生が、騒がしさに立腹して教室を出てしまわれたところ、学生たちは「一時間もうけた」と喜々として遊びに出かけた。

後でも述べるが、学生たちの一週間の生活調べをした中に、毎日「三十分以上の勉強」をしようという一項目を入れたところ、学生から返ってきたレポートの中に、「大学生は毎日勉強するものだと思っている先生の考え方は間違っています」というものがあった。こんな例を並べていけば枚挙にいとまがない。

学生が変わってきている点のふたつめは、生活体験の乏しさ。受験戦争に勝ち抜くためにはやむを得なかったのかとも思うが、自らの主体性において生活しているという体験がない。小学校や中学校で指摘されてきた子どもの心からだのおかしさを、そのまま引きずっているような学生も少なくない。自分の判断で、自分の責任でやりきったという体験がなく、すこし都合の悪いことが起こると弁解にこれ努める。自分の判断に自信が持てていないことからくるの

だろう。

さて、私が授業の内容を変更した理由を学生のせいにしてきたが、私自身には問題はなかったのだろうか。私が目標と考えていることに対して、学生の方から期待しただけの成果が上がってこないのは、私の授業方法にも問題があるに違いない。学生が変わってきているのなら、授業方法も変えていかなければならない。そこで、二年前から一年間の前半の講義を中心とする部分の授業を相当変えてみている。

軽くしたのは、教科理論、家庭科教育の歴史、指導要領の検討。時間をかけるようにしたのは、大学生の生活実態、教材解釈（各領域の系統性、何のために、何を、どう教えるのか、等）。変わりないのが、子どもの実態（毎年、話す内容は変わるといふか、変えざるをえない。卒論などの調査結果も組み込む）、今日の家庭生活の問題。

大学生の生活実態などという項目が「教材研究」の授業内容としてふさわしいか、否かということについては色々と意見の分かれるところだと思ふが、針に糸も通せず、リンゴもむけず、お好み焼きも裏返せず、湯沸し器も使えずという状況（すべて授業中の学生の実態）、「朝食を食べてきましたか」ときくと、「何時から何時までに食べた食事を朝食というのですか」とききかえしてくる生活時間の乱れ、父親をパトロンとよび自分の家の一カ月の収入も知らないという無関心さ、等の中では、「家庭科教育が果たすべき発達上の役割」などという話は、右の耳から入って左の耳から抜けていってしまう。

どうしても、学生に自分自身の生活をよく見る目を養わなくては、

子どものことを評論家のように見るだけで終わってしまう。そこで学生の関心を引き出しやすい食生活と、生活リズムとについて、各一週間の調査とそれをふまえての自己評価レポートを出させる。この二つのレポートを書くとき、学生たちの子どもに対する見方は、明らかに変わってくる。子どものおかしさと言われているものが、実は学生自身の生活の中にもあることに気づくからである。この二つのレポートを書く前と後とでは、家庭科を学ぶ姿勢は変わってくる。女子学生はそこそこの生活認識と生活技能は持っているという暗黙の了解のようなものを私は持っていたが、今ではそう考えることは間違いであることに気づいた。私の教師としての学生観は受講学生によって作られていくから、この二年間で二種類のレポートを各五百通読んだ結果である。受験戦争の中では受験教科も非受験教科も歪みを避けることができない。

さて、そのレポートの一通は「私の一週間の食生活」というもの。歯ブラシ以外に口に入れたものは記録をとり、その一週間の食生活をふりかえって評価せよというのが課題。

このレポートを課す前に、「大学生の栄養管理について」という、女子栄養大学教授香川芳子さんの論文を授業中に読んで説明する。主な内容は、下宿生の増加、にもかかわらず栄養知識もなく外食中心、エンブレティカロリー食品の氾濫の中でカロリーは足りるが栄養は不足の状態、そこから起こる病気、そしてこの状態を改善するために、食品四群分類表に従ってどの種類の食品をどの程度の量食べることが好ましいか、などということが述べられている。この論文は学生に少なからぬ衝激を与えている。それも女子学生に。七年間の家庭科学習の体験がありながら、自分自身の食生活を客観視した

ことがないから。生協食堂では、缶入りの清涼飲料水を「エンブレティカロリー」と呼びながら飲むのが流行ったりした。

さて、そのレポートの中身は、毎食毎に手帳を出して食べたものを記録しておかねばならない煩雑さを乗り越えて、「おもしろかった」というものが圧倒的、献立名しか書いていない学生は少数で、授業中の論文の説明がきいて食品名も書きだしている。すると食品名不明（学生がわからない）だったり、豆類をほとんど採っていない、一日中いかにも不規則に食べていたり、菓子類が多かったり、ということが自分自身の問題としてわかってくる。これすなわち、今日の子どものたちの食生活の問題状況と同じであることもわかってくる。

「私は、食生活はキチンとしているつもりでした。このレポートを書いてみて、結局は好きなものしか食べていなかったことに気づきました」というのは女子学生。

「ボクは、母親のお陰で健康に生きてこられたのだということがわかりました。出された食事に計画性があるのだということが、四群分類表と対照してみてもよくわかり、あらためて母親に感謝しています」というのは男子学生。

「なんと、この一週間の食生活リストを見れば、夕食はフライものと生野菜の組み合わせばかり、安くて満腹となれば自然にこうなるのです」というのは下宿学生。

「奈良に来る前に、母親に一週間の料理特訓を受けました。家に帰る度に、新しいレパートリーを増やしています。時々友人を呼んで腕をみがいています」というのは、見通しのある母親をもった男子学生。

このレポートの結果を典型的ないくつかのタイプに分類したり、際立った問題などを学生に返していく。

八一年度分については、家庭科専攻の学生たちが四群分類表に基づいて検討を加え、近畿教育大学生ゼミナールに向けてレポートを作成した。さらに学内向けには、生協食堂の献立に検討を加え、学園祭で展示発表した。

もうひとつのレポートは、「私の一週間の生活調べ」である。これは現在少なからぬ小・中学校で実際に取り組まれている内容とほとんど同じ項目である。「何時に起きたか、何時間寝たか、歯みがきはしたか、朝ごはんは食べたか、排便是したか、家庭の仕事はしたか、勉強はしたか、読書はしたか、テレビはどれだけ見たか」というもの。それぞれに一定の基準を学生と合意の上で決める。

さて、レポートが出されてみると、一週間ずつと歯をみがかなかつたというもの、生活サイクルが四分の一日ほどズレているもの、寝過ぎ（十時間以上）のもの、テレビにべったりのもの、などが続々とでてきて、予想を上回る生活の乱れに、私の方が驚いてしまう。この一週間の記録をもとに、小学生にこのような生活調べを行うことの教育的意味についてのレポートを書かせる。

「クラスの子どもたちと競争のような気持ちになり、最初は調べられるから頑張るということから始まっても、続けていると習慣になるのではないか」

「家庭生活の中にまで教師が干渉してもよいものだろうか。これはプライバシーの侵害である」

「このような生活行為は、全て親の責任でおこなわれるべきことで、学校がこまでする必要があるのだろうか」

など、賛否両論がでる。これも代表的な意見を紹介し、子どもの発達を保障していくという立場から、学校と家庭とがどんなかわりをすればよいのか、学校も教科の内容で、生活指導で、などと考えて、家庭科の学習内容とつないでゆく。

八一年度の授業ではあと二回ほど学生に書きものを提出させた。ひとつは、「家庭とは……」を五分間で書くもの。全般に驚くほど現在の自分の家庭のあり方を肯定している。そういう層の人が国立大学に入ってこられるのだということかもしれないが、家族関係の葛藤という体験をもたずに自己形成してきた青年たち、言い方を変えるとそういう思春期の生き方に、時代の抑圧を感じる。いや、書かなかつたのかもしれない。授業中に、たった五分という制約の中で、こんな大事な問題を慌しく書かせる教師に反抗して、本音は書かなかつたのかもしれない。それであって欲しい。今日の「家庭の危機」と総称される状況を私とは無縁だと考えないで欲しい、そんな想いが私には、さあ、しっかり授業をしなさいと支えになる。

教材研究に入ってくるとき、教科書では何が教えられるか、何を教えようとして書かれているか、ということの読みとりを一回だけする。各教材について詳しく検討するような時間はないから、「家庭の仕事と協力」（開隆堂）、「家庭の仕事とわたしたち」（東書）についてのみ検討している。一応、三十分で読みとりをするが、この時間で重点が掴み取れない学生も少なからずいる。「教科書は絶対に正しい」「教科書にウソは書いてない」と思いこんできた学生たちに、一教科に二冊の教科書（こんな体験は高校までではない）が同時に手渡され、批判的に検討してみるというようなことに戸惑うよ

うだ。片方では、「草花や小鳥のせわ」が家庭の仕事の例となり、片方では「PTAやちいきのしごと」が例となるというような、家庭生活認識の違い、片方では「手伝い」という言葉が出てくるのに、片方では「発達」という言葉が出てくる子ども観の違い、など、時間さえあれば、二回も三回もの授業を使いたいと思う。読みとりのレポートを止めると三十分の時間の節約になるが、学生の受講態度を能動化するための必要時間だと考えている。何人かの学生に書けたところまでの発表をさせてから、私の方でポイントとなる所を押さえる。家庭科の教科書が二社しかないこと、それぞれに特色があることなどと共に、教科書採択制度の下でも現場教師がもつと声を大にして主体的に教科書を選ぶ努力をする必要があることなどにもふれる。実際に使われている教科書を目の前におくと、受身の教材研究ではなく、「何を教えたいのか」を明らかにして授業に臨む重要性が理解できるようである。もちろん、教科書を教えるのではなく、教科書で教えるということは押さえる。

教材研究の内容では、飯野こう先生の『家庭科で何を、どう教えるか』を活用している。子どもの現状を嘆くだけではなく、家庭科が何を成し得るかを、生々とした実践で報告されている。「こんな家庭科の授業を受けたかった」というのが学生の声である。大学の授業で使われる教科書の多くが、その単位さえ取得してしまえば二度と開かれることがないと思われるが、この本に対する学生の評価は違う。下の学年の人に譲らないということの中に、学生たちの評価がでている。卒業生からも、現場で役に立っているという声が届く。

私の住んでいる京都府では、小学校家庭科は担任教師が担当することを基本にしている。近くの小学校でも、男子の卒業生が五年生の担任で、当然家庭科も教えている。「今から教材研究しに行きたいけど、いいですか」と夕方に電話がかかってくる。そこで出てくる悩みや問題が、私の授業研究にはね返ってくる。

とても心やすらかに満足できる授業ではない。八一年度後期のテストで、教育基本法第二条と家庭科のかかわりを問う出題をした。このことについては、直接授業では扱わなかったが、自らの家庭科観をどう築いたかを問いたかったから。納得のいく回答は少なく、私の講義内容の域を出ないものが多かった。半期の授業の反省が胸をしめつける。さあ、この反省の上に、つぎの授業を考えていこう。

その2 「聴く」こと

児玉 すみ子

「誰でもいいから、誰か、話を聞いてくれさえしたら」

「あたしの言いたいことを聞いてくれたらいいのに。」

あたしの言いたいことを考えるんじゃないくて」

これは『非行少女の心理』という本に引用されている、一人の非行少女の、魂の底からふりしぼるような叫びである。この十五歳の少女が、最も熱望していながら、一度も得られなかったのが、「聴いてもらえる」という経験であったというのである。

確かに、親と教師に共通するのは、「聴けない」ということである。と私は、自戒をこめて思う。未熟で、危なっかしい生きざまを見せる子どもたちに対して、自分たちの価値観の正しいことを納得させようとして、親と教師は、しゃべる。教える。答を与えたがる。たまたに子ども言うことを聞く時でも、正解を聞こうとする。子どもの気持は、ありのままに聴き入れられず、「こう、考えているのだ」と解釈され、分析され、評価される。

「……なんだよ。わかったね。わかったら、ハイと言いなさい。言えないのかね。どうしてわかんないんだ。わかったんだらう」と、ひとりよがりの説法に終わる親。

ある問題を起こした生徒のことで開かれた職員会議での議論。

「この子どもの家庭の事情は、こうこうでして、だから、こういう

ことをしかすのです」

「この子は、友達から嫌われているようですから、学校が面白くなかったんでしょう」

「この子は、勉強はできるんですから、そちらの方で自信をつけさせたら、どうですか」

こういう議論も、むだではない。が、この子の周辺から理解しようとしているのであって、一番大切なところを逃がしている。それは、その子が、自分の環境や、今自分がやった問題を、どう思っているか、ということである。それを聴く前に、教師が、教師にとつての正しい判断を下してしまうのである。

しかし、それが、正しかったのか、否か。ここに、ある精神科医(注1)が語った例を挙げてみよう。中学三年より精神を病み、離人症状に悩んだ女性が、回復してから、学生時代を振り返って、こう言ったという。「先生たちは、まったく、何も分らないくらい、はなはだしく誤解する」「余計なことは、言ったりしないでくれた方がよかった」「全然、合わないことをしながら、分かったような気持で、説明しようとする」「あんな口出しはしないで、黙って知らないふりをしていてくれる方が、どれ程助かるか……」

カウンセリングの理論も、技術も、成果もすべて、「聴く」こと

から始まる。相手が、何をしでかそうとも、どんなことを考え、感じていようと、それを評価せず、解釈せず、ありのまま聴くことによって、彼は、自分の存在感を高め、自由に自己探索をすすめ、自分が今経験しつつあることを、より明確に、より多彩に、より十分に感じとり、知ることができるようになる。自分の気持が、心をこめて聴かれているという実感は、自分が、尊重され、関心を持たれ、理解されようとしているのだという最も確かな証となる。混乱し錯綜している精神状態は、落ち着き、自尊心が現れ、自分の現実に向面していく勇氣が生まれてくる。

しかし、「聴く」ということは、実は、至難なわざなのである。カウンセリングにおける「聴く」とは、受け容れることにおいて聞くのであって、相手の気持を自分に当てはめて解釈したり、自分の感じ方を押しつけて聞いたつもりになることではない。マ스로ウの言うように「カウンセラーは、自分が聞けると期待していること、あるいは、聞きたいと思っていることではなく、実際に言われて、いることが、聞けなければならない。カウンセラーは、自分の感情や、色めがねで相手をみるのではなく、まったく白紙になって、その自分に対して、相手がことばを流しこむようにしなければならない。そうでなければ、人は、自説や期待が聞けるだけである」

この聴くということの至難さを、具体例を出して考察してみよう。私が、東京都立教育研究所で、研究生としてカウンセリング研修をしていた際、担当した一ケースの面接記録である。

Mは、登校拒否傾向のある、高二女子、クラスで一言も声を発することがなく、友達もなく、一人で教室に坐っていると恐怖にとらえられるという症状を持つ。(Cはカウンセラー……私)

M「クラブでも、勉強でも、他人より上位に立ちたいという夢はあるんですけど、実際は、うまくいかないんです」

C「ああ、意欲はあっても、現実がついていかない……ね……」

M「自分が、理想化しすぎているんじゃないか。今の性格、治すには、理想化しすぎちゃって、却って、うまくいかないのか……」
C「あまりに高い理想に追いつけない自分が、口惜しい、悲しい。そんな気持では、性格もなかなか治らないってことかしら」

沈黙

C「あなたの意欲が、あなたに、あまりにも高い理想を追わせてしまふ、そのことが却って、あなたをつらくさせてしまふ……」①

M「それはない」

C「ああ、そういうのとは違うんですね」

M「こういうことは、時間がいるから、時間がたてば、そういう風になるんじゃないか」

C「時間をかけて、少しずつ、理想に近づこうという……」

M「ウン」(深くうなづく) 沈黙

C「時間をかける」(感に入ったように)

M「性格というのは、長年続いてきたものだから、急に治そうというのは、いけないと思う」

C「ああ、そうか。十何年間で作り上げてきたんですね」

M「十六年間です。性格、直すには、日数がかかる」

C「日数が、かかる……ね……」 沈黙

C「少しずつ、あせらずに」(つぶやくように)

M(うなづく)

長い沈黙

C「いろいろ、わかってきたように思うんですけど」②

M(しばらく考えて)「まだよくわからない」

私の面接の①の聴き方は、彼女の心の流れに沿っていなかった。彼女の理想と現実のギャップの大きさに、私自身が、戸惑いと絶望感を抱いていて、その自分の感情の方に焦点をあててしまい、実は、この回の面接で、彼女がいくつかの目ざましい洞察をしながら、意欲的に自分と取り組んでいこうとしている動きを見せていることに気づけなかった。彼女は、「それはない」と、私の思い入れを拒否して、「時間をかけてやっていくのだ」と積極性を見せる。この驚くべき動きに、私は感動して、同時に、この前後の沈黙の多さ、長さに、耐えきれなくなつて、②の「いろいろわかつてきたように思う」と自分自身の思いで、けりをつけようとしている。しかし、又もや、はつきりと、「まだ、よくはわからない」と表明されてしまっている。この沈黙は、彼女にとって、大切なものであったのに、それに寄り添っていくことのできなかつた私(カウンセラー)の聴き方の、まずさ、未熟さが、如実に現れている。

かそけき声に耳を傾ける。言葉の背後にあることを聴く。沈黙すら聴く。ということの一例を挙げてみよう。この話(注2)は、重症心身障害者施設、愛知県のコロニーで、教育研究実習をした一学生Sの経験したものである。Sは、タッチちゃんという二十歳を過ぎた、寝たきりの重症心身障害者に、ここで出会う。言葉は出るが、何度聞いても、何を言っているのかわからないタッチちゃんの言葉を、少しずつ理解するようになって、Sは、タッチちゃんの胸の中から溢れ出てくる断片的な、聞きとりにくい言葉をつなげながら、一つの詩にまとめて、聞かせる。タッチちゃんは、喜ぶ。詩の構成を通して、二人は、一つの世界を共有するようになる。しかし、喜びすぎ

たタッチちゃんは、来年、このSが、指導者としてこの病棟に来ることに決定したと言いふらす。満座の中で、それが嘘であることを暴露され、指摘されて以後、タッチちゃんは、苦しうに何度も吐く。身体をふり絞つて、胃液を吐き続けた。政治に深い関心を抱き、知的にも鋭敏なタッチちゃんが、長い孤独の後で、その胸の底から噴出する思いをようやくわかつてもらえらる人に出会った時、タッチちゃんは、自分の自己表現の一部として、Sを抱えこんでしまったのである。

「自分の思いを聴いてもらえるということから、コミュニケーションは成立する。聞き手のことばで話し、聞き手の生活の型に気づくのが、コミュニケーションの始まりである」。聞きとりにくい言葉、言葉にならない表現であっても、「聴いてもらいたい」というのは、人間の根源的欲求であることを、タッチちゃんの話は、言いあてている。「言うことを聴く」は、「言うことを諾^きく」とは、次元が違う。ただたどしい、一見、愚かしく思えることであつても、まず、何よりも子どもが、自分を表現しよう、したいと思う根源的欲求を聴いていくことから、カウンセリングは始まるのである。

(東京都立小金井北高等学校)

(注1) 「思春期の精神病理」浜田晋講演から

(注2) 「障害児から学ぶ」村上英治講義から

参考文献

MGリーゴン・SWマックダニエル共著『カウンセラーとしての教師』実務教育出版社

ギゼラ・コノプカ『非行少女の心理』新書館

マスロウ『完全なる人間』誠信書房



〈いのちのちから〉

長谷川 孝

人間の（というよりも、生きとし生けるものの）生命の奥深いどこかに、生命を持続させ生命たらしめている〈いのちのちから〉のようなことがあるのだろうか——米軍のファントム戦闘機の墜落事故（一九七七・九）で大火傷をし、奇跡的に一命をとりとめていた林（土志田）和枝さんが、四年半の闘病生活のすえに亡くなった（八二・一・二六）。そのニュースを読んだり聞いたりしながら、憤りと哀しみの気持のなかにふと生命のふしぎさを感じないではいられなかった。医学の最高の知識と技術をもってどう手を尽くしてもおもんばかることのできない、〈いのちのちから〉というのになが、林さんの肉体に宿る生命の内側でおとろえ消えていったときに、生命の終わりとしての死が訪れた、というような、そんな感じだった。生命、生命、〈いのち〉といいかえたが、ふしぎな感じの微妙さを、表現しきれなかったからである。生きる意欲というような表現ではどうもしっくりしない、なにか〈いのちのちから〉（持続している〈いのち〉）といえはいいのだろうか、仏教のことばでいえば仏性というものであろうか）があつて、その〈ちから〉は、医学をはじめ生命科学や原子物理学などのあらゆる現代科学を総動員しても、けっして計測しえない〈ちから〉のように思える。

ほんらい仏性というものに、おとなと子どもとか、女と男とか、人間と動物とか、動物と植物とかという区別・分別があるなどとは、

聞いたことがない。と同様に仏性とは、子どものなかにすでにおとなとなんの異なるところもなく存在しているはずだから、育てたり育ったりするものでなく、ふと気づくべきことだ、ということができそう。同じ仏性をもちあわせながら、むしろおとなのほうが、世間のアカにまみれて気づきにくいから、修業ということが現れたのではなからうか。

子どもとはふつう、〈いのちのちから〉がなんの障碍にも妨げられずに吹き出しているから、生気にあふれているし、〈学び〉の意欲に満ちているし、なおかつ「神に近く」みえたりもするのになが、いない。人間としての成長のすばらしさは、こうしたハツラツさによるものではあるまいか。だから、仏教の修業などには、おとなを通過して子どもになる、というところがあるのだと思う。

その子どものハツラツさ、自由闊達さが、喪失してきているというような状況がある。高校生から中学生、小学生から幼児へと拡がってきているようだ。保育園や幼稚園の関係者から、子どもが遊べなくなつたとか無気力な子がいる、という話をよく聞くようになったのは、たぶんここ二年ほど前からのことだという気がする。それ以前は、のびのびとしていた子らが、小学校に入るとハミダッ子にされてだめにされたりする、という声をよく聞いた。

それはわたしには、幼児の保育・教育の学校教育化の動きだと思

えた。だから、幼児の保育・教育を学校教育化させてはならない、と発言してきた。幼保一元化という動きにもそれを感じたし、小学校へ行ってハミダシっ子にならない保育・教育がすすめられているようにも感じてきた。

広島市で開かれた第三十一回教育研究全国集会の「幼児期の教育と保育問題」分科会でも、「幼稚園でもボケーン」としている子どもがいるような「無気力」現象が幼児にまで及んでいる実態が報告された。そして「報告者はその原因としてテレビづけなど家庭での生活の乱れを指摘しており、幼稚園、家庭での幼児教育の必要性がクローズアップされた」（毎日新聞82・2・1）という。

だがわたしには、こうした論議は教育関係者（そしておとなたち）の我田引水にみえて仕方がない。保育・幼児教育にいま必要なのは、その非学校化・非教育化であり、おとなの介入を最少限におしとどめることである、と思う。

子どもが生な実存在として生存しえなくなっている状況をこそ問うべきであり、その状況をつくり出している障碍がおとなの介入だし、この装置のひとつとして「教育」がある、といつてよからう。「ボケーン」としている子ども「の実態を「教育の必要性」に結びつけてはいけないのである。これは、おとなの、または「教育主義者」の、巨いなる善意の誤解というべきだろう。

わたしは、石川県松任市で開かれた民主教育をすすめる市民会議の集会で、「教育問題は子どもの問題ではなく、おとな自身の問題だ」と述べた。「教育」というのは、おとなが行っているのであって、子どもは「されて」いる側にすぎないのだから、教育自体の問題は「している」側にある、と考えたほうがなのである。

たとえば「非行」対策というのは、「規範としてのおとな」が子どもに向かっておしつけるもの、といえる。つまり、おとなの常識や道徳や価値感や論理や利害意識や経験や知識などが、当然のスケール（子どもの存在や行為を測る）となって、「対策」が語られるものである。そのスケールとなっているもの自体があまりし気なのに、いっこうに問われないところに、教育問題（「非行」対策）の論議の不毛さがある、とわたしは思っている。

子どもたちの抵抗（反乱）は、この「規範としてのおとな」への疑いの問いかけを、不可避のこととしてふくんでいる。だからこそ、おとな自身の問題としておとな自身にはねかえるのがあたりまえなのに、おとなはそれに気づいていない（または、そらしている）。

教育問題とはじつは、おとなの「学び」の内実の問題であり、おとなの自己変革すなわち、生きて在るというダイナミズム（躍動）の問題なのである。

仏性ということばを再度使うなら、己の内にある仏性を見失って、へいのちのダイナミズムがおとろえたおとなのほうにこそ問題がある。そのおとなが、子どものへいのちのダイナミズムの障碍となっている。おとなたちよ、己をふりかえれ。そして子どもに対してなぜ、おとなが基準（規範、スケール）たりうるのかを、問い返そうではないか。

さいきん、ある出版の企画で「子どもに学ぶ自由を」という考えを出したら、担当編集者に、わたしと二人の教師がきびしく叱られた。おとなが自由ではないじゃないですか、おとなが解放されていないのになんで子どもの自由ですか、と。たしかに、問題（矛盾）は、わが足下にあり、であった。

（教育評論家）

♥二人のわが子の義務教育という親の「責務」を終えてホッとする。子供は「権利」を享受したのかとなるとはなはだ疑問であり、教育公害のくびきから解放されたわけでもない。ホッとする根拠の希薄さに失笑しつつ、ホッ。

♥ヤレヤレでもある。通算十二年、殺されもせず、捨てられもせず、賞められもせず、愛されもせず、絶対多数の「ふつうの子」がよくぞ無事に生きのびた。「猛母」の三遷は幻想の浮き目を見つつ、義務教育はザ・エンド。

♥だからガタガタ騒ぐな、という声が聞こえそう。今の親はマスコミに踊らされすぎると。日本の教育は世界的水準を上回っているんだ、普通に勉強していればちゃんと育つ内容があるんだ、学校の教育だけでも欲を言わねば入れる高校、大学もあるだろう、とネ。

♥冗談じゃない。強制収容所で「世界的水準を上回る」食事を与えられたところで、人間が育つか。頭デッカチの奇型児は育っているが。盛りだくさんのおしきせ食を拒否し、餓死を覚悟したときから、親子の自己教育が始まったのだ。教育も教師も社会も反面教師の。

♥自己教育が思春期になってある成果を見るまでは不安に揺れた。空腹に耐えきれず、幾度もおしきせのフルコースに手が伸びかけた。学校と家庭のはざままで戸惑う子供の苦しみかわかり、登校拒否を勧めた日も。弱い者いじめの教師のえげつなき、死んでも忘れないゾ！

丙十舞雅星 ブラード

(2)

♥自己教育にカリキュラムなどない。遊びただけ遊び、テレビに魂を奪われ、たつぷりと食い、眠る。塾に行かせてもらえぬために学校の授業は真面目に聞く。つまりは、あたりまえの子供の暮らしをしただけのこと。

♥授業を聞いているからリーダーシップをとれる。たいがいのことをやっても親に叱られる。

ないから秘密のスリルはなく、あまりワルサはしない。家庭の会話はスケベな話題が多いから、耳学問でマセて友達に人気がある。いっしょに強制収容所に喜々として登校。

♥教師を欠点のある大人として上手につき合う。進学したいから一応の勉強はする。アンチ学校教育で悲憤な決意をしたはずの私が、ナントカの腕まくりでコッケイですらある。

♥私が歓声を上げるのは、子供は学校のいうようにも親のいうようにもならなかったこと。まさに自己が自己を育てたくましい生命力よ。いかなる環境にも時代にも流されず押しつぶされず、生きていくその力を信じられる。

♥薄氷を踏むような子育てが一応メドがつき、静かな怒りがこみ上げる。教育地獄で泣かせるために子供を産んだのではなかったと。子供にあたりまえの暮らしをさせるために、親は世間並みの生き方をしてはいられぬという現実。腹くくってのあたりまえの暮らしなんて、なんとお寒い文化だろう。「世界的水準を上回る」のは子供たちの悲鳴だけだ。

(門野晴子)



(2)

「四中に入るきみたち、

技術・家庭科は、男子も女子も

同じことするんだよ。

全国でも珍しいんだって」

石井 陽子

私は二学期に四中に転校してきました。前の学校は、技術・家庭科は男女別でした。男子が技術科で女子が家庭科です。だから、はじめのうちは変な感じでした。だけど私は男女共学っていいなと思っています。えっ、なぜかって？ だって私は家庭科よりどっちかっていうと、技術科の方が好きなんでも。技術科は本箱や伝言板を作ります。家庭科はエプロンや調理を作ります。私は、調理実習が一番好きです。だれだってそうだと思うけど、自分たちの手で作ったものが食べられるから。調理実習をやってみて、お母さんたちの苦労がよくわかりました。私たちはたっ

石川 洋一郎

◇

た一日作ればいいだけだけど、お母さんたちは毎日、それも朝昼晩も作らなければなりません。献立だって毎日変えなければならなし、栄養のことだって毎日考えなければなりません。すごく大変なんだなって思いました。

ないというようでは、もし母が床に伏した時に何もできません。こんなに頼りないことではいけないと思います。男でも下宿したりすることはあるのですから、こういう時のためにも一人で生活していける力は身につけなければいけないと思います。

こういった意味でも技術・家庭科の授業でやることはとても貴重ですし、必要なことだと思います。これから四中に入學するみなさんは、技術・家庭科においては期待してよいのではないでしょうが。

◇

井戸 美由紀

我々の四中では、男女同じことを学習しています。ですから、男子も衣服や調理について勉強しますし、女子でも木材加工や金属加工をします。初めのうちは、このことにとまどいを感じましたが、今ではかえってその方がいいのではないだろうかと思っています。男子が衣服や調理について学習するなんてと思う人もいらっしやると思いますが、ぼくはそうは思いません。たしかに初めのうちこそ、なんでこんなことやらなければいけないんだろう、と思いましたが、男子でもこういうことは必要なんだと思うようになりました。

例えば、普段母にばかり頼っていて何もし

中学校では男子が技術で女子が家庭科だと思っていたら男子も女子も同じことをする。やっぱ今の男子は料理の一つも出来ないと「むこ」のもらい手がない。女子も日曜大工ぐらい出来ないし「嫁」のもらい手がない。私の場合どっちかっていうと包丁をにぎるより「のこぎりやかなずち」をにぎってた方が好きなのでその点では男女共通の方が良い。このように、四中は男女いっしょでとてもおもしろく、調理実習の時、女子は男子のエプロン姿を見て笑ったり本当に楽しいです。

◇

松岡 英明

四中の技術・家庭科は男女共通で、週に二時間あります。

技術は一年の時に木工加工をやり、自分の好きな物を作り、二年の時は、伝言板を作りました。家庭科は一年の時にエプロンを作りました。二年になって一年の時に作ったエプロンを着て、ハンバーグとスパゲティミートソースを作りました。

そして、食べ物やなにかを作り終わつたとき、自分でよくこんな物ができたと思つたりしておもしろいです。これで紹介を終わります。



栄山 さやか

四中の技術・家庭科は、男女共通で、週に二時間あります。一年生の時、家庭科では、ワイシャツを使って体育着入れや体育館ばき入れを作りました。班にミシンが二台しかなくてすごく混雑をしてなかなか進みませんでした。この時、いままで古くなったワイシャツは、まだまだ使えることがわかりました。次は、エプロン。自分でそれを買つてつくり、今、調理実習で使っています。技術では、木材加工、なかなか出来なくて友達に手伝つて

もらいながらやりました。

二年生になってから家庭科が調理実習になりました。一年の時に作ったエプロンをして一回目はハンバーグ、二回目はスパゲティを作りました。面白かったけど大変でした。技術では、金属加工、木材加工よりは、簡単でした。

男子は技術だけ、女子は家庭科だけってわけであるよりもずっと楽しい。



吉沢 裕

四中の技術・家庭科の授業は、全国でもめずらしい男女共通で、週二時間の授業があります。作る物は一年生の時、木工加工とエプロンで、二年で伝言板とハンバーグとスパゲティと果汁かんです。

楽しいことは、自分たちで色々な物を作れることです。いやなことは作っている物がうまくいなくて、もう作るのが、かつたくなつちやう時です。でも色々な物を自分で作る楽しさって物がわかり、特に調理実習で自分たちが作った物を食べるのはとても楽しいし、ハンバーグとスパゲティーだけおぼえておけば、もう一人でくらせるような気分になつてしまいます。

市川 玲子

私たちの技術・家庭の授業は、男女共通です。もともと男子が技術をやって、女子が家庭科をやるものとばかり思っていた私は、最初とまどっていました。でも、技術もやってみるとおもしろいものです。一年では製図を習い実際に木材を加工して、いろんな物を作りました。

金づちや、その他の機械・工具を使うので器用・不器用の差は生まれますが、将来、女だからといって絶対に金づちを握らないということはないのですから、男女共通というのは、よいと思います。

又、男子も大きくなって一人で生活しなければならぬ時、家庭科で習う衣食住についての知識が必要だと思ふのです。

こんな感じで、中学三年間に、生活していくうえで必要なことを学んでいます。



鈴木 展明

週二時間で授業をします。

技術は、一年は木材加工をやります。

二年は、金属加工をやります。

証明などはありません。

家庭は、一年のときはワイシャツの研究、

繊維の種類、エプロン作りなどやります。

二年では、衣服について、調理実習をやります。班で衣服についての発表をします。もつともすぎなのは、調理実習です。

実習が終わったあとは家でそのときやった実習やり、レポートにまとめて提出します。調理実習をやったことでのいろいろ学びます。



岩佐 由美

私が前にいた学校では、男子が技術、女子が家庭科というふうに、授業は別々にやっていった。けれど四中に来たら、男子も女子も同じことをやっていました。

週二時間で、技術は、木材加工・金属加工・製図をやり、家庭科では、被服・調理を、お互いに協力し合って仕上げました。

木材で本だなを、金属で伝言板を、被服で作業服を、調理で、自分の作った作業服を着てハンバーグ・スパゲティミートソースなどを作り、家族のために、家でも調理し、家族にも喜ばれました。

いろいろ失敗もしたし、なかなか仕上がらなかったりしましたが、男子でも調理を、女子でも木材加工などを勉強し、別々の授業の学校の二倍の収穫があり、四中に転校して来

て良かったと思います。



中村 健

技術科で今までに作った物は、「本立て」「伝言板」「ぶんちん」とか色々作ります。

家庭科では「エプロン」「体育着入れ」、調理実習では、「ハンバーグステーキ」「スパゲティミートソース」とか色々作ります。

作ったり食べたりするのはいいけど、男女共通で週二時間だから、ちょっと想像ちがいだと思います。

ビタミンや鉄分を勉強したら、きつとみんなはめんどくさいとか、いやだなというにちがいはありません。ぼくもそう思うけど、いつか、先生が言うように役に立つかもしりません。今まで役に立った事は、家でその調理実習をやったら家族によろこばれました。その時やってよかったなと思いました。

でも一人でやるよりも友達といっしょにやる方がおもしろいと思います。だいたい、四中の「家庭科、技術科」はこういうものです。協力しあうことも一つの勉強かもしれません。



山本 美知子

私は、食料をやる時、はつきり言って、食

品の分類は、めんどくさい、と思いました。が、家で再実習をしている時、つくづくと分量や、カロリーなど正確にやらなくてはならないと教えられました。

一年の時、木材加工で、初めて作った本立てでは、上手ではやくできるように、何度も何度もやりました。装料は、三回ぬるはずなのに、うまくできないからって、七回もぬってしまいました。ぬりすぎもあったため、つるつるとして、手ざわりが最高でした。

どちらかといえば、技術の方が好きですが家庭科も生活するのに大切だと思いました。こんなことで授業内容的なものは、わからないと思いますが、私にとつての思い出であり、勉強させられたことなのです。



島田 孝一郎

自分は、家庭科がきらいで一年の時から授業態度がわるかった。エプロンも結局作れなかった。不運なことに一年の時骨を折ってしまった。そして一カ月も学校を休んでしまった。自分が学校に出てきた時には、もう大体の人がエプロンを作りあげていた。なんだか自分だけがとりのこされたというようなかんじがした。そんな気持のまま残りの一年生の

生活を送った。そして二年生になって一学期

と三学期に家庭科をやりました。三学期には調理実習をやりました。一年の時はあんなにきらいだった家庭科が今はうその様にやる気が出てきた。みんなで協力しあって作る料理はとてもおいしい。ハンバーグやスパゲッティなどはじめて作るもので、小学校の時の調理実習とはちょっとちがうかんじがした。自分はハンバーグしか作っていないけれど、みんなで協力するということの善さが、よく

いんにちは！

東京・武蔵野市にある共同保育・かっぱの家保育所を訪ねた。三輪車に乗って遊んでいた、近所のおばさんが連れて来た大きな犬の回りに集まってお話をしている二歳位の子供たち七、八人。そばには、足の不自由な子を抱えている保父母。家の中では、〇歳の子供二人を保父母があやしている。やさしい手つきで赤ちゃんのおしめをかえている保父さん。それはとても自然の姿として目にはいる。すみっこにあるストープには囲いがされ、おまるが数個温められていた。ほのぼのとしたこの営みの中にはいつていくことにチョット躊躇を感じてしまった。

74年に始まった同保育所の記録集を読んで、そ

わかった。

◇

中村 千秋

一年の時、使い古したYシャツを、先生の指導により、見事に、丈夫な布袋に私たちの手で変わらせました。それからというものは、丈夫なだけでなく、見かけがかわいいものなどもよく作るようになり、布袋を作る前であつたらすてたようなもので、ちょこちょこつと、修理して使うようになりました。大

の理由がわかってきたような気がする。

脳性小児マヒの優子の入園が親から希望された時「遂に試される時が来た」と感じたが、やがて「障害児保育」などはないと確信するに至る。その経過がよくわかる。

「さんばから帰った子たちが玄関でたのしそうにゴチャゴチャやっています。おひるごはんが準備万端整った部屋にクツをぬぎ捨ててとびこんだ黒ベエのあとを追うようにして優子がドッシリ玄関口に腰をおろしました。世話やきの涼子がけん命に優子のオーバーを脱がしています。あとから来た竹ちゃんが優子のクツをぬがしてクツ箱に。そして当の優子は黒ベエのクツをクツ箱に。連鎖的に次々に子供たちは仲間どうしでクツをぬがせたリコートをかけたり」

大人たちは「優子が居ると子供たちはこんなふ

変役にたつたと思います。それに、二年の後半からやり出した調理実習を参考に、今は、毎週水曜日は私の作る日となっています。

技術は、やはり男子がやるものだけに、力仕事です。女子だけではとても無理などというとき、男子は、何もいわずに手伝ってくれます。こういう時にこそ、人の本当のやさしさがわかるんでは、と私は思います（以下略）。

（武蔵野市立第四中学校二年生の子供たち）

うにお互いに気を使いあうのかな」と話し合うが、「こういう見方はまちがっているのではないかと考え直す。「優子が居たからではなく、むしろ世話好きの涼子が何くれとなくみんなの世話をやり、やと自分でクツをはけるようになった竹ちゃんが、モタモタしている優子のクツを脱がしてやる程余裕ができたこと。この楽しそうな遊びにみんなが加わってきただけの現象なのではないか」と。そして「子供たちの持つ個性が子供同士のつき合いの中に、妙に心地よいハーモニーをつくり出している」「その一人がたまたま優子だったのです」。

子供たちの力を信じきり、注がれる細やかな目。それがあつて「ほのぼのとした営み」が生み出され、創られている。そこに流れる緊張感に気付いた。

（馬場洋子）

小学校で教えてもらった先生は、担任の先生（男性）ではなく、女の先生だった。授業内容として記憶に残っているのは、調理実習（目玉焼き、サンドウィッチ、野菜サラダなど）、洋服カバー、裁縫道具入れなどの手芸、それから一般的な講義。もうぼんやりとした記憶なのだが、とても楽しかった。その原因として、一学年一クラス、男子一〇人、女子一二人という小人数だったこと。担任の先生でなくても、生徒の家族構成、家庭内情などをよく把握しており、一人一人の生活に密着した質問をよくしていたように思う。「あなたのお家ではどうしているの？」と何人かの生徒によく質問し、み

私が受けた家庭科 私が見た家庭科

んなも競うように発表していた。

その上に大事なものは、男子も女子も一緒に同じことをするということ。調理実習にしても助け合いながら、また競争しながら、お互いの役割を決めて、とても楽しかった。手芸も男子が針を持って一生懸命やっていた。私たちは、国語、算数と同等のレベルで家庭科をとらえていたと思う。男子のみ、女子のみという差別意識もなく、普通教科の一つだった。男子は、家でやったことのない手芸・調理に対して、女子よりも興味を示し、家庭科を楽しみにしていたように思う。

中学校では、男女別学の「技術・家庭」だが、私は男女の領域別

について疑問も抱かなかった。現在、中学の「技術・家庭」は技術に傾斜しており、小・中・高校の一貫性に欠けていると指摘されているが、中学の時の私は、その方が楽しかったし、「技術・家庭」をそういう授業だと思っていた。

高校の家庭科は、一・二年女子のみ必修で、この間、男子は剣道、柔道をやっていた。授業内容で記憶に残っているのは実技のみで、講義の記憶は皆無とといっていいほどない。私の家庭科に対する態度は変わった。今、家庭科の教師を目指しているが、高校の時の私の授業態度を振り返ると、あまりの矛盾に複雑な思いである。私は家庭科の講義の時間、ほとんどといていいほど、数学の問題を解いていたのである。こうなった原因は、一つに進学の問題。それから（自分の態度を棚に上げて気がひけるが）、もう一つは先生の教える態度である。

講義は全然おもしろくなかった。教科書に書いてあることをそのまま口でいい、板書しており、先生から家庭科教育に対する意欲・熱意は、全然感じられなかった。こういう態度で授業に臨む私たちに對して一言も注意せず、淡々と、表情も変えずに授業をしていた先生は、進学校における家庭科教育というのに一種のあきらめを感じていたのではないかと思われる（このことは、実際に母校へ教育実習にいったって改めて感じさせられたことでもある）。

高校時代、私は家庭科についてまったく学問というところえ方をしていなかった。受験科目にない余分な教科として、この教科がどういう教科であるか、なぜ女子のみ必修なのか、などということは全然考えたことすらなかった。

こんな考え方をしていた私がなぜ被服学科を受験したのか？ 単

に、裁縫が好きだったのである。ところが入学してすぐ、アドバイザーの先生に、ここは裁縫の専門学校ではない、といわれ、大学における家政学部・被服学科のあり方というものを考えさせられた。裁縫の技術をマスターできるわけでもなく被服学という学問としてのうけとめ方もできなかった。自分なりに答えをだそうと思うのだが、いまだに私は暗中模索の状態なのである。

ここで、教育実習を振り返ってみたい。はつきりいって、教育実習は楽しくなかった。まず、高校の時の担任の先生に家庭科の先生を紹介してもらった。その時担任の先生は私をこう紹介した。「こいつは、家政学部なんかいかなくても他の学部にいけたんだが……」。自分で進んで被服学科を選んだ私にとって、この言い方には頭にきてしまった。家庭科の先生も、家庭科を馬鹿にされたようで、不愉快だったそうである。あの担任の先生の一言で、この高校における家庭科の位置づけがわかったような気がした。その後二週間この高校で教育実習をしたわけだが、教えてもらう立場から、教える立場になり、自分の高校時代と交錯させながら、とても複雑な気持ちを味わった。

私の卒業した高校は、普通科と家政科がある。そのせいか、家庭科の先生の位置は疎外されているわけではなかった。私の担当だった先生が、「前にいた高校（普通高校）では家庭科の先生は疎外されていて、とてもつらかったけれど、この学校は家政科があるからそんなことはない」とおっしゃっていた。受験体制の学校において受験科目でない教科はなおざりにされているようだ。特に進学指導の先生方に特にそれを感じた。

私が授業実習を始めて何日かたち、校内模試が開始された。こ

の高校は一年の時選抜クラスが二組あった。いわゆる能力別クラスである。このクラスで私の授業が二時間目、校内模試（数学）が三時間目という時、私の授業でほとんどの生徒が数学の問題集を机の上に置き、横目でチラチラ、または堂々と机の真中におき、家庭科の授業はそっちのけで内職に励んでいた。みかねた担当の先生が、問題集を没収して、家庭科研究室に一人一人とりにこさせるといふ処置をとった。ペテランの先生が、「一年の時からこんな癖をつけてはいけない。きちんと怒っておくべき」とおっしゃった。でも私の心境は複雑だった。私は生徒の立場のときは、堂々と数学の問題を解いていた。これと思うと生徒に対して何も言えなかったのである。担当の先生も、「私も最初、あなたと同じ気持ちを味わったけれども、教師という立場になるとそれは許されないのよ」とおっしゃった。

次に家庭科をどういう観点から教えるべきか、という問題である。私の研究授業はエンゲル係数ということのポイントに、家庭の支出ということについて教えた。まだまだ授業をやっていくということがすごく大変で、指導書を片手にやっていたというのが現状だった。なるべく、具体的な例をあげて身近に感じるように教えることを心がけたが、なかなか難しかった。あとの批評会で教務主任の先生（物理）と家庭科の主任の先生から、「あなたの授業は少々、観点がずれている。家庭科というものは学問的に教えるはいけない。生活に密着している科目であることを忘れないようにしなければいけない。たとえば、エンゲル係数を教えるとしたら、実際に各々の生徒の家のエンゲル係数を算出する方法をとってみてはどうだったのか」とアドバイスされた。もつともなことだと思う。しかし、もしそ

いう方法でエンゲル係数を算出した場合、エンゲル係数が大きい場合、生活水準が低いということをそのまま個人の家庭にあてはめるのではないかとこの恐れがあった。それにエンゲル係数とは一般的なものであって、個人の家庭にそのままあてはまるものではない。教える上で、どのあたりまで生徒の生活にふみこんだらいいのか、ふみこめるのか、ということ。また前述したように学問的に教えるのではないということ。学問として教えるならば、エンゲル係数は経済の分野、保育は保健体育というように専門科目が存在しているのである。あらゆる領域にかかわっている家庭科を、というふうに教えればいいのか、本当に難しいと思った。どれをとっても中途半端な気がしてならない。一体家庭科というのは何を目標に学ばせればいいのか。一番根本的なところに私の疑問はいつてしまった。普通教科としての存在が難しいのは、こういうところに問題があるように思う。家庭科を学んでいる時には、さして疑問に思わず、そのままうけいれてきたことが、いざ教える立場になると、全く疑問だらけとなってしまうのである。

特に普通高校における家庭科の位置づけは難しい問題だと思う。担当の先生にこのことを話したところ、「この問題はすべての家庭科教師がぶつかることだと思う。教師一人一人がその問題に対しての自分なりの考え方というものを持っていないといけないと思う」とおっしゃった。少し批判的な言い方になるのだが、この先生は、この問題がわかっているし、かつてはどういうふうに教えればいいのかよく考え、活気のある授業に取り組んでいたらしいが、結婚されてから、育児も大へんらしく、授業も毎日教科書を中心にノルマをはたすという感じで、改善しようとする姿勢・熱意があまり

感じられなかった。女性の教師にとって家庭と仕事の両立の大へんさも同時に感じた。本題からそれるが、女性は強くないと仕事は続けられないと、しみじみ感じた。

次に私が教育実習に困ったことがある。この高校には家政科があり、やることは大学以上なのである。スーツ、浴衣、あわせ羽織、幼児服と、高度の技術を要する実習で、大学の実習授業では到底教えることが不可能だと痛感した。感心しながら生徒の間を回っただけの実習授業だった。大学の被服学科は裁縫の専門学校ではないといっても、実際、高校に家政科が存在し、家庭科の教師が教えないといけないのである。それにはあまりに大学の実技授業では追いつかないと思う。実際、私の出身地であるK県では、教員採用試験に昨年から実技試験が加わった。家政学部を出ていても実技が全然できない人がいるということから始めたらしい。中学は食物の概量、食物の切り方、部分縫い、高校はブラウス、又は、浴衣、(被服の場合)というような事柄だった。おもしろいことに、実技試験の時の試験官はすべて男性で、女性の試験官が一人もいなかったことである。

最後に、私のやりたい家庭科教育について述べたい。

小・中・高校とすべて男女共修にしたい。この状態から出発しないことには、普通教科としての家庭科の位置云々、家庭科の目標は語れないのではないかとと思う。家事、裁縫の教科、女子のみの教科という偏見をなくすように努めなければいけないと思う。家庭科の教師一人一人が団結して、そういう運動をするのは大切なことだと思う。

(日本女子大学学生)

市民

として

富田 昌志

一月半ばに長野県を訪ねた。高校「家庭一般」の男女共修の授業を見せていただくためだった。

「三年生での共学なので、就職が決まっていたり、入試を控えて生徒たちが浮き足立っているので、十分な授業を見ていただけないかもしれません」

電話の向こうの声は心配そうだった。三年生は三学期の授業もあとわずかを残すばかりの時期である。落ち着きがなく、ざわついた授業風景は、教師としては見せたくない。まして長野県は、文部省が「家庭一般」四単位の女子のみ必修完全実施に踏み切った七三年

高校家庭科

なぜ「女子のみ必修」

四月から、家庭科教師が中心となって一校、一校と共修校をふやしてきた「先進地」だ。そこでの授業がおもしろくなかったといわれたのでは責任を感じてしまう。そんな思いもあったと思う。

だが、参観させていただいた調理実習も乳児保育の授業も、とても楽しかった。調理実習での男子生徒の生き生きとした表情と動き、「こちらのお皿に盛ってくれるー」と呼びかける女子生徒の弾んだ声。献立以外の雑煮までちゃっかり作って、苦笑まじりのお目玉を頂戴した班もあった。乳児保育の授業は、赤ちゃんへのスキンシップについて。「子どものことを思い出して、どんなことがあったかあげてごらん」と指された男子生徒は、長い足をぐーっと机の下で

伸ばして、「忘れちゃったよ」。「それじゃあ、少し周りで相談してみようか。女子はどうかあ。若いお母さんが赤ちゃんにどんなふうにしてるか、見たことあるんじゃない」と先生は水を向ける。授業は、そんなふうにならざるに生徒たちからスキンシップの具体例を引き出し、赤ちゃんの成長にとつての意義や役割へとすすむ。

東京で女子のみの家庭科の授業を見てきた目には、こうしてすめられる授業は、実に自然であり、新鮮でさえあった。

生徒たちの感想も聞いた。「三年から男子と一緒に授業になったんだけど、とてもよかったと思う。男子の考えが聞けたし、調理実習も一緒にとても楽しかった」「将来、家事も育児も男子に同等にやってもらいたいと思っているわけではないけれど、共学で家庭科を学んだ男子は、家庭生活のいろんなことを理解しているから、苦労もわかってもらえるんじゃないか」と女子生徒たち。「調理実習が助かった」と就職で親元を離れるという男子生徒。「食品添加物のこととか、表示だとか、注意してみるようになったから、やっぱり役に立ってるみたい。でも、結婚するまで乳児保育のこと憶えているかなあ」と笑わせた男子生徒もいた。「共学に反対のヤツはいないんじゃない？」と彼らはいう。

しかし、現実はどうだろう？ この長野県や京都府を除けば、公立の普通高校で男女共修の家庭科を実現しているケースはそう多くはない。この四月からの新学習指導要領でも高校家庭科の女子のみ必修はつづく。婦人差別撤廃条約の批准が日程にのぼったことで、かえって現行の女子のみ必修の制度を維持しようとする圧力も増している。「男女共修になるのなら、教師を辞める」とアレルギーを起こしている家庭科教師もいるとか。「受験科目の先生たちの発言

力が圧倒的に強くて、共修のことなど口に出したら、『村八分』にされてしまう」と肩をすくめた若い東京都立高校の教師もいた。

そうした教師の教育姿勢までを、いま、問おうとは思わない。しかし、家庭科が「衣食住、保育などに関する基礎的な知識や技術を体験的・総合的に習得させる」(学習指導要領)ことを目標としている教科であり、家庭生活が男女両性の協力によって営まれるものであることを認めるのなら、少なくとも、家庭科を女子のみ必修とするのは、不自然ではないか、とは問うてみたい。そして、その女子のみ必修が、性別役割分業意識のまだ色濃いの国で、家庭のことで、生活のことは女にまかせておけばいいのだという男の意識をますます助長する結果になってはいしなだろうかとも聞いてみたい気がする。

家庭生活や家族関係、家庭経済、生活設計、衣食住の生活、保育など学習領域が最も暮らしに即した教科である家庭科が、なぜ女子必修なのかと疑問を抱かなかった教師がいるだろうか。生活者としてのみずからの暮らしのありようを振り返ってみただけでも、男子生徒が欠けた教室の中で、女子生徒のみを相手に、現代の家庭がかかえている課題を考え、解決する糸口を与えることができるかと自信を持っていえる家庭科教師が、果たしてどれだけいるだろうか、と思う。

「それは男子がここにいたらどんなによかったかと思うことがしばしばある。男子ならこうした問題をどう考えるだろうね、と生徒に語りかけていることもある。女子のみの家庭科では、やっぱりあきたらないし、虚しい気がする。長野や京都のように、せめて二単位でも男女共修の授業ができれば、どんなに楽しいだろうなと思う。

でも、まだまだむずかしいみたいですね。文部省も東京都も乗り気ではないし、学校内でも家庭科は力が弱いから……」と嘆いていた教師もいた。

しかし、もし教師が授業に抱いている虚しさがあるとすれば、それは単に教師の側だけのものではなく、生徒の側のものでもあることに気づいてほしい。現実には目の前にいる生徒をしつかりとらえ、家庭科はいいたい、どうあればいいのかと真摯に考えてほしい。生き生きとした生徒のまなざしを取り戻すにはどうしたらいいのか、仲間と語り、考えてほしいと思う。

人間が人間らしく生きていくために基本となる教科が、ないがしろにされる教育にロクな教育はないし、そんな教育を容認している社会もロクな社会ではないと思う。男女が人間として自立し、尊重し合い、相互に理解しあってこそ、個性豊かで明るい、幸せな家庭が築かれる。その家庭生活に関する基礎教養を身につける家庭科に、性別による差別があつていいはずはない。そのことを、おそらく最も敏感に感じとっているのは、現に女子のみ必修の家庭科を受けている女子生徒たちではないだろうか。

たしかに家庭科教育の現場をちょっとのぞいただけでも、男女共修を実現するための壁がどんなに厚いかいやというほど知らされる。共修家庭科の実現に真剣に取り組んでいる家庭科教師たちの苦悩の大きさもわかる。でも、泣きをみせたりしないでもらいたい。

「家庭科の先生が第一に運動を起こさなくて誰がやるのです」

これは「男女共修の家庭科をぜひ実現し……」と訴えたある女子高校生の言葉である。

(毎日新聞記者)

親も
言いたい

玉川 洋次

「今年の共通一次の家庭科実技は、カレーだそうよ」

「ほくも審査員に応募しようかな。だけどとんでもないもの食わされるかな」

電車の中で若い男女の会話の一部だが、若干、解説が必要だろう。

共通一次とはバカロレア（大学入学資格試験）のことで、これをパスすれば、受験生はこの大学にでもいけるのである。二次試験というのは、受験生が大学を試験するので、自分の希望する分野に

共通一次つてなんだ

ふさわしい教師がいるか、これまでどれだけの実績をあげてきたかなどを調べるのである。これに対して、大学側は、自分のところではこの受験生を受け入れる能力があるかないかたしかめ、なぜその分野を希望するに至ったかの動機を聞いたりしながら、その分野ではどこそこの大学や専門学校がいいだろうと答えたりする。

共通一次は、昔の中国の科挙では、四書五経だったし、どこかの国でいまやっているのは、英数国社理の合計点という、身長と体重と視力と懸垂の回数を足すような恐ろしいものだが、若い男女の会話に出てきたのは、それらとは異なって、創造力と想像力を問うも

のなのである。

ここでは、家庭科がもっとも重視されている。なぜなら、森一刀斉という剣豪（本名は殺といつて、実は剣は弱いので京都大学で数学を教えて生活している）が調べたところ、大学を卒業してから二次方程式を解かなければならないという場面にぶつかった人は、百人のうち二人もいかなかったり、国際会議場での日本人の居眠りのもとは日本の英語教育にある、などの事情も斟酌された。家庭科というのは、そこにいくと、もっとも大切なものであり、共通一次には欠かせないものとされた。過去の出題を見ると、去年は「靴」、その前は「かっぱう着」だった。

靴についての出題は、広範囲にわたっていたが、靴が足にとつて有害になる点をあげさせたり、中世ヨーロッパの靴職人の社会的地位について書かせたりした。解答には、ある消費者団体が、学童用のズック靴が破れないかどうかを評価の基準にしていたことから、その消費者団体そのものの批判まで展開したり、靴職人の社会的地位から始まって部落差別について本格的に論じたりしたものもあった。実技は、実際に靴を作るか、修繕するかなのだが、アスファルトで地面を覆うことの少ない地方ではわらじが評価された。

かっぱう着では、なぜ、かっぱう着なのか、関連して女性の服装が機能的でなくなるのと、女性の男性に対する隷属の過程との関連を問われたりした。受験生のうちには、ベルサイユ宮殿にトイレがなかったことと貴族の女性の服装との関連から、建築学の領域に入つて、かっぱう着のことを忘れてしまった答案を書いたものもいた。実技でカルダンのプレタポルテをまねた者は不合格となった。

そして、今年は「カレー」なのである。

「カレー」であって、「カレー・ライス」ではない。「共通カレーの日」などとは全く異なるし、どこかの国の共通一次とは違いうから、受験産業などない。インドへの連想からカースト制度が問題になるかもしれない。また、食事と塩分との関係こそ重要だ、などと予想問題を売って儲ける者もない。どだい、模範解答例と同じ答案を書いたら、それだけで不合格の理由になるのである。むしろ、塩化ナトリウムとして純化された専売公社の食卓塩がいかに有害であるかからときおこし、純化とは何か、とりわけ社会組織の純化とはどのような問題を孕むかなどに至り、ナチス批判の全面展開にまですすんだりするのが好まれるのである。

いうまでもなく、洗剤の有害性については出題の範囲だが、それも、ゴキブリを殺すのに新聞をまるめるより電話帳が、電話帳よりも洗剤の方がはるかに有効だという「実習」の結論だけでは、それは呼吸の問題で催奇形性とは関係がないといわれてしまうから、共通一次の範囲としては河川や海洋の水質汚濁あたりまで理解していればよいことになっている。

逆に、洗剤の催奇形性を調べたりするために、化学や生物学を学ぼうというのが、受験生の志望の動機だからでもある。

「カレー・ライス」ではない「カレー」の実技は、試験官が全部試食できないので、審査員を公募し、審査員が「いける」といったら合格する。もちろん、「ライス」のかわりに、チャパティーでもいいし、塩のかわりに砂糖を入れても、「いける」ものだったらいいいわけである。それが冒頭の会話の意味である。

この共通一次が行われる以前、評価基準の設定がむずかしいのではないかという声もなかったわけではない。しかし、テストは、三

歳児検診のIQテストに始まって、どこかの国の共通一次や、精神鑑定における矢田部・ギルフォードテストに至るまで、人間の能力をはかるものではないことがわかり、客観テストなどというものは客観的でもないこともわかってきた。森一刀斎は採点のとき「三点引くかな、五点引くかな」といつも迷っている、どこかの共通一次は「採点QC運動」であるばかりか、問題そのものが間違っているのも多く指摘されたからである。(今年の共通一次にはどの科目にも問題があるが詳述の余裕はない。どうしても腹の立つ例を一つあげると、政治・経済のⅡ問5の⑥が正解だというのは誤りである。労組法第七条第二号の「雇用する労働者」、「代表」、「正当な理由」は、現場では団交規制の機能をする。これと同法第一条の関係は、労働基準法第三六条が同法三二条を尻抜けにしているのに似ている)。

また、十八歳という年齢で区切り、それまでどれだけの単語や公式、年代を丸暗記したか調べても、能力を調べることにならない。偏差値で序列化し、その序列を固定化させるのは、ヒットラーのネオ・ダーヴィニズムの現代版である。A・ヴィエタは、スペインの暗号を全部解読したので、スペイン王からフランスには悪魔がいるとローマ法王に訴えられた。実は彼は、四十歳になって、馬に頭を就とばされてから数学を始めたのである。

もろもろのことを考え、検討した上での共通一次の方針は正しかったことが、やがてたしかめられるようになった。もちろん家庭科男女共修は当然のこととなっている。

ただ、残念なことに、これは、いまの話ではない。

教師の
つぶやき

竹内 みどり

当年とつて36歳。“花のチューネン”である。それが思い立って、この六月、うまれてはじめて教師になった。それも“荒れる中学”の見本のごとき、A中学校だ。

「ヘッ、ブスなおパンが来たぜ」——初出勤の日、ニコやかに、さっそうたる風情で教室へ入った私へ投げつけられた“歓迎”の第一声である。このクラスには、一年生ながら、「本校に例がない」という“大物番長”K男、がいる。K男は、私への“あいさつ”をすませると、やにわにつりざおを取り出し、女子のスカートを次々と

“しらふ”のK男はどこにや

めくりあげ、“女がつれたぜ”と言っては、嬌声をあげはじめた。ワーワー、ギャーギャー、クラスは騒然、「静かに!」「席につけ!」……わめき通して、初体験の授業はおわった。

K男のいるこのクラスの授業はまるで成り立たないというのが、ここに至っての正直な実感である。

教科書は「持たない主義」とかで、学校には手ぶらで来る。一時、間中、授業に無関係な話をベラリベラリやっている。時にはわめき、口笛を吹く。こちらは彼が疲れるのを待ち、その間隙を縫って、わめき返すように授業をする、といったあんばいで、まるで信じ難

い教室風景なのだ。時には授業をぬけ出し、他の授業中の教室を奇声をあげてかけめぐり、非常ベルをならすわ、消化器をぶちまけるわ……タバコ、万引き、リンチ……K男の反乱はとどまるところを知らない。

チューンや刃物でおかされた級友の父母の訴えもあって、K男（とそのグループ）の問題を中心とした保護者会が持たれた。白熱した話し合いの中で、女教師の問題が出され、「女の先生は、完全になめられている。授業中さわいだりしたら、他の生徒にメイワク、男の先生を呼んできたかどうか」——とある母親（この母親が又完全に息子になめられているのだが）が発言する一幕もあったが、女の先生の授業が成り立ちにくいというのは、一般的に言うなら、あながちあたらずでもないのが事実かもしれない。

ある男性教師（分会長）は、私が中途採用に決まった時、なぜ男の教師をとらなかつたかと、校長につめ寄ったという（こうした社会の差別は、何よりも子どもたち自身に、最も敏感に反映したあげくの“なめられ女教師論”なのだが……）。

K男は、両親の“自主的判断”と称して“自宅謹慎”となった。その組の授業は“嵐のあと”の静けさである。

そして、クラスの生徒も、親たちも、教師も（まぎれもなく、この私自身を含めて）、瞬時、ホッと胸をなでおろしてしまったのである。一週間、二週間……「Kさえいなければ……」という雰囲気定着しはじめ、親と担任教師の間で転校の話がほめかされるようになった。学年の四人の女教師が集まり、寄るとさわるとK男の話。もしこのままK男を“追い出す”ようなことでもなれば、一休私（達）は、何のために教師になったのか、四人の意見は一致し

ていた。とはいふものの、授業が成り立たないのは、われら女教師の場合が多いことを考えれば、女たちの苦悩は言いようもなく深かった。

私たちは、K男の家を訪れた。奥にひっこんで顔をみせない。三時間ほど母親と話しながら待ったあげく、奥の部屋から「セーラー服と機関銃」の曲が流れてきた。しばらくしてノソノソと揺れるように大きなからだが見えた。長い沈黙の末、やっと開かれた彼の口から、薬師丸ひろの子が好きであること、「みちのく一人旅」が得意であることなどが、ポツリポツリと語られる。いつも酒に酔ったように本心をのぞかせたことのないK男の「しらふ」の姿とはじめて向き合ったという思いであった――。

さて、それで、彼が改心し、「カタギ」にもどったなんて甘い話

○ 原稿募集

「Weは、みんなで作る雑誌です。とくにこの「発言」欄は、読者の皆さんからの投稿によって充実させていきたいと願っています。

▽学習の主人公たち

小・中・高の生徒の率直なありのままの声を

▽明日の家庭科教師たち（二千八百字まで）

家庭科教師を志す大学生の希望、疑問、提言など

▽市民として（二千八百字まで）

一人の市民として、生活者として、腹ふくくる思いを

▽親も言いたい（千三百字まで、または二千八百字まで）

父親・母親の喜び、苦しみ、楽しみ、悩み、憤りなど

は、まるでないのである。話し合いの末、復学となったものの、彼の荒れようは、相変わらず、ひどく酔ったかのようなのである。「しらふ」の彼は仮面の奥深く閉ざされたままである。

その彼の教室へ、重い心をひきずって、今日も出向く。

教壇――受験体制とその下のカリキュラムに現実規定された教壇に立っている私であるかぎり、教室の中で「しらふ」の彼と再会することはないのであろうか？

▽教師のつぶやき（千三百字まで）

いま、学校現場であえぎつつもらすつぶやき

▽研究論文・実践報告（図表を含めて五千字まで）

生活や教育にかかわり、新鮮でシャープな視点を持つ論文、現実立脚し、体験を深く掘り下げた実践報告を期待します。

▽わたくしから、あなたに

読者・執筆者・編集者の交換室です。はがきでどうぞ

▽十字路は、モニターの方にお願ひしています。が立候補歓迎

▼紙上匿名可。ただし原稿には住所・氏名を明記すること

▼原稿はお返ししませんのでコピーをおとり下さい

▼紙面の都合上、原稿を削らせていただくことがあります

▼掲載の分には薄謝をお送りします

『日本語と女』で、ことばと女の生き方のかかわりを追求された寿岳章子さんが、ご自分の女学校時代の日記の一部を集め、一冊の本を生なされた。Weを支援しようとの私の呼びかけに、寿岳さんが、後から思えばさぞ大変でいらしたろう時期であつたにもかかわらず、まことに敏速かつ的確な反応をお示し下さったことに、痛く感じ入っていた私は、早速その本を取り寄せてみた。

日記の背景となる著者の京都府立一高女時代（十二歳～十七歳）は、二・二六事件～日中全面戦争～第二次世界大戦と、いわば日本が国をあげて坂をころげおちていった時代である。

そのような時代、女学校に入學したばかりの著者、三歳十ヶ月ちがいの小学生の弟、そして三十代後半にさしかかろうとする、英語を読み、共に研究旅行に出かけることもある学者の父・母——この四人を核に、日々の暮らしが営まれている。ある時期には女中が、親類の大学生が、同居し、叔父叔母夫妻や、学校の友人やらが出入りし……。

日記には、女学校の授業や試験、自分の勉強ぶりへの感想、当時の社会情勢への批判、平和への願い、あるいは女の生き方についての意見が述べられており、一人の多感な少女に反映する時代の色を考えさせ、興味深い。しかし、それらの記述の合い間に散りばめられた著者の家族の姿、その暮らしぶりから立ちのぼってくるものの大きさは、私には予想外のことだった。

そこに書かれている一つ一つは、姉きょうだい弟げんかで叱られたことであ

り、家族の病気であり、おいしいものを食べたよろこびであるのだが、どこにでもありそうな光景ながら、どこかしら違っている。いきいきと、メリハリのきいた暮らしぶり、といったらよいのか。

この家族は、実によく働いている。たとえば掃除——クレゾール液で窓ガラスをふき、畳の二度ぶきをする。しかも、父親が箒を持ち、母親がはたきをかけ、子どもが雑巾……というように、一家全員の手で。体を動かし、さっぱりしたところで京都の町に出かけ、家族で映画を楽しむこともある。楽しみは他に、散歩、遠足、おいしいおやつや食事、団樂のおしゃべり……とあり、まじめな勉強ぶり、働きぶりと共に、この一家の柱をなしている。さらに、朝食をそろって食べる努力——一人が何かの用で早く出かけてゆくときも、皆が早起きしてつきあい、「いつてらっしゃい」を言う——が、子どもの目に「あたりまえ」と思えるほど自然になされている。

リベラルなこの一家を支えた特殊な条件、当時と今の時代状況の違いを考慮しつつも、「他家では絶対に見られない風景」を持つところこそがそれぞれの家庭に求められているのではないかと思う。寿岳家においての「家族一緒の朝ごはん、掃除、楽しみ」——そんな何かを、「わが家」で創りつつけること。そんな家庭ではぐくまれる子どもの中に、世の大勢にいたずらに流されぬ「思想」の礎が築かれるのかも知れない。

『過ぎたれど去らぬ日々——わが少女期の日記抄』寿岳章子

・大月書店・一、二〇〇円

小学校四年の純と二年の螢の兄妹は、父黒板五郎の生まれ故郷である北海道富良野市麓郷の庭屋に住むことになる。母令子に恋人が出来、父母が別居したためである。水道もガスも電気もなく、時には熊も出没するという荒野に東京育ちの二人は立ちすくむ。より深く長く都会生活を享受した純は、不便な生活を余儀なくさせる父親に反発し、東京へ帰って母親と住むことを願う。父親がなぜ母親と別れたのかを知っている螢は、父親の気持に寄り添い、野生の狐に餌づけしたり、空をとぶ小鳥にみとれる子供らしい好奇心で新しい環境を楽しみながら順応していく。

英語塾にも通って成績優秀だった純は、数人の生徒しかいない分校生活も気に入らない。担任の涼子先生も、元東京に住んでいたというのにおかしな先生なのだ。試験の時だって友達同士教え合うことを奨励し、間違っている答も直せば丸で、全員いつも百点。「全員百点じゃさ、テストの意味なんてありませんよ。これじゃ勉強する気がわかないよオ」。

幼い純の中で、文明的なものと原始的なもの、合理的思考と単純素朴なものへの思いが相克する。「ぼくの体質には、北海道は合わないと思われ、やはり、東京が、合っていると思われ」とつぶやく純を父親の五郎は説得しようとしなない。否、彼には出来ないのだ。冬になって五郎は、沢から小屋までパイプで水を引こうとする。度重なる失敗の後、ついに樋から滴がボトンと落ち、それが奔流になって流れ落ちるのを見て、純は歓声をあげて螢と共に父親の胸に

とびこむ。「父さん！ やったァ」。毎日幾度となく沢まで水を汲みにいく辛い労働を通じて水のありがたさを体で十分知っていたからこそ、そして父親の下水管工事を逐一見、手伝ってもいたからこそ、二人の子供の感動は大きかった。その夜、はじめて父と息子は和解する。

風車を使つての発電、廃材を用いての丸太小屋作りと、三人は心を合わせ、時に残酷な様相を示す自然と対峙しながら、富良野に定着していく。だが、こでなされているのは、一方的な自然礼讃や、文明への説教じみた否定ではない。

都会から帰ってきた五郎が独力で水道を引いたり発電することを批判する老人笠松杵次。彼は五郎の父親と共に富良野を開拓した人間だ。「昔この村は電気がなかった。そのことでわしらはえらい苦労した。その苦労を子や孫にさせまいと必死に運動して電気をとおした。その電気をお前はひいていらないう」とその杵次は長年飼っていた馬を売ることが出来ない。そしてその馬がジープも走れない猛吹雪に閉じこめられた純たちを助ける。

このドラマは、親子・兄妹における心の絆、教育問題、男女の様々な愛、性、死、マスコミのありようをめぐる今日の問題で織りなされている。文明的なものをめぐる杵次と五郎の葛藤に見られるように、作者倉本聡の複眼はどの場面にも鋭く光る。TVドラマが消耗品扱いされているのが口惜しく思われる作品だった。

(倉本聡脚本・フジTV。理論社よりシナリオ(上・下)刊行中)

テレビ残像

ドラマ『北の国から』

子供も見られる時間帯に再放送するのが望ましいと思われ。

野村 康子



子さんチのね子たち

チー子の由来

さとう けいこ

たことだが、チー子の母猫は、このあたり切つての多産な猫で、実家ではその子猫のもらい手を探すのにうんざりして、家の庭に大鍋をおき、そこに残飯をドッサリ入れて、居候もよし、独立して野良になるもよし、人に拾われれば尚よし、と自然流を決めこんでいたのだそうである。

チー子は生まれて半年近く経っていたのではないかと思うが、食いはぐれ組なのかふうの猫よりやせていた。

私が呼ぶと、すぐやってきて、ちょうど家にあつた煮干しをやると大満足でそれを食べ、その晩はわが家に泊まった。チー子は煮干しが好物だったらしく、以後は、毎日夕方になるとわが家の玄関へやってきて煮干しをもらうのが日課となつた。

エサをもらうお得意さんは他にも二―三軒あつたらしいが、わが家には、他の動物が何もないという安心感があつてか、日中も私がある限りやってきて、夜は必ずわが家で眠るようになった。大きくなつたら、「ミー子」にしようと思つて気軽につけた「チー」の愛称は、そのまま大人猫の名前になっている。

初夏のころわが家に来たチー子は、秋の深

まりとともにすっかり美しい少女になり、碧色の眼は大きく輝いて、女優の山本陽子さんを少女にしたような理知的な(?)美貌ぶりであつた。しかし、翌春、チー子は生涯の大病にかかり、大量の投薬によつてその美貌を失つてしまふのだから、「花の生命は短かくて」という悲哀は、人の世ばかりではない。

子どものころのチー子で思い出深いのは、兄嫁が来た時のことである。彼女は無類の猫好きで、チー子にも、するめイカを口で囓んで手にのせて食べさせてやつた。チー子はすっかりその純子おばちゃんが入つて、彼女が帰る時、いつまでもいつまでも握つたいに後を追つてゆくのである。大通りに出てはあぶないからと、とうとう途中で私が抱いて手を振つて兄嫁を見送つた。その後も、チー子は囓んでやわらかくしたイカが大好物になつてしまつたのである。

少女のころのチー子は半ば野生化していて、セミの羽根やハエが好物だつた。家の中に飛んでいるハエは六尺(一・八m)の高さでも一飛びでジャンプしてつかまえた。あまりの正確さに、その年、我が家のハエ族は全滅の憂き目をみたのである。

わが家の猫族の長は、チーという母猫である。チー子は、三年前に、公園のそばの小さなわが家を建設中に、隣の空地に遊びに来ていた子猫であつた。

野良のわりには人慣れた猫で、誰が呼んでも返事をする愛想のいいミケ猫である。隣家のおばあちゃんが、やせっぽちな猫がいるよ、と言うほどほっそりしていた。後で知っ



父よ、母よ、教師よ。

半田 たつ子

もし、十七歳の私が、当時のままで現在を生きているなら——。
いま、十七歳の次女に向かって、同じ年ごろの私が、苛酷な戦い
の中でどんなに真実を求めていたかを語っている私。空襲の合い間
を縫って本を読み、ピアノを弾き、青春をひたむきに、ひたすらに
生きたと語っている私。言外に「それなのに あなたは」と匂わせ
て。

ところが、十七歳の私には動かし難い事実があった。それに気づ
いたのは、向井承子著『小児病棟の子どもたち』（晶文社刊）を読
んだからである。十七歳の私は、肺浸潤で学校を長期欠席していた。
妹は学童疎開、父も胃潰瘍で入院、母一人に言葉に尽くせぬ心労を
負わせて。

お子さんがある大病院の小児病棟に入院した時、向井さんはそこ
に「魔の時間帯」を見た。常識外れに早い夕食の後、子どもたちは
キリギリスの共喰い現象さながらに、陰湿ないじめ合いをする。向
井さんの心に棘が刺さった。小児病棟にこだわり、文献を漁り、関

係者に合ううちに国立香川病院を知る。そこにもぐりこんで、人間、
教育、医療を結ぶ鋭い省察をルポにまとめ上げられたのがこの本だ。
久保融院長は言う。

「人間ではなくて、部分をみるのがいまの医療や、ますます細分化
しとります。それを一度止めないかん。そうせな、人間と人間の関
係が医療の世界から消えてしまっています」。

「子どもはできるだけ自由にさせて育てたいんですわ。動物園でも
放し飼いの方がいい。まして人間でしょう。私は拘束して治る病氣
はあり得んと思うとります」。

いよいよ駄目やいうときでも、窓際から雲の流れは見たいわねえ。
それが患者、人間の心や。ここは子どもの医療ですから、子どもを
中心に考えんといかんです。間違っても大人の都合にはめてはい
けない。できるだけ子どもの側に立たなければと言ひ聞かせなけれ
ばいけませんわなあ」。

「安静・栄養・大気」しか治療法がなかった時代の結核医として、
絶望の中から生きる証を患者と共に求めた人の言葉である。衝撃を
受けた。更に「医療」が「教育」に置きかえられるのが二重のシ
ョックだった。

「自分より弱いものの上に乗って平然としているのは役人的医師で
す。子どもの立場に立たないで平然とできる。そんな権利の主張は
医師には認められん」。「医師」を「父母」・「教師」に置きかえても、
通用するではないか——。

豪華な建物と設備、最新の医療技術を誇る東京の大病院。そのこ
小児病棟では「病氣の子ども」という二重の意味で自己実現を抑え
られた者たちが、互いをさいなめ合うだけを愉しみに時を過ごす。

一方、普通寺市の町外れにある香川病院では、ネフローゼの少年がデザイナーとしてプロの技術をもって巣立つ。病気になるのは人間のほんの一部なのだ。技術を身につける能力まで病んではいないし、前向きに生きる心までも病んではならないのだ、と他の子どもたちに視野を開かせて。

私は、十七歳になってすぐの三月九日夜、紅蓮の炎が下町を嘗め尽くした東京大空襲の時発病した。何の特効薬もなかったが、母の身を粉にした買い出しによる栄養補給と、いまよりずっと美しかった空気のおかげで、安静にしているだけで全快した。やがて敗戦。秋に学校が再開した時、もとのクラスにすんなり復学できた。学校は工場と化し、勉強らしいものはなかったのだからとの理由で。

向井さんの本には、慢性腎疾患で入院している十六、七歳の少年たちが、虚無感を漂わせ、教科書を開いてはベッドに叩きつけ、ふとんをかぶりケモノのようにうなっている描写がある。教科書はシャバという彼岸のもの、こちら岸の世界では無用。だが教科書が代表するシャバが妬けてならないのだ。

もし、十七歳の私が、当時のままで現在を生きているなら——いま、娘に話すように、ひたむきに、ひたすらに真実を求めて生きられたらどうか？ 人一倍傷つきやすい神経やプライドが、競争社会からのドロップアウトに耐えられたかどうか。自信はまるでない。覚束ない足どりで二人の娘を育ててきた。長女を育てた時は、日本に経済発展をめざす活力が、よかれ悪しかれ漲っていた。私たち親は若く、子育てに夢と情熱をかけた。怜悯な娘も期待に应えて努力を積み、アタックするすべてが、思い通りに達成できた。

次女を生む前に、私は男の子を死産していた。健康なうぶ声だけ

で満足し、「めぐみ」と名付けた。神から恵まれた生命との実感からだ。親たちは転居し、転職した。三十代半ばを過ぎ、子育てに醒めた眼を持っていた。日本の経済成長は頂点を極めてかげりを見せ、歪みが噴出、退廃的なムードもかし出されていた。

次女は、ものの本質をとらえる鋭敏な感受性を持ち、人間関係に心し、福祉を一生の仕事にしたいと早い時期に決意していた。それは現在の公教育には現れにくい資質であった。「学校の勉強」が、人間の部分であり、全てではないこと、次女がまるごとの人間性の中にキラリと光るものを持っていることを認めていながら、親たちの「大人の都合」は、よくできた長女に比べて嘆息をついてしまうのだった。長女は「親に理解がありすぎるのも問題だ」と批判した。この何年か私の心は揺れ続けた。

この個人的な苦悩は、いま普遍的な問題でもある。私はWeの第二号に「父よ、母よ、教師よ」を掲げたのである。次女の立場に立ちたい、と願った。しかし、それは至難だった。十七歳の私が、当時のままでいまを生きているとするなら、半年も学校を休んで、ひたむきに、ひたすらに、真実を求め続けることは不可能だということだけ、やっとわかった。

理不尽な状況の中で、それでも自分の選んだ仕事に就くためには、現実への適応もやむなしと割り切って、「ふあいとあるのみ！」と次女は「春期講習」に出かけている。

私が子どもの頃戦争があった。その戦いに勝つことがすべての前提だった。戦い敗れた日、一切は潰れた。いま、子どもたちは受験戦争に勝つことがすべての前提となっている。父も、母も、教師も、それでよいとは思っていない。大人はいま、何をなすべきか？

◆資料◆「神奈川婦人の地位向上プラン(仮称)」

基本構想・基本計画案

第1編 基本構想

第1章 基本理念

1 人権尊重と平和をめざして

平和な社会は、すべての人々の願いであり、とりわけ生命を生み出す母なる性を持つ女性の最大の願いです。そして、平和の基盤は、すべての人々が人間として等しく尊重されるところにあります。

第二次世界大戦後、新しく発足した国際連合で採択された「人権に関する世界宣言」(一九四八年採択)は、大戦の惨禍が人権のじゅうりん、外国侵略に発したことの教訓をふまえて、人権こそ平和の基礎であるとの認識に立ち、すべての人間の尊厳と権利に関する平等、性・人種差別などの禁止を定めました。

神奈川婦人の地位向上プラン策定委員会は二月、みだしの案をまとめた。平易なだれにでも納得できる文章で、現時点における問題をふまえ、将来への展望と具体的な構想を盛りこんだりっぱな内容である。ここには、特に「We」の願いと関連深い箇所のみを抜粋し紹介する。いま県の行動計画を策定中のところは、ぜひ神奈川のプランを参考にしてほしい。

沿って、国際人権規約を原動力として実現したものです。

「国際人権規約」(66年採択、76年発効、79年日本批准)は、「人民の自決権」と「男女の平等権」を重視しています。この規約は、先進工業諸国と発展途上国、大国と小国等の間の侵略・差別と共に、男女の性差別を廃し、人権の確立こそ平和の基盤とする国連の理念を具体化したものといえます。

「婦人に対する差別撤廃宣言」(67年採択)をはじめ、平等・発展・平和をスローガンとしてスタートした「国際婦人年」(75年)、「国連婦人の十年」(76～85年)、さらに「婦人に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」(79年採択、81年発効、日本は80年署名)等もまた、国連の人権と平和の理念に

日本国憲法は、主権在民、基本的人権の尊重・恒久平和を基本理念として、第二次世界大戦終結の翌年(46年、昭和21年)公布されました。ここには、男女平等をふくむ「人権」と「平和」が、相互に不可分の条件であることが示されています。それは、「世界の婦人憲法」といわれる婦人差別撤廃条約の根底にある、人権と平和の理念と共通するものです。性差別をなくし、男女平等を実効あるものとするための諸計画・方策・運動等は、単なる「女権拡張」の次元でとらえることなく、広く世界の人々の人権尊重と平和をめざす視野の中に据えられるべきです。

以上の基本認識に立って、「神奈川婦人の地位向上プラン（仮称）」（以下、「本プラン」という）は、世界的歴史的視野において、21世紀を展望し、人権と平和の理念のもとに、日本国憲法と婦人差別撤廃条約に拠って策定します。

2 地域社会の自治と連帯をめざして

3 女性の自立と社会参加をめざして（略）

第2章 基本方向

1 伝統的固定的性別役割分業に基づく社会通念・制度・慣行等の是正

2 女性の自立の基盤として、働く権利の保障

障

3 母性の尊重と社会的評価・保障の促進（略）

4 家庭責任に対する男女ならびに社会の共同分担の促進

子の養育・家事・老人介護等をふくめて家庭生活に伴う責任は、極めて重要です。従来、家庭責任は女性が専ら果たしてきましたが、それを当然とする社会の固定的な性別役割通念は、家庭責任の重要性に対して十分に認識・評価せず、同時に女性の自立と社会参加を阻む要因となっています。一方、ことに近年、都市化、核家族化、高齢化等の進行にとま

って、女性が負う家庭責任はますます過重なものとなりつつあり、女性自身のみならず、家庭生活の安定にとっても黙視できない問題となっています。また、男女が家庭責任を分担協力しても、なお家庭内では十分果たし得ない状況は今後も進行することが予測されています。

従って、家庭責任は男女（夫婦・父母等）が協力して共に分担し、かつ社会も援助・分担すべきものとして、男女の意識や社会通念の是正をはかるとともに、保育・老人介護等に対する社会的諸方策の充実をはかることが必要です。

家庭責任を男女が分担・協力する方向は、子どもにとって父性と母性の協力という望ましい養育をすすめるなど、家族の人間的な営みの場として家庭の安定をはかるためにも望まれます。また、社会的諸方策をすすめるにあたっては、家族員の自助努力を過大に期待要請することなく、個人の主体的な生き方・女性の自立を尊重することが必要です。

5 県民男女の主体的参加と行政の総合的施策による地域社会の形成の促進（略）

第2編 基本計画

第2章 社会参加（略）

第3章 教育

1 基本的考え方

1 男女平等教育の推進（略）

2 自立教育の推進

男女が共に自らの生き方を主体的に選択し、一人の人間として自立するための能力を育てることは、教育の重要な目的です。しかしながら、伝統的固定的性別役割分業観はいまなお社会の各層に根強く、とりわけ女性に対しては、家庭教育・学校教育・社会教育等を通して職業的能力の開発をふくめて自立をめざす視点が乏しいと言わざるを得ません。

とりわけ、明治以降第二次世界大戦終結にいたるまでのわが国の女子教育方針には、家制度を支える良妻賢母主義を中心として女性の自立を阻害した歴史があります。戦争終結後、教育の民主化がはかられ現在にいたる経過には評価すべき面が多いとはいえ例えば「高校・家庭一般」教科が当初の男女選択制から女子のみ必修制へ推移したように、再び女子特性教育が重視されるに至っています。

神奈川県では公私立高校卒業後の女子の進学者の6割が短大に進んでおり（男子は9割以上が四年制大学）、学部を選択においても「人文」・「教育」・「家政」に集中する傾向が

みられます。また、「県政世論調査」(1980年9月)によると社会教育の分野でも女性は男性に比べ「趣味」・「家政」・「子供の教育」を学習する者が多く、従来の女性の役割の枠内に片寄っている状況です。

女子教育の歴史および現状を認識し、教育において性別役割分業の是正をはかり、男女が一人の人間として自立するための資質・能力の開発・向上をめざして積極的に諸方策がすすめられなければなりません。

3 地域社会形成者としての学習活動の推進
4 国際的視野にたつ平和教育の推進(略)

II 基本方策

1 学校教育における男女平等教育の推進
(1) 男女平等教育の推進にあたり、男女共学の徹底をはかるため、公立学校の男女入学定員の均衡等について、積極的な検討をすすめるべきです。

(2) 教育委員会に、男女平等教育推進のための協議機関を設け、広く県民の参加をはかりながら平等教育について必要な施策の検討をすすめるべきです。

(3) 婦人問題について、児童・生徒の理解を深めるために、副読本などの教材や教師用の手引書を作成し、効果的に活用すると

もに、視聴覚教材についてもプログラムの中に婦人問題を取りあげる必要があります。

(4) 中学・高校の「技術・家庭」「家庭一般」を、家庭責任は男女が固定的な性役割にと

らわれず分担協力するとの視点から共修・必修とし、かつ内容の充実をはかることを国に要請すると共に、その推進をはかる必要があります。(福祉 1—(11)参照)

(5) (略)

(6) 男女生徒が労働の権利に対する認識を深めるとともに個性と能力を伸ばして、固定的な性別役割にとられずに、職業選択を行えるよう、教育全般にわたって配慮すべきです。進路指導にあたっては、職業は男女共に自立の基礎であるという視点に立ち、特に女子生徒に対して職業についての情報をととのえ、職業意識を高めるように努めるべきです。(労働 3—(1)(2)参照)

(7) 高等教育において婦人問題に関する講座が開設されるよう、県内の大学及び関係機関に働きかける必要があります。

(8) (略)

(9) 教育界の女性登用と教育関係者の意識啓

発

3 地域文化の創造

4 長期展望にたつ生涯学習・社会教育の充実

5 「人間関係の原点としての性」についての教育の推進

6 家庭における平等教育の推進

7 人権教育・平和教育の確立

第4章 労働

第5章 福祉・健康・家庭

II 基本方策

1 新しい価値観と生活者意識の形成

(11) 中学・高校の「技術・家庭」「家庭一般」において、性・結婚・保育など人間の問題や公害・自然保護・生活環境等の問題が十分にとりあげられるよう教育内容を検討すること、また、男女が共にこれらを学べるよう男女共修の体制を確立することを国に要請し、この推進につとめることが必要です。

(12) 生活技術あるいは新しいライフスタイルや生活文化などについての生活者教育を充実させ、消費者運動を援助し、これらの活動に対してとくに男性の積極的参加が得られるよう、啓発活動をすすめるべきです。

ル十字路ル

北海道

○戦争体験訴えるウィルタの母
一月十七日、北見市のユースセンターで、オホーツク民衆史講座主催の「五民族（アイヌ、ウィルタ、中国、朝鮮、日本）連帯交流集会」が開かれた。

網走市の北方少数民族資料館「ジャッカ・ドフニ」の運営委員で、展示品を作っている北川アイ子さん(84)は、急速にふくれる防衛予算、日本合同軍事大演習、「ソ連脅威」の大合唱、を耳にして「以前なら、まさか、ですんでいたのに、このごろの『軍靴の音』にひょっとしたら、と思うようになった」「ウィルタを、しゃにむに戦争に引き込み、命を奪い、同族を散り散りにさせながら、なんの補償もしない日本。いまだにシシヤ（日本人）には、打ちとけられないが、このごろはそんなこともいつていられない。ウィルタの母として子供を守らねば、日本人に戦争の悲惨さを知ってもらわねば」と改めて戦争反対を心に誓い、戦争体験を語った。（朝日、1・24、山口里子）

岩手
○母子・父子家庭介護人派遣制度新設
二月六日まとまった五十七年度県当初予算

案によると「母子・父子家庭介護人派遣制度」が新設される。予算額は四〇万円と少額だが「在宅福祉の前進」と期待されている。

対象は、就学前の乳幼児を抱え、他に子供世話をする人手のない母子・父子家庭。親が病気やけがで倒れた場合、介護人を派遣、子供の保育や食事の支度、掃除、洗濯、買い物など身の回りの世話をする。派遣期間は一週間以内。病気が長期化する場合は、乳児院や養護施設で子供を預かる制度があり、「介護人派遣は緊急を要する際の行政措置」（県福祉部）という。（岩手日報、2・7、押切郁）

新潟

○婦人問題推進協、県に意見書

県婦人問題推進協議会（大井ヒデ会長）は二月十六日、同協議会起算委員会のまとめた「婦人の地位向上の社会参加のための意見」を承認、県に提出した。協議会は女性を中心とした有識者一二名で構成され、一昨年七月に設置された。

意見書は、婦人の社会参加促進のため①自立と社会参加②男女協力による活力ある社会づくり③性による固定的な役割分担意識の社会慣習の改善―を基本認識に、行政分野に対し①各種審議会等に婦人の登用促進②県行政の婦人職員登用促進③家庭婦人の社会参加意

欲を受け入れる社会的条件の整備―などを要求している。（新潟日報、2・17、山口久子）

栃木

○「婦人のための市総合計画」宇都宮

宇都宮市婦人問題懇話会は二月十九日、県内の市町村では初めての「婦人のための市総合計画」をまとめた。男女平等と婦人の社会的地位の向上を図るため、同計画は①男女平等の意識づくり②社会参加の促進③働きやすい条件づくり、など五つの柱からなり、婦人会館の建設促進、市の政策決定への参加など、五七施策九八事業を盛り込んでいる。期間は81～85年まで。（下野新聞、2・20、坂本昌子）

東京

○中野区教育委員会、区民投票から一年

中野区民の意思を反映した新しい教育委員会が生まれてから一年。教育委員会はどうか変わったか。

第一に会議の回数が増え、その内容が変わった。区民投票後、地域へ自ら入ってじっくり話し合いをしようとする教育委員や、会議に訪れるたくさんの方の姿がみられた。

第二に、教育委員と、学校や区民を結ぶパイプが太くなった。区民との対話集会など。

しかし、区の教育委員会や教育委員の権限は限られているため、教職員の人事権や教科書採択については、現在もかわることがで

きない。この限られた権限の中で、何ができるか。区民が区民投票運動の教育論議を続け、教育委員を支えていくことが大切。

(中野区報、2・5、仲田香代子)

愛知 ○主婦が描いた名古屋女性史

名古屋に住む主婦たち「名古屋の女を記録する会」のメンバーが、名古屋の歴史に名前を残す平安から明治までの女性一人の生涯を四年がかりで掘り起こした。『名古屋の文化を育てた女たち』と題した手書き印刷の本で上巻が完成、下巻も近く発行する。

同会は、名古屋市婦人会館の78年度講座「なごやの」の受講仲間、講座で始めた調査取材を引き継ぐ形で発足したもの。

(中日、2・21、山田和枝)

岐阜 ○小中学校の勸奨退職、男女平等に

県教委は、教員の勸奨退職年齢の男女格差は正の第一歩として81年度、小、中学校の女の先生の勸奨退職年齢を一歳引き上げ五九歳とし、小、中学校では男女平等が実現した。

しかし、高校ではまだ男の先生六〇歳、女の先生五九歳。県教委は、なるべく早く高校の「男女平等」も実現したいとしている。

こうした男女格差は、旧制の学校の修学年数の違いなどから、慣例になったという。

(朝日、2・16、小森ひとみ)

大阪 ○男女差別賃金をなくす大阪集会

仕事はそう違わないのに女の賃金はなぜ男の半分なのかー男女差別賃金をテーマにしたシンポジウム「女がいきいき働くときー第三回男女差別賃金をなくす大阪集会」が二月六日、大阪市の北市民会館で開催された。主催は、労働婦人や女性弁護士が集まりである男女差別賃金をなくす大阪連絡会。

シンポジウムでは、パネラーの西野万喜子

(社会保険支払基金)、増田有喜(日本ハム労組書記長)、玉井英子(労働省大阪婦人少年室長)、本多淳亮(大阪市大教授)の四氏が問題提起。その後、参加者が活発に意見交流した。本多氏は「婦人の差別をなくし、地位向上をはかることは、日本の平和を守ることにともながる」と語った。

(赤旗、2・7、由良サダコ)

広島 ○教育を開く、地域の中の大学

生涯教育云々が叫ばれている昨今、大学は地域へどのように開いていくべきか。

広島大学(高卒以上)、岡山大学(大卒以上)いずれも有給者を対象の夜間大学が全国に先がけ既に開校されている。

この他、女性対象の公開講座として、広島

県立女子大、四十七年開講で女性の生き方をめぐるテーマと地域社会の問題の二つを組み合わせたのが特徴。

宇部短大では五十一年より「若いお母さんの教室」を教育委員会と共催で開講。いずれも生涯教育を目指したものであるが、受講者は積極的な学習意欲がみられるが惜しむらくは知識の切り売りに終わっている。しかし象牙の塔が地域とどのようにかわって共存していくべきか目下模索中。(国重美恵子)

香川 ○「お年寄りの知恵袋集」発行

「お年寄りの知恵袋集」句を食べる」(B4判、八〇ページ)が香川県綾歌郡綾南町の生活改善クラブ(中西タケノ会長)から二月十九日、発行される。失われてゆく食べものの四季を、核家族時代の食卓によみがえらせようと、地元のおばあちゃんから聞き書きしたもので、ガリ版刷りの冊子。

四〇歳代中心のクラブ員六一四人のうち九割が農家の主婦。七月から農作業の合間を縫って、町内のお年寄りの家へ足を運び、時には公民館などに招き、材料持ち寄りの料理実習や試食会を開いた。

「こんな料理もあるのか、と新発見の連続」だったという。(朝日、2・19、坂井延代)

WATAKUSHI KARA ANATANI

▼どちらが正しいかという絶対的基準がないとき——ほとんどの場合そうだと思いますが——相手に「こうすべきだ」と迫るのではなく、「私はこうしたい」と言えるものを創ることが、今さし迫って必要とされているように思えます。しかし、学校という組織の中で「私」を生かすことはなかなかたいへんなことです。

一つには、学校が、教育を保障する空間として用意されているのではなく、制度として用意されているからだと思います。制度は、法律や条例、規則といったものを伴います。その制度を離れて存在できないという制約が、教える内容をつまらなくさせ、教える人をつまらなくさせているのではないのでしょうか。教える内容、時間などの制限は、その枠内での創意工夫に向かわせる一方、決められたことを教えればいいのだ、というノルマ主義的意識を広範に生み出しているように思えます。そうしていれば、身分的保障は得られるのですから。

二つには、「統一」を好む体質が、教育の骨の髄までしみ込んでいるからでしょう。それぞれ教員が「私はこう思う」「私はこうします」と言えば、他の人から常に、思っていること、していることに対する批判を受ける覚悟をしなければなりません。「学級通信を出す」「クラス独自の催しをする」「カリキュラムにないことをする」など、ある学級だけですれば、ことの善悪はともかく、学年の（学校の）統一を破った」というレッテルを貼られることは、日常茶飯事です。逆に言えば、皆と同じにやっていさえすれば、後指をさされずにすむ、ということです。

三つには、統一を好む教育の体質を利用する管理体制が強固に作られつつあるということでしょう。「あの人とは話していいけど、あの人と話をするとは危険ですよ。ああいう人と行動を共にしていると、転任する時なかなか希望する学校に行けなくてね……」などという新卒教育が、私の勤務する学校では行われています。「管理職から悪く思われたくない」という意識がある中では、「私はこう思います」「私はこうします」という意志は消し去られていきます。

敗戦を境に、昨日までは軍国主義を唱えた

がら、掌を返すように民主主義を唱えた教員への失望はよく語られます。しかし、どうしてそういう教員の精神構造がつくられてしまったのか。自分がもし当時の教員であったとしたら、その過ちを犯さなかったと言えるのか。今教員をしている自分は、再び戦前を作っているのではないか、という問いが、私にはあります。硬直した教員の精神の中で、殺されるのは子どもであり、「私」です。困難な状況であっても、やはり「私はこうします」というものを創りたいと願います。（T・I）

▼藤沢で開かれた「半田たつ子編集長を囲む会」には、今まで家庭科にあまり縁のなかった方たちも多数集まりましたので、その方たちのご意見に耳を傾けました。

家庭科はいつも脇役。主要教科とも言われず受験科目でもなく、「頭の悪い女が選ぶ家庭科」という社会通念を肯定して、私は家庭科教師である事を恥じていました。なぜ家庭科に背を向けるのかと管理職に言われるまでもなく、私自身背を向けていることがあるのに気付いています。しかし、今日の会は多くの分野の人々を巻き込んで、人間が共に生きるために家庭科が主役になっているような晴れがましさを感じました。（神奈川 青山禎子）

ア ン テ ナ

☆母性保護、まだまだ

民間主要労組で構成している政策推進労組会議（26単産、500万人）は3月7日、229企業の婦人の労働条件調査をまとめた。

婦人組合員の平均年齢27.8歳、勤続7.5年。所定内賃金の企業別平均は最高164,600円、最低96,073円、総平均130,444円。

年休は勤続1年後の平均付与日数11日。生理休暇は51.6%で「必要日数」。だが賃金保障は1日目88.6%、2日目66.7%、3日目2.9%。

産前、産後休暇は、法定の各6週間としているのが産前70.2%、産後62.7%。6週間を上回る休暇を認めている企業は産前29.8%、産後37.3%。妊娠障害休暇があるのは全体の21.8%、その日数は過半数が14日。

妊娠中の通院休暇、通院時間を設けているのは24.9%、妊婦の時差出勤が認められているのは10%。出産、育児に伴う退職後、再雇用制度のある企業7.9%。看護休暇も5.2%の企業だけ。（3・8付）

☆食品添加物、認可制導入を検討

厚生省は昭和23年制定の食品衛生法の改定作業を進めているが、その中で化学的合成食品添加物について現行の国による指定制に加え医薬品と同じ認可制の導入を検討中。添加物を開発した企業は安全性データを添えて申請、同省で審査・承認するシステムになる。

法律改定は同法が、現在の食品加工技術やそれに伴う食品公害などに対応できなくなったことから、同省で58、59年をめどに作業を進め、同時に56年から5か年計画で食品添加物に対する行政システムを見直している。

食品公害に取り組む藤原邦達・京都市衛生研究所主幹ら研究者、消費者団体が問題視「認可制は添加物の増加を招く」と反対運動を起こしている。（2・17付）

☆読ませない高校図書館——愛知

愛知県の県立高校で学校図書館の本の購入が学校長らのチェックに遭い、購入禁止措置がとられていることが同県高校教職員組合の調査でわかった。

同県では'75年に学校図書館図書購入費の全額公費負担を実施。司書や図書選定委員

会などで審議して本を購入しているが、購入予算は県費執行の形となるため必ず校長の承認がいる。『禁書』としてあげられたのは回答のあった81校中13校で58冊。

「窓ぎわのトットちゃん」黒柳徹子著—芸能人の書いた本はふさわしくない。「妻たちの二・二六事件」沢地久枝著、「女たちの明日」もろさわよう子編著—『女』はいけない。「東京が燃えた日」早乙女勝元著—戦争を扱っていけない。（3・15付）

☆「洗濯洗剤について」調査

昨年9月実施の第12回国民生活動向調査（回収率85.2%）「洗濯用洗剤について」の調査結果が国民生活センターから発表された。対象は全国の人口5万人以上の都市に住む主婦3,000人。

洗剤の種類—「無リンの合成洗剤」使用41.8%、「有リンの合成洗剤」37.4%、「液体の合成洗剤」4.7%で、合成洗剤の使用率は、83.9%。「粉せっけん」使用は12.1%。

使用理由（複数回答）—「汚れがよく落ちると思うから」48.1%と最も多い。特に合成洗剤派に多く、「液体」63.0%、「無リン」53.2%、「有リン」47.9%。また「有リン」では「値段を値引きしているから」35.8%、「もらいものがあるから」33.8%。「粉せっけん」派は「川や湖などの環境汚染・公害の心配がないから」67.4%、「手あれなど安全性に不安がないから」64.5%。

「粉せっけん」の使用開始時期は、「滋賀県に洗剤条例ができた（79年10月）以後」35.7%とトップ。

安全性などへの認識—「合成洗剤」の安全性に対し「全く心配ないと思う」16.7%。「有リン」使用者でも21.5%。なんらかの「問題がある」と考えている主婦は53.5%。「粉せっけん」派では「問題あり」76.5%。

「有リンの合成洗剤が環境汚染の原因の一つである」という意見に対し「その通りだと思う」66.5%。「そう思わない」4.8%。「有リン」派も「その通り」と答えているのは59.9%、「そう思わない」6.7%。

「今後使用する洗濯用洗剤の種類を変えるか」に対し「変えない」58.2%。「粉せっけん」派85.2%、「無リン」67.2%、「液体」54.6%、「有リン」40.2%。（3・16付）

◇ 3月13日、土曜日。ポカポカと暖かく、
とっても空のきれいな日でした。発送作業
は15人の方が集まって下さり、拍子抜
けする程早く終わりました。午後、封筒に
はいった雑誌を大きな段ボール箱につめ、
台付車に乗せて手で押していくもの、自転
車の荷台につんでいくもの、あとは全員両
手に持ち、歩いて7分位の新宿郵便局に運
んでいきました。久しぶりの新宿の空を見
たような気がしました。ありがとう。

◇ Weの会の集りで、栗原実抄さんが一足
先に帰ることになりました。ちょっとカゼ
ぎみというのでしっかりと身仕度。介助の
方が手袋をはめようとしたので、わたしも
片方をとってはめようと思いました。片方
の手袋を5本の指にはめることがどれだけ
大変なことか、どれだけ全神経を集中しな
ければならないか、初めて知りました。能
率的に良い、という思いが無意識のうちに
流れていたのです。ハッとしました。栗原さ
ん、ありがとう。

◇ Weのトレーナーが作られています。
トップはますのきよしさん。ご家族で着て
います。次は、リュックサックで問屋にト
レーナーを買いに行き、シルクスクリーン
で印刷という本格派、神奈川の根本昌有さ
んたち。とてもステキです。(馬場)

▽ どうしてでしょう。不思議です。Weの
こととなると、みんな優しいのです。

「戦争への道を許さない女たちの集会」が
日比谷公園野外音楽堂で開かれた昨年12月
6日、小田亜佐子さんが作って下さった、
Weのビラまきをしました。まっすぐの髪
を肩で切りそろえた小柄な小田さんの「こ
んにちわ! ウィです」。さわやかな声に、
「うい」って名付けてはんとよかった、
と思いました。

▽ 創刊号の発送作業をしたのは婦選会館。
73年12月8日、市川房枝先生の肝入りで、
「家庭科教育検討会」が、81年11月14日、
「Weを支援する会」が開かれた部屋です。
驚いたことに、次の日から反響が続く屈
きます。祝電も。どうして皆さん、こんなに
優しいのでしょうか。ありがとう!

▽ 岡村益氏は「とうとう生まれましたね。
待望久しかった、あなたの私たちの子ども
さん」と、Weを呼んで下さいました。そ
うWeは私たちの赤ちゃんなのです。だか
らみんな優しいのですね。あなたはWeの
父、あなたはWeの母、あなたはWeの教
師です。Weの成長に、厳しく暖い目を注
いで下さいますように。

▽ 次号のテーマは「共に生きる」です。
(半田)

3 (8) ④ 0 3 3 7 0 0 2
い合わせず、婦選会館へ
記録です。価五百円、問
10省庁を呼んで婦人政策
について質問した貴重な
省・外務省・総理府など
全国組織48団体が、文部
省に質問する会の記録
重点目標について関係各
省に質問する会の記録
一層のご活躍を!
▽ 「国内行動計画」後期
重点目標について関係各
省に質問する会の記録
金森さんご苦労さま。

▽ 読売新聞社で、初の女
性部長を経て編集委員と
して活躍された金森トシ
エ氏は三月末で退社。四
月から神奈川県の婦人問
題担当参事に就任。本号
に資料として抜粋掲載し
た神奈川県の「婦人行動
計画」策定委員長として
立派な内容の計画を練り
上げられた氏が、実施に
際して、その担当官にな
られたことは力強い。
金森さんご苦労さま。

Weの会を知板

Vol. 1 No. 2 1982年4月15日発行

新しい家庭科— uk ¥500

(年間予約購読料 ¥5,000)

編集兼 半田たつ子

発行人 (有) ウイ書房

〒181 東京都三鷹市中原4-4-22
☎0422(46)3608 振替東京6-59867

印刷所 (有) 岩佐印刷所 〒112 文京区春日1-6-7

We の仲間になって下さい

We の仲間をふやして下さい

雑誌の購入には、①直接予約購読②書店予約購読③書店での販売の三方法がありますが、本誌は、当初①の方を募り、核になっていただきます。②③については、現在下記書店で、便宜を計って下さいます。誰でもいつでも書店でWeを購入できるようにするには、何よりもWeの仲間をふやし、実績を作ることが肝要です。あなたのお力添えをお願いします。

予約購読料一年間 5,000円 (送料を含む、1部 500円)
ご送金は、郵便振替が最も好都合です (東京 6-59867)。
又は、平和相互銀行つつじが丘支店、普通預金0698412
(有) ウイ書房

—We の取り扱い店一覧—

お近くの書店に、ぜひ
お声をかけて下さい

(3月15日現在)

仙 台	こどもの本のみせブーの家	0222(25)4762
福 島	岩瀬書店	0245(23)0366
福 島	福島大学生協	0245(48)5141
浦 和	須原屋	0488(22)5321
東 京	ビッビ	03(295)2580
東京(小金井市)	渡辺書店	0423(81)9651
名古屋	ウニタ書店	052(731)1380
刈 谷	愛知教育大学生協	0566(36)2404
金 沢	金沢大学生協	0762(62)4281
金 沢	白山書店	0762(44)4017
福 井	ひまわり書店	0776(22)5540
福 井	じっぷじっぷ	0776(25)0516
大 阪	旭屋書店	06(313)1191
京 都	松香堂書店	075(441)6905
山 口	白藤書店	0839(25)1212
宮 崎	宮崎大学生協	0985(29)1648

Vol.1 No.2 1982年4月15日発行

編集兼
発行人

新しい家庭科— ¥500

発行所/(有)ウイ書房

(年間予約購読料 ¥5,000)

〒181 東京都三鷹市中原4-4-22

☎0422(46)3608 振替東京6-59867

印刷所/(有)岩佐印刷所